

混沌が異世界から来るそうですよ？

クトゥルフ時計



## 目次

YES!ウサギが呼びました!

第一話	「這いよる混沌が今行くぞ」	1
第二話	「ケンカ売る相手は」	9
第三話	「まさかお前」	23
第四話	「俺に正気を問うことほど」	34
第五話	「これから見せるのは」	46
第六話	「これが俺のやり方だ」	56
第七話	「非情になれよ」	65
第八話	「ベラベラうつせえんだよ」	75
第九話	「俺は優しいからさ」	87
第十話	「仕込みは上々だ」	96
第十一話	「わかるようにしてないもの」	109
第十二話	「神とはなんだ?」	120
第十三話	「アンサー」	129
第十四話	「取引をしないか?」	137
第十五話	「その獣の指先は」	153
第十六話	「そりやあもう死にたいくらいに」	162
第十七話	「ワカラナイ」	170
第十八話	「これは全部」	179
第十九話	「殺せ」	187
第二十話	「だが後悔はするな」	198
第二十一話	「久し振りだな」	207
第二十二話	「それでこそお前だよ」	214
第二十三話	「ちよつとだけムカついたかな」	221

第二十四話 「どんな気分？」

229

第二十五話 「これでいいのか」

236

あら、魔王襲来のお知らせ？

第二十六話 「鼠はもう」

243

第二十七話 「お祭り、楽しむといい」

250

YES!ウサギが呼びました!

第一話 「這いよる混沌が今行くぞ」

その神は無貌であつた。

時には人間、時には王、時には怪物、時には人を惑わす神として、人々の前に姿を現した。

その顔には常に嘲るような嘲笑を浮かべ、遊ぶように世界を引つ掻きまわした。

行く先々で見つけた人間に手に余る技術を授け、狂気の果てに死んで行く姿を見ては楽しんだ。

ふらりと現れ、置き土産に混沌を残して消える。

人々はそんな神を畏怖を込めてこう呼んだ。

這いよる混沌——ニヤルラトホテプと。



——歪んだ様々な色を発し続ける宮殿、狂ったような音楽と無数の異形で彩られたそこに、『それ』は突然現れた。人間で言う足や腕にあたる部分には無数の触手が不規則に生え、その体は真っ黒、顔だと思われる部分はその体以上に黒い、深い黒色の虚無が覗く。一目で人ならざるモノだとわかるそれは、虚無にあるはずのない口をゆつくりと開き、宮殿の最奥にある玉座に座る巨大な異形へと言葉を放つ。

「ただいま戻りました、我が主」

その言葉に反応したのか、泡立ち、伸縮を繰り返していたその異形はその動作を一瞬止める。しかし、それもすぐに再開し、宮殿には更なる狂気の音楽が鳴り響く。

意味の無い伸縮を繰り返すこの異形こそが、クトゥルフ神話において、宇宙の創造と破壊をされると言われる盲目白痴の魔王、アザトース。無から生まれ、宇宙の誕生以前からこの世界に君臨し続ける唯一無二の存在。その思考は狂気に染まり、玉座で冒瀆的で卑猥な言葉を紡ぎ

続けている。

そして貌の無いこの異形が、アザトースの意思を代弁する強壯なる使者、這いよる混沌ニャルラトホテプ。貌のある姿を取る時は常に嘲笑を浮かべ、その対象は自らが仕える主、アザトースにすらも向いているという。そして今も、意味の無い伸縮をするアザトースに本来従者が取るべきではないバカにしたようなため息を吐く。ニャルラトホテプは玉座を背にし、次ほどの時間に飛ぼうか思考する。ニャルラトホテプにとって、時間という概念は行動を阻害するようなものではない。好きな時に好きなように好きな時間に行く。そして人間の文明に干渉し、しつちやかめつちやかに引つ掻きまわす。そして、このニャルラトホテプの最も厄介なところが誰にでもなれるということだ。特定の貌を持たず、あらゆる時間であらゆる姿で現れる。そこからついた名前が『無貌の神』。いうなればトリックスター。悪趣味にも程がある。

と、ニャルラトホテプが次に行く時間を決めていると、

「……………ん？」

自分や他の外なる神以外入ってこれないようなこの宮殿に、明らかに不自然な手紙があることに気づく。ニャルラトホテプはその手紙を触手を伸ばして拾うと、裏から表からマジマジと見る。そして何かに気づいたように虚無の中に見えない嘲笑を浮かべた。

「……………ああ、なるほど。そういうえば、人間になつていたこともあつたっけ。これは招待状ってことか。」

一人納得したように言う。ニャルラトホテプにはこの手紙の内容がわかっていた。脳裏に浮かぶのはいつかの美しき世界。自分が初めて見た未知の世界。願わくばもう一度、と思っていたが、まさかこんな形でチャンスが巡ってくるとは思ってもいなかった。

——もうこの世界に飽きてきたところだ。ちようどいい。

次の瞬間、ニャルラトホテプはその姿を人へと変える。願えばいくつでも作れる顔だ、それくらいわけもない。

ニャルラトホテプはアザトースの方へ向き直り、仰々しく一礼する。

「それでは、行って参ります、我が主よ。」

それだけ言って背を向ける。そして大げさに手を広げ、手紙を開いた。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。』

その才能ギフトを試すことを望むのならば、

己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、

我らの“箱庭”に来られたし』

ニャルラトホテプはその文面に目を通し、そしてとびっきりの嘲笑をその貌に貼り付けた。

「待つてろよ箱庭——ニャルラトホテプ——混沌が今行くぞ——！」

その瞬間、世界から一人、邪神が消えた。



次に目に飛び込んできたのは上空4000メートルの光景だった。体に当たる空気の勢いから落ちていることは容易に想像できた。横を見ればニャルラトホテプと同じように落下中の人間三人+猫一匹。遠くを見れば世界の果てのようなものが見え、大地を貫く軸のようなものも見て取れる。眼下には小さく湖があり、自分たちの落下地点がそこであることを示していた。物理的には50から60メートルくらいから水面に落下するとコンクリートに叩きつけられるのと同程度の衝撃がかかるらしい。その程度ならニャルラトホテプは無傷だろうが、横の三人+一匹はそうではないだろう。ここで会ったのも何かの縁、助けてやろうかとも考えたが、体が水膜のようなものを貫通する感覚があったので、その必要は無いと結論付けた。が、どうやら濡れるのは覚悟しなくてはいけないようだ。

ボチャン、と四つの大きな水音と小さな一つの水音が周囲に響く。数秒して湖から四人の男女が出てきた。その内一人は猫を抱えている。

ニャルラトホテプは着ている服の裾を絞る。普段は絶対会いたくないクトウグアの炎を少し羨ましく思ってしまった自分がいたこと

に少し笑ってしまった。

ふと他の者の方を見れば、全身をニヤルラトホテプと同じく濡らした二人が不満を口にしていた。

「し、信じられないわ！まさか問答無用で引き摺りこんだ挙げ句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

親切というより不親切だろう、とニヤルラトホテプは心の中でツツコミを入れる。黒髪の少女も同じことを考えていたようで、

「……………いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう？」

「俺は問題ない」

「そう、身勝手ね」

フン、と互いに鼻を鳴らして顔を背ける二人の男女。扱いにくそうだとニヤルラトホテプが考えていると、これまで会話に参加してこなかった茶髪の少女が口を開く。

「此処……………どこだろう？」

「さあな。まあ、世界の果てっぽいのが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃねえか？」

茶髪の少女の呟きに金髪の不良のような少年が答える。無茶苦茶な推論だとニヤルラトホテプは呆れたような貌をする。

服を大体絞った金髪の少年は髪を掻きあげ、ニヤルラトホテプら三人に言った。

「まず間違いないだろうけど、一応確認しとくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が？」

「そうだけど、まずは『オマエ』って呼び方を訂正して。——私  
は久遠飛鳥よ。以後は気をつけて。それで、その猫を抱きかかえて  
る貴女は？」

「……………春日部耀。以下同文」

「そう。よろしく春日部さん。じゃあ、野蛮で凶暴そうなその貴方は？」

飛鳥は金髪の少年に目を向ける。少年は肩を竦めて答えた。



「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蠻で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子そろった駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

十六夜のバカにしたような自己紹介にも飛鳥は動じず、

「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

十六夜はケラケラと笑う。飛鳥はニヤルラトホテプの方を見て、

「それで、バカにしてるみたいに笑ってるその貴方は？」

「初対面の“人間”に対する態度がそれかい？まあいい。名前は——」

ニヤルラトホテプは考える。さすがにニヤルラトホテプと名乗るのは危険だ。箱庭でどの程度の知名度があるかわからないが、何人かは知ってるだろう。箱庭に来る前に世界を荒らしていたことまで伝わっていたら面倒なことになりかねない。でも振りすぎて変な名前になるのは嫌だ。ならシンプルに、とここまで考えるのに0.1秒。人間の会話で不自然じゃない程度に間を開けて名を告げる。

「俺は“ナイア”。特に何も特殊なところはありせんつと」

この男、とんでもない大嘘つきである。しかしそれがニヤルラトホテプという邪神の性なのだから仕方がない。

「そう、よろしくナイア君。しかしあの手紙が届いた以上特殊じゃないというのはおかしくないかしら？」

「そうかな？」

バカにしたような嘲笑を浮かべるナイア。

心からケラケラと笑う逆廻十六夜。

傲慢そうに顔を背ける久遠飛鳥。

我関せず無関心を装う春日部耀。

そんな彼らを物陰から覗く少女は思う。

（うわあ………なんか問題児ばかりみたいですねえ………）

召喚しておいてアレだが………彼らが協力する姿は、客観的に想像できそうにない。その少女は陰鬱そうに重くため息を吐くのだった。——こちらを見て嘲笑<sup>笑み</sup>を深めるナイアに気づかず。



十六夜は苛立たしげに言う。

「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねえんだよ。その状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか?」

「それはゲームの中の話じゃねえの?ま、こんなファンタジーなところに呼び出されてんだからそんなくらい期待してもいいのかもしれないけどよ」

ナイアは少女の潜む物陰をチラリと見る。その瞬間、少女に心の中からぐちゃぐちゃに掻き回されるような寒気が走る。

(もしかして……既に気づかれてる?!)

しかしそれも一瞬で、少女はナイアがこちらを見たのは何かの偶然だと思った。思いたかった。

飛鳥が口を開く。

「でもそうね。確かに、なんの説明もないままでは動きようがないもの」

「……………。この状況に対して落ち着きすぎているのもどうかと思うけど」

「お前だつてずいぶんと落ち着いてるじゃねえか」

「ナイア程ではない。それに内心パニックだよ」

「嘘つけ」

ククツ、と喉で笑う。しかし物陰の少女は笑えなかった。

(もつとパニックになってくれないと出ていけないじゃない德斯か!)

場が落ち着きすぎているせいで完全に出来るタイミングを失った少女は完全に物陰から彼らを覗いている不審者と化していた。

(も、もう出ていかないとヤバイですよね。これ以上彼らを放置していたらどうしようもなくなります)

その少女が出ていこうとしていた、その時、十六夜が言った。

「——仕方がない。そこに隠れている奴にでも話を聞かか？」  
その少女の肩が跳ねる。そして、残りの三人の視線も少女が隠れている物影へと集まった。

「なんだ、貴方も気づいていたの？」

「当然、かくれんぼじゃ負けなしだぜ？そっちの猫を抱いてるやつとナイアも気づいてたんだろ？」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「気配を隠せてないな。全く——あれで隠れられていると思って  
るのかね」

少女に先程と同じ寒気が走る。しかし十六夜はそんなの知らない  
とばかりに話を続ける。

「……………へえ？面白いなお前ら」

話が終わって四人の視線は再び少女へと集中する。少女は腹をく  
くったのか物陰から出てきた。

「や、やだなあ御四人様。そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウ  
サギは死んじゃいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの  
天敵「ウサギって寂しいから死ぬんじやなくて死ぬときに一匹になる  
から結果的に孤独ってイメージがついたらしいぜ？」最後まで言わせ  
てくださいよ！」

横槍を入れるナイアに憤慨する黒ウサギ。しかしナイアは知らん  
ぷりをする。

「コホン、仕切り直しデス。ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの  
天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここは一  
つ穏便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「テイク2しても説得力無いぞ」

「あつは、取りつくシマもないですね♪ってテイク2させたの誰です  
か!!!」

再び出来上がる邪神と小動物のいがみ合い。黒ウサギは段々疲れ

てきていた。

(肝っ玉は及第点。この状況でNOと言える勝ち気は買いです。まあ、扱いにくいのは難点ですけども)

黒ウサギはおどけつつも、四人にどう接するか冷静に考えを張り巡らせている——と、春日部耀が不思議そうに黒ウサギの隣に立ち、黒いウサ耳を根っこから鷺掴み、

「えい」

「フギャー！」

力いっぱい引つ張った。

「ちよ、ちよっとお待ちを！触るまで黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きにかかるとは、どういう見ですか?!」

「好奇心の為せる技」

「自由にも程があります!」

「へえ?このウサ耳って本物なのか?」

今度は十六夜が右から掴んで引つ張る。

「……………じゃあ私も」

「ちよ、ちよっと待——!」

今度は飛鳥が左から。左右に力いっぱい引つ張られた黒ウサギは、視界に写ったナイアに助けを求める。

「そ、そこのお方!助け「る」ってんの?」デスヨネー!!!」

黒ウサギは言葉にならない悲鳴を上げ、その絶叫は近隣に木霊した。

## 第二話 「ケンカ売る相手は」

「——あ、ありえない。ありえないのですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは。学級崩壊とはきつとこのような状況を言うに違いないのデス」

「残念、学級崩壊ってのは《学級が集団教育の機能を果たせない状況が継続し、通常の手法では問題解決が図れない状態に陥った状況》っていう意味だ」

「誰もそんな細かい説明求めてないのデスヨ?！」

落ち込んだり怒ったり忙しないやつだな、とナイアは思う。

「いいからさっさと進めろ」

黒ウサギをからかうナイアとは別に、十六夜は話を進めようとする。黒ウサギはようやく話を聞いてもらえる状況を作れたことに安堵した。

黒ウサギは軽く咳払いをし、両手を広げて、

「それではいいですか、御四人様。定例文で言いますよ?言いますよ?さあ、言います!ようこそ『箱庭の世界』へ!我々は御四人様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかと召喚いたしました!」

「ギフトゲーム?」

誰かが声をあげる。黒ウサギは更に続けた。

「そうですね!既に気づいていらつしやるでしょうが、御四人様は皆、普通の人間ではございません!その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその『恩恵』を用いて競いあう為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ!」

両手を広げてアピールする黒ウサギ。飛鳥は質問するために挙手をした。

「まず初歩的な質問からしていい?貴女の言う『我々』とは貴女を含めた誰かなの?」

「YES！異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、数多とある「コミュニティ」に必ず属していただきます♪」

飛鳥は新たな疑問が浮かんだのか、更に質問をする。

「もしもその「コミュニティ」に属さなかつた場合どうなるの？」

「良いことはありません。大手の商業コミュニティでは入店の際に所属のコミュニティを聞かれる場合があります。その時に無所属だと知れば入れてもらえないでしょう。その他にもメリツトとなる事など一切無いので、絶対に属して」

「嫌だね」

「属していただきます！そして『ギフトゲーム』の勝者はゲームの「主催者」が提示した賞品をゲットできるといってもシンプルな構造となっております」

全て話し終えた後、耀が質問をする。

「……………「主催者」って誰？」

「様々ですね。暇を持て余した修羅神仏が人を試すための試練と称して開催されるゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するグループもございます。特徴として、前者は自由参加が多いですが「主催者」が修羅神仏だけあって凶悪かつ難解なものが多く、命の危険もあるでしょう。しかし、見返りは大きいです。「主催者」次第ですが、新たな「恩恵」<sup>ギフト</sup>を手にすることも夢ではありません。後者は参加のためにチップを用意する必要がございます。参加者が敗退すればそれらは全て「主催者」のコミュニティに寄贈されるシステムです」

「後者は結構俗物ね……………チップには何を？」

「それも様々ですね。金品・土地・名誉・人間……………そしてギフトを賭けあうことも可能です。新たな才能を他人から奪えばより高度なギフトゲームに挑むことも可能でしょう。ただし、ギフトを賭けた戦いに負ければ当然——ご自身の才能も失われるのであしからず」

黒ウサギ愛嬌たっぷりの笑顔に黒い影を見せる。

挑発ともとれるその笑顔に、同じく挑発的な声音で飛鳥が問う。

「そう。なら最後にもう一つだけ質問させてもらっていいかしら？」

「どうぞどうぞ♪」

「ゲームそのものはどうやったら始められるの？」

「コミュニティ同士のゲームを除けば、それぞれの期日内に登録していただければOK！商店街でも商店が小規模のゲームを開催しているのよかったですら参加していつてくださいな」

飛鳥は黒ウサギの発言に片眉をピクリとあげる。

「……………つまり『ギフトゲーム』とはこの世界の法そのもの、と考えてもいいのかしら？」

黒ウサギは飛鳥の言葉に『お？』といった様子で驚く。

「ふふん？中々鋭いですね。しかしそれは八割正解の二割間違いです。我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換も存在します。ギフトを用いた犯罪などもつてのほか！そんな不逞な輩は悉く処罰します——が、しかし！『ギフトゲーム』の本質は全く逆！一方の勝者だけが全てを手にするシステムです！店頭に置かれている商品も、店側が提示したゲームをクリアすればタダで手にすることも可能だということですね」

「そう。中々野蛮ね」

「ごもつとも。しかし『主催者』は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰抜けは初めからゲームに参加しなければいいだけの話でございます」

黒ウサギは一通りの説明を終えたのか、一枚の封書を取り出した。

「さて。皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭の世界の全ての質問に答える義務があります。が、それら全てを語るには少々お時間がかかるでしょう。新たな同士候補である皆さんをいつまでも野外に出しておくのは忍びない。ここから先は我らのコミュニティでお話しさせていただきたいのですが……………よろしいです？」

「待てよ。まだ俺とナイアが質問してないだろ」

十六夜が威圧的な声を上げて立つ。ずっと刻まれていた軽薄な笑顔が無くなっていることに気づいた黒ウサギは、構えるように聞き返した。

「……………どういった質問です？ルールですか？ゲームそのものですか？」

「そんなのはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ、黒ウサギ。ここでオマエに向かってルールを問いただしたところで何かが変わるわけじゃねえんだ。世界のルールを変えようとするのは革命家の仕事であつて、プレイヤーの仕事じゃねえ。俺が聞きたいのは…………… たった一つ、手紙に書いてあつたことだけだ」

十六夜は黒ウサギから視線を外し、他の三人を見回し、巨大な天幕によつて覆われた都市に向ける。

彼は何もかも見下す視線で一言、

「この世界は……………面白いか？」

「——」

他の二人も無言で返事を待つ。

彼らを呼んだ手紙にはこう書かれていた。

『家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い』と。

それに見合う催し物があるのかどうかこそ、三人にとって一番重要だった。

「——YES。『ギフトゲーム』は人を越えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」



「——さて、最後はナイアさんですね。何か聞きたいことはありますか？」

黒ウサギは十六夜の質問に答えた後、ナイアに向き直る。ナイアは顎に手を当てて少し考えた後、黒ウサギに言った。

「何でも答えるんだよな？」

「YES！あ、でも性的なことはダメですよ?!」

「いやそうじゃなくてな。俺が聞きたいのは——」

ナイアは一息吸うと、口にとびっきりの嘲笑を浮かべた。



「お前さ、どうしてここにいたんだ？」

ピシリと黒ウサギの表情が固まる。

黒ウサギは若干震えた声で聞き返した。

「えーと、それってどういう意味で」

「そのまんまの意味だよ」

黒ウサギの言葉をナイアが遮る。そして続けた。

「お前さつき言ったよな。『召喚を依頼した』って。召喚ってことは空間跳躍、それも世界を跨ぐようなものだ。そんなの簡単にできるわけないし、できるやつに依頼するなんて結構なコストがかかるんじゃないか？それをただのボランティア精神でやるなんて考えにくいだろ」

黒ウサギは焦る。ここでバレてしまえば計画が全て台無しになる。しかし何も言わなければ状況は悪化するだけだ。

どうすればいいかを考え、なんとか結論を導きだそうとする。その結果、黒ウサギはここまでバレていたのなら、変に取り繕うよりも正直に話したほうがいいのかもかもしれないと考えた。リスクが高い……いや、リスクしかないが、何もしないよりはいいんじゃないかと思う、口を開こうとした。が、

「なーんてな」

それはふざけたような口調のナイアに阻まれた。黒ウサギは間抜けな顔で口を開けている。

「いいよ、言わなくて。何か言いたくない事情があるんだろうから」

「あ………いや………その………」

「ほら、行こうぜ。時間無くなるぞっ」

狼狽える黒ウサギに嘲笑を向けながら、ナイアは歩き出す。聞いていた三人は、黒ウサギに疑うような視線を向けた後、ナイアを追いかけた。



「おいナイア」

ん?と振り返るナイアに十六夜が言った。

「ちよつと世界の果てまで行ってみようぜ」

「とんでもないこと言うなお前」

ヤハハと十六夜は笑う。

「で、どうする?」

「もちろん行くさ」

「ノリが良くて助かるぜ。黒ウサギは向こう向いてる。今のうちだ」

言うや否や、十六夜は黒ウサギ達と反対方向に駆け出す。ナイアも十六夜の後を追って駆け出した。



数分経ち、十六夜はナイアの異常性に気がつき始めていた。十六夜にとつてはなんでもない速度でも、常人にとつては数十倍以上の速度で走っているのだ。それなのにナイアは平気な顔をして十六夜についてくる。これを異常と呼ばずになんと呼ぶか。

十六夜は少し考えた後、疑問を解くためにナイアに話しかける。

「おいナイ——」

しかし、

「——ア?」

ナイアの姿は既にそこにはなかった。



ナイアは歩いていった。先程十六夜が考えている隙に横に逸れてみたのだが、一切気づかれなかった。暇だからという理由の意味の無い行動は邪神の性だが、むしろこつちに来たほうが退屈だったかもしれないとがっかりする。いくら箱庭とはいえ、天幕の外で神仏のテリトリーではないところまで来てしまったら退屈に決まっていた。今からでも十六夜の元に戻ろうかと考えた時、

「おい人間!」

ナイアに声がかかる。何かと思つてその方向を向いてみると、人間の体に頭に生えた小さな角、俗に言う小鬼というものが三体いた。その中の他の二体よりも少し大きいリーダー格と思われる小鬼が言う。「俺たちとゲームしろ！」

へえ、とナイアは嘲笑う。先程も言ったがここは神仏のテリトリーではない。よつて、このくらいの子供が来た人間にゲームを仕掛けて遊んでいるのだろう。子供でもただの人間と比べれば当然種族の違う鬼のほうが強い。彼らはそれを自覚した上で遊んでいるのだ。

今回もナイアをただの人間と思つてゲームを仕掛けたのだろう。

「……………わかつた。受けるよそのゲーム。ルールは？」

「うくん……………こうだな」

そう言つて出てきた一枚の羊皮紙。ナイアはそれを手にとつて読む。

『ギフトゲーム名 “逆鬼ごっこ”』

・プレイヤー一覧 ナイア

・クリア条件 ホスト側プレイヤー全員の捕縛。

・敗北条件 プレイヤー側の降参。

ホスト側のゲーム終了までの逃走。

プレイヤー側が上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・詳細 プレイヤー側はホスト側がゲーム開始を宣言してから10秒の間は動けなくなる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、 “—————” はギフトゲームに参加します。

“モンスターズ” 印』

一通り目を通したナイアは小鬼たちに目を向ける。

「要するに俺がお前たちを捕まえればいい、と。そういうことだな。報酬はどうする？」

「そうだな……………よし！俺たちの持つてるものをなんでも一つやるよ！それでいいか？」

小鬼はそう言つて笑う。どうせ人間は鬼に追い付けないと思つて

いるのだ。だからなんでも一つあげると言っているのだ。

ナイアはそれをわかった上でゲームを受けた。

「OK。スタートはそっちに任せる。いつでも始めてくれ」

ナイアは小鬼たちに嘲笑を向ける。しかし小鬼たちはナイアのそんな態度には気づかず、逃げる準備を整える。

「それじゃ、始めるぜ。よーい……スタートオ！」

その合図とともに三体の小鬼はそれぞれの方向に走り出す。同時にナイアはカウントを始めた。

「いち、にーい、きーん」

小鬼は思った。この10秒でナイアの目の届かないところまで逃げれば勝ちと確定していると。

「しーい、ごーお、ろーく」

しかし彼らはわかっていなかったのだ。

「しーち、はーち、」

彼らがゲームを挑んだのは、

「きゅーう」

クトゥルフ神話の中でも最も狡猾な邪神だということに。

「十」

ナイアが数え終わった瞬間、

「はいしゅくりよ〜」

「……………は？」

三体の小鬼はナイアの脇に抱えられていた。小鬼は思わず間拔けな声をあげてしまう。

「え……………あ……………え……………？」

わけがわからなかった。カウントが終わった瞬間に捕まえられるなど普通はありえない。だからこそ、混乱は大きかった。

「一体……………何を……………？」

「何をしたんだ、か？そうだなあ……出血大サービスだ、教えてやるよ」

あからさまにバカにしたような笑い方だが、小鬼にはそんなものは目に入らない。

「簡単なことさ。お前らそもそも逃げるどころかそこから一步も動いてないんだよ」

耳を疑った。鬼ごっこで動かない？そんなことは通常ありえないだろうと。抱えた小鬼を地面に落としてナイアは続ける。

「なんで？どうして？まあ疑問はあるだろうな。———お前ら魔術って知ってるか？」

ナイアの言葉に小鬼は首を横に振る。ナイアはだよな、と嘲笑った。

「二口に魔術って言っても色々ある。炎を出したり物に衝撃を与えたり、幻覚を見せたり」

そこで小鬼ははっとしたような顔をする。

「気づいたみたいだな。そうだよ、俺はお前らに幻覚を見せたんだ。ゲームが始まった瞬間にな」

ニヤリと厭らしい嘲笑を浮かべるナイア。しかし小鬼に一つはわからないことがあった。それをナイアに問う。

「で、でもルールでは10秒間は動いちゃいけないって……」

「そうだな。でもルールには動いちゃいけないとは書いてあったが魔術を使っちゃいけないなんて書いてないぜ？で、幻覚を見て動けないお前らを10秒数えて回収したってわけだ」

小鬼は言葉を失った。自分達でも気づいてなかったルールの裏をかく方法。それをたった一瞬で見抜き、そして自分達を負かしたこの男にある意味で尊敬の念すら抱いていた。

「さて、種明かしが終わったところで報酬を戴こうか」

見下すような視線を小鬼に向ける。その中で、リーダー格の小鬼が何か手に持って後ろに隠したのを見た。ナイアはゆっくり近づいてそれを奪った。

「これは？」

ナイアの持つそれは緑色に輝く宝石のようなもので、それに金属のパーツを付け紐を通しただけの簡単なアクセサリーだった。

小鬼は顔を青くして叫ぶ。

「た、頼むーそれだけはやめてくれ！」

「なんで？」

「それは母さんの形見なんだ！それ以外ならなんでもやる！だから………！」

小鬼の目には涙が浮かんでいた。ナイアはうんうんとわざとらしく頷く。

「そっかー。お母さんの形見かー。なるほど、確かにこれを持っていくのは可哀想だねー」

じゃあ、と小鬼は希望を見つけたように顔を明るくする。しかし、それはナイアが拳を握ったのを見て先程以上に青くなった。

「やめろ………お願いだ……やめてくれ………」

そして――

「――で？」

――その宝石は、握られたナイアの手の中で、砕け散った。

「あ………う………あ………あああああああ!!!」

小鬼は大声で泣き出す。他の二体の小鬼も、それを見てナイアに敵意を向けながら、泣いている小鬼を宥めていた。

ナイアはそれとは対照的に、楽しそうに嘲笑う。

「アツハハハハハハ！いいねその表情！希望が全て絶たれ、心の中の光が闇に塗り潰される、正気と狂気の一瞬の狭間！即ち絶望！生物の最も美しい、最ツ高の貌だ！そうは思わないかい――」

ナイアは首だけを傾けて後ろを見る。そして、

「――十六夜イ」

名前を呼んだ。少しの静寂の後、複数の木の間から十六夜が姿を現す。

十六夜は泣き続ける小鬼とナイア、そしてナイアの足元に散らばる緑色に輝く欠片を見て言った。

「お前………ここまでやる必要無かったんじゃないか？」

しかしナイアはその十六夜の発言に嘲笑で返した。

「ハッ、随分と甘いんだな十六夜。これは俺がやりたいからやったんだ、お前に何か言われる筋合いは無えよ」

「でもよ――」

そこでナイアは十六夜の言葉を遮るように言った。

「いいか、人の物を奪おうとしているのは奪われる覚悟があるやつだけだ。こいつにはその覚悟が足りなかった。違うか？」

十六夜は黙る。確かに、ナイアの言うことに間違いは無い。むしろ正しいくらいだ。

と、そこに、

「どこまで来てるんですか十六夜さん！急にいなくなっただと思っただらこんなところに……って、ナイアさん？」

木の向こうから黒ウサギが走ってくる。大方十六夜を追いかけたきたのだろう。

「……ここで何を……ツ！これは……」

黒ウサギの目はナイアの後ろの小鬼に向く。その表情には確かな怒りがあつた。

「これをやったのは……ナイアさんですか……？」

「そうだが？」

簡単に行つてのけるナイア。その言い方に、黒ウサギの怒りは更に高まつた。

「何やってるんですかあなたは！何も小さな子供相手にここまでやる必要は無いでしょう！」

「落ち着け黒ウサギ。ちよつと興奮しすぎだ」

十六夜が言う。事実、黒ウサギの髪は淡い緋色に染まっており、彼女がどのような状態かを物語っていた。

黒ウサギは少しの間肩を震わせていたが、やがて気持ちを落ち着かせる。髪色も緋色ではなくなっていた。

「すみません、十六夜さん。……それで、一体何があつたんですか、ナイアさん？」

「別に？……こいつらがゲームを挑んできたから受けて、そんで勝つた。で、報酬にこいつが着けてた宝石取っただけだ。なんか文句あるか？」

「……では今その宝石はどこに」

「……」

そう言つてナイアは足元を指差す。そして、黒ウサギは理解した。「まさか………砕いたというのですか……?!?この子達の目の前で………!?!?」

黒ウサギの髪は再び緋色に染まる。そしてまた、ナイアは軽い口調で、

「そうだが?」

ついに黒ウサギの怒りは頂点に達した。今にもナイアに殴りかかろうとした、その瞬間。

「待てよ」

十六夜が黒ウサギを制止する。黒ウサギは十六夜を睨み付けるが、十六夜の顔を見てそれをやめた。十六夜は言う。

「こんなときというのもあれだが、俺は一つだけ気になっていることがある」

十六夜の言葉にナイアは目を細める。十六夜は続けた。

「お前さつき言つたよな。『どうしてここにいたんだ?』って。それに加えて黒ウサギを追い詰めるように色んな疑問の根拠を並べた。なのにここにきてお前は言わなくていいと言つたんだ。これは余りにも不自然じゃないか?これだけのヒントを出して、あと一歩のところで引き下がる。で、後に残つたのは黒ウサギに対する疑いだけだ。お嬢様たちのほうはどうなつてるのか知らないが、多分黒ウサギの言うリーダー様が質問攻めにあつてるだろうよ」

へえ、とナイアは感心の息を漏らす。普通とは違うやつだとは思つていたが、ここまで頭が回るとは思つていなかったのだ。

「なあナイア。お前は何がしたいんだ?疑いだけを残して、誰かを泣かせて。一体何を………」

静寂が流れる。そしてナイアはゆっくりと口を開いた。その貌に、確かな嘲笑を貼り付けて。

「何がしたいか、ねえ。………別に。ただ——好きなんだよ。生まれつき。そういうのがね」

黙るしかなかった。あまりにも無茶苦茶な理由。何かの目的があるわけでもなく、何かの理想があるわけでもなく。ただ好きというだけ



け。誰かを苦しませるのが、好きというだけなのだ。

今もナイアは見下すような嘲笑を貌に貼り付けている。この笑いが今の問答、そしてこれまでの結果から産み出されたというのなら、それは明らかに異常だ。

この貌は、笑いは、およそ人間のものとは思えない。いや、人間が浮かべていい表情じゃない。

それを見て十六夜は、

「……気に入らねえな」

「ん？」

ナイアは十六夜の言葉を理解できなかった。十六夜は続ける。

「気に入らねえつつつてんだよ。その口調が、言葉が、笑い方が。何から何まで気に入らねえッ！」

十六夜は大きく声をあげる。しかし、ナイアがそれに怯む様子はない。

ナイアは言う。

「へえ……じゃあ、どうする？」

「俺とゲームで勝負しろ」

それはナイアにとって意外な返答。十六夜は箱庭の世界に早くも馴染み始めているということだろうか。確かに、箱庭においてギフトゲームは絶対だ。しかし、今は人間の姿をしているが、中身はあのニヤラトホテプ。それにゲームを挑めばどうなるか……。

——よっほどのバカか、それとも——？

勝つ自信でもあるのか。そう思う。確かに、ナイア自身はまだギフトを一度も使っていない。魔術を一度使っているが、所詮は知識の一つに過ぎないのだ。もしも十六夜がナイアを過小評価していて、さらに自分のギフトに絶対の自信を持っていたとしたら、それはただの愚か者だ。

「ルールはどうする？」

「ハンデだ。そっちが決めていい」

ナイアは確信する。十六夜はナイアを過小評価しすぎていると。自分が負けるはずがないと思っっているのだ。それは先程の蛇神との

戦いにおいて圧勝したことによる驕りに近いかもしれない。

ナイアはユラリと嘲笑を浮かべる。

「十六夜………一つだけいいか？」

「なんだ？」

そして、

「ケンカ売る相手は、よく選んだほうがいいぞ」

ナイアは大仰に手を広げる。そして十六夜と黒ウサギの手元に降ってきたものは――

「……………嘘……………」

――黒い契約書類ギアスロールだった。

『ギフトゲーム名 “X”』

プレイヤー一覧 逆廻十六夜

黒ウサギ

クリア条件 ホスト側ゲームマスターの貌を見る。

敗北条件 プレイヤー側全員の殺害。

プレイヤー側の降参。

ゲーム舞台の焼失。

舞台詳細 プレイヤー側はホスト側ゲームマスターの用意した舞台にゲーム開始と同時に全員が転送される。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、“ノーネーム”はギフトゲームに参加します。

“ ”  
『印』

読み終えた十六夜と黒ウサギの耳にどこからかナイアの声が届く。

「さあ――ゲーム開始だ――！」

### 第三話 「まさかお前」

「おいおい……どういことだよ……？」

ナイアがゲーム開始を宣言した瞬間、十六夜と黒ウサギの視界は一変した。先程までいたはずの森の景色はまるでガラスでも割るかのように砕け、体を浮遊するかのような感覚が包む。頭の中に無数の情景が浮かび上がり、そのどれもが見た先から記憶のどこかへ消えていく。

そして二人の視界は再び変わる。先程までの明るい雰囲気と森とはまるで正反対といえるような、暗い森。これが契約書類ギアスロールにあった舞台だということは簡単に理解できた。

「ここが……舞台ですか。なんとというか暗い場所ですね……」

黒ウサギが周りを見回しながら呟く。十六夜は軽く舌打ちをした。「これは随分と厄介なことになったな。この森の道がわからない上に視界が悪い。この中からナイアを探さないといけないなんて、鬼畜ゲーもいいとこだ」

黒ウサギもそれには同意する。十六夜の言う通り、この森は視界が悪いのだ。色の濃い木々の葉に加え、若干の霧も出ている。まともに日光が差しているところを探す方が困難かもしれない。

可能ならこの森全てを焼き払いたいところだが、ルールの敗北条件に「ゲーム舞台の焼失」と書かれている以上下手なことはできない。何より、黒ウサギ自身がそのようなことを嫌がっていた。

黒ウサギが考えていると、十六夜が口を開いた。

「立ち止まっても罫が開かない。動いたが勝ちだ」

そう言って十六夜は歩き出す。黒ウサギは慌てて止めた。

「ま、待ってください！このゲームにどのような裏があるというのかわかりませんし、そんなに急ぐと危ないです！」

しかし十六夜は、

「いや、急ぐ必要があるんだよ。特にこういうルールだとな」

「ほえ？」

黒ウサギはわけがわからないというような顔をする。十六夜は呆

れたようにため息をついた。

「ほえ？じゃねえよ黒ウサギ。いいか、このゲームには『ゲーム舞台の焼失』によって敗北するというルールがある。この箱庭で、発火、もしくは着火でできるようなギフトを持つやつはどれくらいいる？」

黒ウサギは答える。

「結構な数が。サラマンダー火竜や炎に纏わる悪魔、最強種の一角である星霊にも、太陽などの星の霊格を持っていれば炎を起こすことはできます」「だけど全員つてわけじゃねえんだろ？」

「はい……ッ！そういうことですか……」

十六夜の言葉に黒ウサギはハツとする。十六夜は続けた。

「気づいたか黒ウサギ。そうだ、炎を起こせるギフトを持っていても全員じゃない。このゲームの参加者にそういうギフトを持つてるやつがいなければこのルールはいらないんだ。じゃあなんでこんなルールがあると思う？」

「まさか……時間制限……？」

十六夜は口笛を吹く。

「正解だ。これはタイムリミット、だから言つたら？急ぐ必要があるって」

ククツと喉で笑う十六夜に、黒ウサギはおお、と称賛の声を上げた。

「流石ですね十六夜さん！では、そのタイムリミットというのはどれくらいなのでしょう？」

「わからん」

「ほえ？」

黒ウサギは先程と同じような間抜けな声を上げる。十六夜は『あほかこいつは』といった感じだ。

「タイムリミットに関しては明記されていなかった。さっきの仮説だって、契約書類に書いてあった文章から推測しただけだ。そんならい考える駄ウサギ」

「す、すみません……って誰が駄ウサギですか！」

「お前」

「黙らっしやいお馬鹿様！」

スパアアン！とどこからかハリセンで十六夜の頭を叩く黒ウサギ。こうしてる間にもタイムリミットは迫ってきてるといいうのに呑気な二人である。

「とにかくだ、進むしかないんだよ。この先に何があってもな」

「なんかいい話風にまとめようとしてません?!」

「そんなこと知るか、さて行くぞー」

「無理矢理すぎるのですよおおお!!?」

黒ウサギの服の襟を掴みズルズルと引きずる十六夜。別にタイムリミットまでにはこのゲームをクリアしているだろうという、蛇神への圧勝から生まれたほんの一瞬の慢心。しかし彼らは気づいていなかったのだ。

——このゲームの本当の恐ろしさに。



「……………あのう、十六夜さん?」

「なんだ?」

「私って……………いつまで引きずられてればいいんですかね?」

「んー?最終回まで?」

「そのネタどつかで、更に言うなら公式世界で見たことある気がするのですよ……………」

「細かいこと気にすんなよ。もう離してやるから」

十六夜は黒ウサギから手を離す。襟を掴んでいた状態から手を離せば当然……………」

「ありがとうございまぶべらっ?!」

……………頭を強打するわけで。

「おいおいどうした?とても箱庭の貴族(笑)が出す声とは思えないぜ?」

「(笑)をつけるのとそのゲス顔やめてくれませんか?!」

と抗議する黒ウサギ。もう半泣きだ。

「悪い悪い。なんかお前弄つてると楽しくなってきたな」

「それはとてもよかったですよ♪ってよくないですよ！」

「黒ウサギよ、一人ツツコミは虚しいだけだぞ」

「誰がやらせてるのですか!？」

「さあな。ほら行くぞ」

話の流れを断ち切る十六夜。黒ウサギは、

「な……………なんか納得いかないのですよ……………!」

と、一人憤慨していた。



しばらく歩いていた十六夜と黒ウサギ。数分か、それとも数十分か、はたまた数時間か。なんだか時間の感覚が狂うような気がした。なぜだかはわからない。ただなんとなく、そんな気がするのだ。これは霧のせいか、それともこの森に住まう「何か」のせいか……………十六夜たちには見当もつかなかった。

と、その時、十六夜は前方に何かを見つけた。とても静かで誰かいるとは思えないそこは、

「湖……………か…?」

広い湖だった。しかし、今までよりも深く濃い霧に覆われて、数メートル先も見えない。視界全てが真っ白だ。

少しその湖を見渡して、黒ウサギに言う。

「黒ウサギ、ここには何も無さそうだ。さっさと次に——」

と、そこまで言った時、

バサバサツ

突如として聞こえた謎の羽音。十六夜と黒ウサギは音の大きさからそれがかなり巨大な生物から発せられたものだと思感した。

十六夜は辺りを見回す。そしてそれを見た。

「あれは……………」

真っ白な視界に一瞬だけ写る黒い「何か」。その全貌は確認できなかったが、十六夜にはなんだかそれがとても悍ましく見えた。そして、十六夜の行動は速かった。

「?十六夜さん何を——キャッ!」

黒ウサギの腕を掴み、自分の方へ引き寄せる。そのまま茂みに身を屈めて体を隠し、黒ウサギの顔を自分の胸に押し付けた。これは黒ウサギが先程の「何か」を見てしまわなかったための行動なのだが、いかにせん黒ウサギには事態の深刻さが伝わっていない。その証拠に顔を真つ赤にしてアワアワ言っている。

「い、十六夜さん……離して」

「静かにしろ。あと、目を閉じて周りを見るな。絶対だ」

黒ウサギの言葉を遮るように言う十六夜。黒ウサギはよくわかっていないが、十六夜が何か深刻な場面に遭遇しているのだと察し、言う通りにした。

いつもの十六夜ならばここで黒ウサギの体を触ろうとしたりするのだろうが、今はそんな余裕も無い。十六夜が隠れるという選択肢を選んだことからそれは十分に把握できた。

(クソッ……なんなんだよあれは……この俺が隠れるだ?!)

十六夜は内心苛ついていた。恐らく先程見たアレと力比べをすれば自分が勝てるだろうということはわかっている。しかし、隠れざるを得なかった。それは何故か。

簡単なこと。恐れたのだ、十六夜は。その「何か」を目にすることを。理由はわからない。ただ、それは雰囲気だけでも悍ましく、目にするにはあまりにも恐ろしかった。

そして十六夜は気づく。その「何か」の羽音は、少しずつこちらに近づいてきているということ。

(羽音からして蝙蝠か? いや、蝙蝠ならここまでの音は出ないはずだ)

十六夜は頭の中の記憶を洗い、そこから自分の見た中に該当する生物はいないとの結論に達した。その間にも羽音は近づいてきている。(こつちに気づいているのか? いや、この霧だ。きつと気づいていないはず)

ただの希望だと言われればそれまでだが、事実その通りだった。その羽音は進行を止め、しばらく経つと遠ざかっていった。十六夜は安堵の息を吐き、それと同時にとある感情が浮かんできた。

それは一体どんな生物なのだろうという、好奇心。

十六夜にとつては恐れていたモノだったが、彼の安心から生まれたその好奇心は、恐れに勝ってしまった。そしてなにより、自分をここまで恐れさせたそれはどんな姿をしているのだろうかという考え。それらが十六夜にそれを見せるに至ってしまった。そして十六夜が見たものは――

「な……………んだよ……………あれ……………」

十メートルを優に越える巨大な黒い蛇のような体、そしてそれと同じように常軌を逸した巨大な蝙蝠のような羽。それを見て十六夜は思う。

見なければよかった、と。

感動に素直になれと金糸雀は言ったが、これは感動する気にもなれないものだった。それほどまでにそれは悍ましく、恐ろしいものだった。

まるで精神が削られるような恐怖。正気が徐々に無くなっていくような感覚。それを一言で表すなら、きつと狂気というものなのだろう。

しかし十六夜は持ち前の心の強さでそれを乗り越える。今は一人ではなく、黒ウサギもいる。ここで自分が狂ってしまったら何になるというのだろうか。

十六夜は湖の方を見る。気づけば巨大な黒い蛇はいなくなっていた。羽音も聞こえない。どうやらやりすぎせたようだ。

十六夜は黒ウサギに話しかける。

「もういいぞ黒ウサギ、行こう」

黒ウサギはそつと目を開ける。そして十六夜から離れた。

「どうしたんですか一体？あんなこと言うなんて」

「悪いな、ちよつと見せられないものがあつたんだ。もういないから安心しろ」

「それならいいですけど……………」

黒ウサギは疑問の目を十六夜に向けるが、それもすぐやめた。タイムリミットがある以上、早く進んだ方がいいのだ。



しかし、これで黒ウサギは確信した。この森には、十六夜がタイムリミットを差し置いてまで恐れた“何か”がいることを。



十六夜たちは湖から離れ、森の中を歩いた。結構な時間が経った気がするが、生憎時間を確認する手段はない。それが更に十六夜たちの焦りを大きくしていた。

「クソツ、道もわかんねえし時間もわかんねえし、八方塞がりかよ。ナイアのやつも影一つ見えやしねえ」

十六夜は見るからに苛つき、足元の石を蹴っ飛ばした。当然その石は第三宇宙速度で飛んでいくのだが、幸いにもその方向が斜め上のため特に被害は出なかった。強いていうなら黒ウサギが衝撃波で飛ばされそうになっただくらいだろうか。

「そ、そんなことしていても解決しませんヨ?」

「んなことはわかってる。でもどうすんだよこれ」

黒ウサギの言葉に十六夜は答える。しかし、状況が一向に好転しないのは事実だ。

と、その時、

「……なんだ(´▽`)」

彼らの目の前にとある広場のような空間が現れた。直径十メートルほどの円状で、真ん中には不思議なオブジェクトが置いてある。

それは平石で、そこには貌の無い無定形の何かが描かれていた。

「なんだこれ……? 動物……じゃあないよな。黒ウサギ、こいつなんだかわかるか?」

十六夜は平石を指差し黒ウサギに問う。黒ウサギはそれを見て首を横に振った

(黒ウサギにもわからない……こいつは一体……?)

十六夜は顎に手を当て、記憶を探る。今まで見てきた中にこれに該当するものがあるかを必至に探す。少しの間考えていたが、それは案外すぐに判明した。

(まさかこれは……夜に吠ゆるものか？だとしたらこの森はンガイの森、さっきの湖はリック湖ってことになる)

十六夜は次々に推測を導き出す。

(敗北条件の “ゲーム舞台の焼失” ってのは恐らくクトウグアの部下の炎の精に焼かれるってことだろう。それがあとどのくらいの時間で起きるかはわからないが……少し急いだ方がいいな)

十六夜はタイムリミットの意味を看破する。しかしまだわからないことがあった。

(問題はクリア条件。 “ホスト側ゲームマスターの貌を見る” か。しかしこれは簡単すぎないか？こんなの遠視か透視なんかのギフト持ちがいたら一瞬だぞ。だとしたらなにかしら裏があるって考えた方がいいな)

次に十六夜が目をつけたのはゲームの名前だった。

(ギフトゲーム名 “X”。この “X” ってのはどういう意味だ？ただのアルファベットか、それとも……)

頭の中にある知識を総動員する。その中から可能性を一つ導いた。(これは恐らく方程式の未知数<sup>アンノウン</sup>って意味だ。夜に吠ゆるものがそこに<sup>数学</sup>入る貌が不明だと意味しているならそう考えられる)

しかしこれらはいくまでまだ仮説の域を出ない。このゲームの核心に迫る鍵がまだ手に入っていないのだ。

( “ホスト側ゲームマスターの貌を見る” ……このホスト側ゲームマスターってのはナイアなんだよな。だとしたら………)

次はナイアに注目する。

(この “ナイア” って名前も何か裏があったりするの？N a i a、違うな。N i a、これも違う。N y a……これは……)

十六夜はナイアのスペルを考える。そこで見つかったN y aという文字。なんとということだ、このスペルはこのンガイの森の主である “あの邪神” の最初の文字と同じではないか。

もしもナイアの正体が “あの邪神” だとしたら、途中出会ったあの謎の怪物の正体もわかる。

(……まさか……!!)

——ンガイの森——

——夜に吠ゆるもの——

——リツク湖——

——巨大な黒い蛇——

——平石——

——貌——

十六夜の中で、全ての点が結ばれた。

そしてそれは、十六夜たちの敗北を意味していた。

「……………黒ウサギ」

「はい？」

十六夜の言葉に黒ウサギは振り向く。そして、

「このゲーム……………降参するぞ」

「なっ…………?!」

黒ウサギにとってその言葉はあまりにも以外すぎた。あの十六夜が降参すると言ったのだ。当然の反応だろう。

「な、なぜです?!まだ勝機はあ」

「無いんだよそんなもの!初めからな!」

十六夜の叫びに黒ウサギは驚く。十六夜はすぐにハツとしたような顔をした。

「……………悪い、取り乱した」

「いえ……………いいんですが……………せめて理由を聞かせてもらっても?」

「今は時間が無いんだ。後でな」

十六夜は空を仰ぎ、足を軽く開けた。そして言う。

「ナイア、このゲーム降さ——」

ん、と十六夜が言った瞬間だった。

突如、森の一部が燃え上がったのだ。それは瞬く間に広がり、十六夜たちの所へと到達した。

困惑する黒ウサギと十六夜だが、十六夜はその炎の先にとあるものを見た。

——それは黒い触手。そして燃える森の中から立ち上がる、冒険的な化け物であった。それは声にならない声をあげ、燃える体で暴

れる。その瞬間に十六夜は見てしまった。

——その化け物の貌の部分にのぞくどこまでも真つ黒な虚無を、そしてその虚無の最奥を。

この世の最大の狂気の端を見てしまった十六夜の精神に、圧倒的な恐怖が押し寄せる。まるで精神が削られるような感覚、正気が徐々に無くなっていくような感覚。それも先程の黒い蛇を見た時とは比べ物にならないほどのものだった。もう狂ってしまおうかと何か心が語りかけてきた気がした。全てを投げ出してしまおうかと何か心が優しく抱き締めた気がした。その時十六夜は悟る。

(これが……狂気か……)

心地いい感覚だった。しかしその先に待っているのは地獄。それをわかつているからこそ、十六夜にはそれが邪悪なものに見えて仕方なかった。

(俺は……狂えない……狂うわけにはいかない……)

このまだ見ぬ箱庭を自分の目に焼き付けるためにも、十六夜は狂気の誘いを断つ。そしてその瞬間、

彼らの視界は明るい緑に変わった。

そこはゲーム舞台に移動させられる前の森。十六夜と黒ウサギは戻ってこれたという安堵に身を委ねた。

と、そこに、

「ゲームはどうだったかな？」

薄っぺらい嘲笑を貼り付けてナイアが目の前に現れる。黒ウサギはナイアを見た瞬間に彼の前に歩いた。

「説明してください。どうしてあなたが魔王のギフトゲームを開催できてるのかを！」

黒ウサギの髪が淡い緋色に染まる。それもそうだ、コミュニティの再建のために呼び出した人材が魔王かもしれないというのだから。さらに言うならナイアは人の大切にしているものを簡単に壊せるほどの残虐性を持つ。黒ウサギにとってこれ以上の不安要素はない。

しかしナイアは相も変わらず嘲笑を浮かべたままだ。黒ウサギはそれに怒った。

「あなたはなんなんですか!? 一体何者なんですか!?!」

喚く黒ウサギにナイアはため息を漏らす。そして、

「ちよつと黙つてろ」

トン、と軽く人差し指で黒ウサギの額を突く。十六夜には何をしているのかわからなかったが、黒ウサギは力無く倒れ、ナイアに抱えられた。

「お前……何をした?」

ナイアは十六夜に軽く嘲笑いかける。

「うるさかったからな、ちよつと記憶をいじらせてもらった。それ以外何もしてないから安心しろ」

「ならいいが……」

訝しげな視線の十六夜に対してナイアは言う。

「何か疑問でも?」

「……………いや、なんでもない」

そ、と軽く返事をしてナイアは十六夜に黒ウサギを渡す。

「んじや、街行こうぜ」

と言ってナイアは歩き出す。十六夜はその背中を見て思う。

(ナイア……まさかお前、ニャルラトホテプなのか……?)

その疑問は、近いうちに明かされる。

#### 第四話 「俺に正気を問うことほど」

日が暮れた頃にナイア、十六夜、黒ウサギの三人は噴水広場に現れる。ジンは嬉しそうにスキップをしながら駆け寄ってくる黒ウサギを見てコミュニケーションへの勧誘に成功したのだと察する。

ジンは気づかない。黒ウサギの中では先程までの記憶が「十六夜と一緒に森の中でナイアを見つけた」という風に改竄されているということに。そして、ナイアが魔王のギフトゲームを開催していたということに。

そんなことは露知らず、飛鳥と耀は黒ウサギに先程起きたことを説明した。そして当然黒ウサギは怒る。

「な、なんであの短時間に『フォレス・ガロ』のリーダーに接触してしかも喧嘩を売る状況になったのですか?!」「しかもゲームの日取りは明日?!」「それも敵のテリトリー内で戦うなんて!」「準備している時間もお金もありません!」「一体どういう心算つもりがあつてのことです!」「聞いているのですか三人とも!」

「ムシャクシャしてやった。今は反省しています!」  
「黙らっしやい!」

誰が言い出したのか、まるで口裏を合わせていたような言い訳に激怒する黒ウサギ。それを見ていた十六夜が止めに入る。

「別にいいじゃねえか。見境なく選んで喧嘩売ったわけじゃないんだから許してやれよ!」

「い、十六夜さんは面白ければいいと思つているかもしれないけど、このゲームで得られるものは自己満足だけなんですよ?この『契約書類』を見てください」

十六夜はその『契約書類』を覗き込む。そこにはこう書かれていた。

「『参加者プレイヤーが勝利した場合、主催者ホストは参加者の言及する全ての罪を認め、箱庭の法の下で正しい裁きを受けた後、コミュニケーションを解散する

』———まあ、確かに自己満足だ。時間をかければ立証できるものを、わざわざ取り逃すリスクを背負ってまで短縮させるんだからな!」

ちなみに飛鳥たちのチップは「罪を黙認する」というものだ。それは今回に限ったことではなく、これ以降もずっと口を閉ざし続けるという意味である。

まあ、この話をナイアにしてしまったのだから、もし飛鳥たちが負ければ、ナイアがガルドに最も惨たらしい最後を与えるのはほぼ確実である。理由は恐らく「みっともなく足掻く様が見たいから」とかだろうが。狂って腐って足掻いて、特大の絶望を叩きつけて、死んだ方がいいと思えるような環境に置いた後にその心を粉々に壊すだろう。

が、それはあくまで負けた場合の話だ。

十六夜の話聞いて、黒ウサギが喋り出す。

「でも時間さえかければ、彼らの罪は必ず暴かれます。だって肝心の子供達は……その、」

黒ウサギが言い淀む。ナイアはなんとなくそのガルドという男が何をしたか察した。

「なるほど、確かに外道だ。子供にそんなことするなんてまともなやつのことじゃない」

ナイアの言葉に十六夜は「お前が言うか」と心で言う。確かにナイア以上にこの台詞が似合わないやつはいないだろう。

黒ウサギは記憶が改竄されているが、十六夜は改竄そんなことされていない。それがナイアの思惑なのかは不明だが。

飛鳥は言う。

「ナイア君もご察しの通り、その子供達はもうこの世にいないわ。その点を責め立てれば必ず証拠は出るでしょう。だけどそれには少々時間がかかるのも事実。あの外道を裁くのにそんな時間をかけたくないの」

箱庭の法は箱庭都市内でのみ有効なものだ。外は無法地帯になつており、様々なコミュニケーションがそれぞれの法とルールの下で生活している。

そこに逃げ込まれては、箱庭の法で裁くことは不可能。しかし「契約書類」による強制執行ならばどれだけ逃げようとも強力な「契約

“でガルドを追い詰められる。

まあ、逃げたガルドを受け入れてくれるコミュニティがあれば、の話だが。

「それにね、黒ウサギ。私は道德云々よりも、あの外道が私の活動範囲で野放しにされることが許せないの。ここで逃がせば、いつかまた狙ってくるに決まってるもの」

——なるほど、随分と自分勝手な理論だ。だが面白い。

ナイアは飛鳥の言葉を聞いて嘲笑う。こういう傲慢さは実にナイア好み、邪神好みだ。

「ま、まあ……逃がせば厄介かもしれないかもしれませんが」

「いいじゃねえか、黒ウサギ。厄介事はさっさと潰すに限るぜ?」

「な、ナイアさんまで……?」

ナイアも黒ウサギに言う。ジンも続けて、

「僕もガルドを逃がしたくないと思っている。彼のような悪人は野放しにしちゃいけない」

ジンの同調する姿勢を見て、黒ウサギは諦めたように頷いた。

「はあく……仕方がない人達です。まあいいです。腹立たしいのは黒ウサギも同じです。『フォレス・ガロ』程度なら十六夜さんが一人いれば楽勝でしょう」

それは黒ウサギの正当な評価のつもりだった。しかし十六夜と飛鳥は怪訝な顔をして、

「何言ってるんだよ。俺は参加しねえよ?」

「当たり前よ。貴方なんて参加させないわ」

フン、と鼻を鳴らす二人。黒ウサギは慌てて二人に食ってかかる。「だ、駄目ですよ!御二人はコミュニティの仲間なんですからちゃんと協力しないと」

「そういうことじゃねえよ黒ウサギ」

十六夜が真剣な顔で黒ウサギを右手で制する。

「いいか?この喧嘩はコイツらが売った。そしてヤツらが買った。なのに俺が手を出すのは無粋だと言ってるんだよ」

「あら、わかってるじゃない」



「…………。ああもう、好きにしてください」

丸一日振り回され続けて疲弊した黒ウサギはもう言い返す気力も残っていない。

どうせ失う物は無いゲーム、もうどうにでもなればいいと呟いて肩を落とすのだった。



《この辺りはカット》



ナイア達はコミュニティ“サウザンドアイズ”に向かって歩いている。サウザンドアイズとはその名の通り、特殊な“瞳<sup>アイ</sup>”を持つ者達の群体コミュニティ……………ということは皆様知ってるだろうから詳細は省く。

今はそのサウザンドアイズの支店にギフトの鑑定を依頼しに向かっている。途中で街路樹や立体交差平行世界論の話になったが、説明するには時間が足りないということとそれはまたの機会になった。

しばらく歩いていけると、どうやら店に着いたようだ。店の旗には蒼い生地に互いが向かい合う二人の女神像が記されている。それがサウザンドアイズの旗だということはずぐにわかった。

そしてそのすぐ下では、日が暮れて看板を下げる割烹着の女性店員に、黒ウサギは滑り込みでストップを、

「まっ」

「待った無しですお客様。うちは時間外営業はやっていません」

……………ストップをかける事も出来なかった。黒ウサギは悔しそうに店員を睨み付ける。

「なんて商売つきの無い店なのかしら」

「ま、全くです！閉店時間の五分前に客を締め出すなんて！」

「文句があるならどうぞ他所へ。あなた方は今後一切出入りを禁じま

す。出禁です」

「出禁?!これだけで出禁とか御客様舐めすぎでございますよ?!」

キヤーキヤーと喚く黒ウサギに、店員は冷めたような眼と侮蔑を込めた声で対応する。

「なるほど、箱庭の貴族”であるウサギの御客様を無下にするのは失礼ですね。中で入店許可を伺いますので、コミュニティの名前をよろしいでしょうか?」

「……………」

一転して言葉に詰まる黒ウサギ。しかし十六夜は何の躊躇いもなく名乗る。

「俺達は”ノーネーム”ってコミュニティなんだが」

「ほほう。ではどこの”ノーネーム”様でしょう。よかつたら旗印を確認させていただいてもよろしいでしょうか?」

ぐっ、と黙り込む。黒ウサギがまずい雰囲気を感じた、その時。

「あの……………」

獣人の女の子が十六夜達の来た逆方向から現れる。店員はそちらに微笑み話しかけた。

「どうしましたでしょうか?」

あからさまに変わった態度に黒ウサギは若干のイラつきを感じるが、それをグツと飲み込む。獣人の女の子当然そんなことは知らず、店員に買い物をしたいと申し出た。

「ええと、それでは名と旗印を……………」

聞こうとしたが、彼女はその少女の胸に縫われた旗印を見てその質問を止めた。交差するように描かれた六本の爪痕のような紋章、それは大手商業コミュニティ”六本傷”の旗印であった。”サウザンドアイズ”でも六本傷とは幾度の交流がある。子供とは言えそれでもそれを聞くことは無礼だと思ったのか、店員はすんなりとその少女を通した。

「ではどうぞ中へ」

「そう。それじゃ、ありがたく入らせてもらうよ」

耳に届くのは声。その声に驚愕して振り向いた店員が見たのは――

——今正に店の暖簾を潜ろうとしているナイアだった。

(なんで?! だってさっきまでそこには女の子が——!)

そこで店員は気づく。先程までいた“六本傷”の女の子がどこにもいないことに。そしてナイアの指には“六本傷”の旗印が挟まれていることに。

なぜ、と思うが、店員の脳内にはナイアの姿が、先程ノーネームの中にいた男と同じことがわかる。それだけならいい。しかし、

(この男は、一体いつから姿を変えていた?!)

あまりにも自然すぎて気づかなかつた。十六夜達の来た方向とは逆から、それも誰にも気づかれずに、それこそ黒ウサギや飛鳥、耀、更には十六夜にまで一切気づかれずに移動し姿を変えるなど、明らかに普通ではない。

普通を求める相手を、明らかに間違えているのだが。

店員が目の前の光景に慄いていた時、暖簾の先に見えるナイアの足が動きを止め、少し横に逸れた。次の瞬間、

「いいいいやおおおお！ 久しぶりだ黒ウサギイイイイ！」

………空気をぶち壊しながら、最強の変態が黒ウサギ目掛けて突っ込んできた。



「生憎と店は閉めてしまったのでな。私の私室で勘弁してくれ」

あの後白夜叉と名乗るこの幼女と黒ウサギが水路に突っ込んだり、投げられた白夜叉が十六夜に(足で)受け止められたりしたが、そこは全カットされました。いいね？

ナイア含む五人と猫一匹は、個室と言うにはやや広い和室に案内される。そこには香のようなものが焚かれており、風と共に鼻をくすぐる。

白夜叉は上座に腰を下ろし、十六夜達に向き直る。

「もう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の門、三三四五外門に本拠を構えている“サウザンドアイズ”幹部の白夜叉だ。この黒ウ

サギとは少々縁があつてな。コミュニティが崩壊してからもちよくちよく手を貸してやつている器の大きな美少女と認識しておいてくれ」

「はいはい、お世話になつております本当に」

投げやりな言葉で受け流す黒ウサギ。その隣で耀が小首を傾げて問う。

「その外門、つて何？」

「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。数字が若いほど都市の中心部に近く、同時に強大な力を持つ者達が住んでいるのです」

そう言つて黒ウサギは上空から見た箱庭の図を描く。それを見た四人は口を揃えて、

「……………超巨大タマネギ？」

「いえ、超巨大バームクーヘンじゃないかしら？」

「そうだな。どちらかといえばバームクーヘンだ」

「中心に穴は空いてないがな」

うん、と頷きあう四人。見も蓋もない感想にガクリと肩を落とす黒ウサギ。

対照的に、白夜叉は何々と哄笑を上げて二度三度と頷いた。

「ふふ、うまいこと例える。その例えなら今いる七桁の外門はバームクーヘンの一番薄い皮の部分に当たるな。更に説明するなら、東西南北の四つの区切りの東側にあたり、外門のすぐ外は『世界の果て』と向かい合う場所になる。あそこにはコミュニティに所属していないものの、強力なギフトを持ったもの達が棲んでおるぞ——その水樹の持ち主などな」

白夜叉は薄く笑つて黒ウサギの持つ水樹の苗に視線を向ける。白夜叉が指すのはトリトニスの滝を棲みかにしていた蛇神の事だろう。「して、一体誰が、どのようなゲームで勝つたのだ？ 知恵比べか？ 勇気を試したのか？」

「いえいえ。この水樹は十六夜さんがここに来る前に、蛇神様を素手で叩きのめしてきたのですよ」

黒ウサギは自慢気に言う。それを聞いて白夜叉は声を上げて驚い

た。

「なんと?!クリアではなく直接的に倒したとな?!ではその童は神格持ちの神童か?」

「いえ、黒ウサギはそうは思えません。神格なら一目見れば分かるはずですし」

黒ウサギの言葉にナイアはへえ、と心で言う。これは軽い関心の表れだった。しかし、神格がわかるということだが、黒ウサギの態度からどうやらナイアの工作はバレていないようだった。

ちなみに神格とは、それを持つ者をその種の最高のランクに変化させるギフトである。

蛇に神格を与えれば巨躯の蛇神に。

人に神格を与えれば現人神や神童に。

鬼に神格を与えれば天地を揺るがす鬼神と化す。

更に神格を持つことで他のギフトも強化される。そのため、箱庭にあるコミュニティは上層を目指す第一歩として、まずは神格を手に入れることを目標にする。

更に言うと、神格を倒すには同じ神格を持つか、互いの種によほど崩れたパワーバランスがある時のみに限る。弱い種がどれだけ知略を尽くしても、圧倒的な力で叩き潰されては意味が無い。

しかし十六夜はそんなの知ったこつちやねえと正面からぶつ潰したのだが……………。

ちなみにトリトニスの滝に棲む蛇神に神格を与えたのは白夜叉らしい。それを問題児たちが知るや否や、

「へえ?じゃあオマエはあの蛇より強いのか?」

「ふふん、当然だ。私は東側の『階層支配者』フロアマスターだぞ。この東側の四桁以下にあるコミュニティでは並ぶ者がいない、最強の主権者なのだから」

『最強の主権者』——その言葉に十六夜達問題児三人は食いついた。

「そう……………ふふ。ではつまり、貴女のゲームをクリア出来れば、私達のコミュニティは東側で最強のコミュニティという事になるのかし

ら？」

「無論、そうなるのう」

「そりゃ景気のいい話だ。探す手間が省けた」

三人は剥き出しの闘争心を視線に込めて白夜叉を見る。白夜叉はそれに気づいたように高らかと笑い声をあげた。

「抜け目ない童達だ。依頼しておきながら、私にギフトゲームを挑むと？」

「え？ちよ、ちよつと御三人様?!」

慌てる黒ウサギを右手で制す白夜叉。

「よいよ黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えている」

「ノリがいいわね。そういうの好きよ」

「ふふ、そうか。——しかし、ゲームの前に一つ確認しておく事がある」

「なんだ？」

白夜叉は着物の裾から「サウザンドアイズ」の旗印——向かい合う双女神の紋が入ったカードを取りだし、壮絶な笑みで一言、「おんしらが望むのは『挑戦』か——もしくは『決闘』か？」



——白夜叉のゲーム盤で行われたゲーム「鷲獅子の手綱」。グリフォンに跨がり湖畔を一周するというものだったが、それには耀が挑戦した。曰く、「グリフォンの背中に跨がるのが夢の一つ」だったとか。結果は勝利。更にグリフォンのギフトまで手に入れるというおまけ付きだ。

その様子を見届けた白夜叉は言う。

「さて、これでゲームは終わ——」

り、と言おうとしたところで、ナイアが目に入る。そういえばと、白夜叉はとある「違和感」を覚えた。

(私はあいつに挑戦か決闘かを聞いたか?)

勘違いかもしれないが、それにしては妙に引つ掛かる「違和感」。

まるで存在が消えていたような感じだ。

しかしそれは心にしまい、白夜叉はナイアに聞いた。

「おんしはどうする? 『挑戦』か 『決闘』か。 『挑戦』 ならば今の童のゲームの他に新たなゲームを作るが……………」

ナイアはその質問に嘲笑で返す。そして答えた。

「それじゃ 『決闘』で」

ナイアを除く四人に驚愕の声が走る。白夜叉は聞き返した。

「おんし…………本気か?」

「本気だ。こんなこと冗談で言わないさ」

鼻で嘲笑うナイア。白夜叉に続いて黒ウサギも言った。

「な、何を言っているんですかナイアさん?! 白夜叉様は元・魔王ですよ?! そんな方と戦えば—————」

「だからなんだよ」

ゾツとするほどに冷たい声。それがナイアから発せられたものだと理解するのに大した時間はいらなかった。

「これは俺がやりたいからやるんだ。お前に手出しはさせねえよ」

黒ウサギは黙り込む。ナイアの言っていることに間違いはない。しかし、

「……………という建前はここまでにして、実際は面白そうだからかな。欲望には素直に、ね」

は?と思わず声が出てしまう黒ウサギ。ニヤニヤと嘲笑うナイアに妙に腹が立ってくる。

と、白夜叉が、

「……………おんし、正気か?」

可憐な顔立ちとは明らかに違う、魔王の眼光をその目に宿して問う。しかしナイアはそれにも態度を変えない。

「俺に正気を問うことほど意味の無いことは他に無いな。間違いなく俺は正気だ。俺が狂ってるように見えるか?」

わざとらしく肩を竦めるナイア。元・魔王だと言われているのに面白そうという理由で挑むのだから狂っていると思われるも仕方がない。

「そうか。それでは最後の警告だ。——死んでも知らんぞ、小僧」  
威圧するような声と共に、一枚の羊皮紙がナイアの手元に落ちてきた。

『ギフトゲーム名 “太陽は無謀を焼くか”

プレイヤー一覧 ナイア

ゲームマスター 白夜叉

クリア条件 ゲームマスターの打倒。

ゲームマスターの死亡。

ゲームマスターの戦闘不能。

敗北条件 プレイヤーの死亡。

プレイヤーの戦闘不能。

ルール 今ゲーム中の死亡、及び怪我は自己責任とし、今後怨恨は残さないものとする。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、 “————” はゲームに参加します。

“サウザンドアイズ” 印』

読み終えたナイアは言う。

「なるほど、ずいぶんとはつきりした決闘ルールだ。実に安直で実に単純。勝ちを望むなら正面から打ち破ってみせろと、そういうことだな」

「そこまでわかっているなら話は早い。相手が誰であろうとも、“決闘” ならば手加減はせんぞ」

その目には魔王の眼光、声は威圧、“白き夜の魔王” と呼ばれたのは伊達ではないということだ。

「開始はどうする?」

白夜叉は懐から一枚コインを取りだし、ナイアに見せた。

「これを弾き、地面についた瞬間からだ。よいな?」

「ああ、それでいい」

「それでは……………」

キーンとコインを弾く音が響く。それは地面から十メートルほどで勢いを無くし、落ち始める。白夜叉の視線とナイアの嘲笑が交錯す



る。コインの落ちる時間が妙に長く感じた。黒ウサギたちの不安の目が見え、ナイアに突き刺さる。しかしナイアがそれを気にする様子はない。

しかし流れる時間の中で、ついにその瞬間は来た。

コインの地面を叩く音。それが黒ウサギの耳に届くよりも速く――

超高熱の熱風がナイアを襲った。

## 第五話 「これから見せるのは」

突如白夜叉のゲーム盤に吹き荒れた熱風。地面を焦がし、溶かし、辺りを黒と赤に染め上げる。これは太陽の表面に起きる炎の風、プロミネンス現象を再現したもの。24あるうちの太陽主権の、およそ14個を持つ太陽の「星霊」白夜叉。こんなことをするくらいわけもなかった。

最高温度は約7000度、今のは小手調べのつもりで撃つため数百度に抑えられてはいるが、普通の人間が食らえばひとたまりもない。灰が残ればいい方だろう。

ちなみに黒ウサギたちはゲームのプレイヤーに含まれてはいないため、今回のゲームによつて生じた攻撃や衝撃は「契約」によつて加わらないようになっていいる。しかし視角や聴覚は遮られていない。

つまり、白夜叉の生み出した炎は見えても熱気や炎自体は届かないということである。



白夜叉は自らの生み出した炎を見つめる。愚かにも「星霊」である自分に決闘を挑んだ存在、それがその炎に吞まれて燃える、その様子を見ていた。

箱庭に來たばかりだと言うのに、哀れにも、儂く散つてしまうのかと同情と落胆を覚える。しかしこれも彼の選んだ最期だということだから、それも仕方がないだろうと考える。

ハアと軽いため息をつき、勝者に届く「契約書類」を待つ。

「決闘」とはそういうことだ。両者が死力を尽くして闘い、最後に立つのは一人。敗者には文句を言う権利も与えられず、その勝敗に運命の介在する余地は無い。勝者がいるから敗者がいて、敗者がいるから勝者がいる。たとえその前に何があろうと、何を成そうと、何を言おうと、何を示そうとも実力差は埋まらない。凡愚が英雄に挑んでも蹴散らされるのと同じように、地上を這うたかが人間が、地上を見下

ろす太陽に勝てるはずがないのだ。

しかし、

(妙だな……………)

いつまで経っても「契約書類」は届かない。これが意味するのは一つ。

(まさか……………!)

忘れてはいけない。白夜叉に「決闘」を挑んだのは、白夜叉が闘おうとしたのは――

「アハハ――ハハハハハハハハハ――!」

人間と同じ這うものでも、それは地上にはではない。

恐怖、狂気、あらゆる生物の持つそれに闇より這いよる――

――混沌だということに。

「アツハハハハハハハハハハハハハ!」

燃え盛る炎の中から狂ったような笑いが聞こえる。それも全てを嘲笑うかのような嘲笑。こんな笑い方をするのはたった一人。

やがて炎は消える。そしてそこには、

「よオクもやってくれたなア……………!」

口元を愉しそうに歪ませ、焦げて溶けた地面の中心に無傷で立つナイアがいた。

白夜叉の表情に驚愕が浮かぶ。

「ほう……………」

先程の落胆は消え、そのかわりに激しい戦闘意欲が湧いてくる。戦いたい、闘いたい。この意欲の源になっていたのは、太陽の炎をも防いだ彼への、純粋な「興味」であった。

(面白い……………!)

「いつぶりだろう——自分に『決闘』を挑んだやつが現れたのは。」

「いつぶりだろう——自分の攻撃を防いだやつが現れたのは。いつぶりだろう——自分がここまで興味を示したのは。」

「高揚する、目の前の光景に。高揚する、この結果に。しかしまだ序盤。もっと、もっと楽しませてくれ——！」

「表情を更に変える。それは楽しそうな笑顔。それを見てナイアも嘲笑を深める。」

「なあ、攻撃が防がれただけで、そんなに楽しいか？」

「楽しいき。だって——」

「一瞬、白夜叉が身を僅かに屈める。そして、

ガァン！」

大地を砕きながらナイアの懐へ跳躍する。その勢いで拳を突きだし、ナイアを殴りつけようとする。しかしそれはナイアの右手に阻まれた。

「——こうやって、防ぐやつなんておらんのじゃからのお」

「そいつは結構」

白夜叉の拳を掴んだ手に力をこめ、軽い動作腕を振ってで投げ飛ばす。白夜叉は空中で体勢を立て直し、着地した。

「こうやって投げられるのはいつぶりだ？」

「これは初めての体験じゃな。魔王時代でもこんなことするやつはおらんかった」

笑いながらどこからか取り出した扇子を振る。その動作から起こったとは思えないほどの衝撃は、扇状に広がりながらナイアに向かっていく。ナイアはそれを避けようともせず、軽く拳を引くと、衝撃が届く瞬間を狙って殴りつける。するとそれは一瞬の内に霧散し、何も無かったかのように消えた。

白夜叉はそれすらもわかっていたのか、衝撃によって生じた土煙に紛れてナイアに近づく。そして飛び込むように蹴りを繰り出した。この突然の奇襲に反応しきれなかったのか、後ろに吹き飛ぶナイアに更に追撃をかけようと右手から炎を射ち出す白夜叉。ナイアは地面

を一度バウンドした後着地と同時に身を屈める。ナイアの頭上を炎が掠め、すぐ後ろの地面を焼いた。

「あつぶないなあ。死んだらどうするのさ」

「戯け、危機感の欠片も感じない声で言っても説得力など無いわ」

「バレた？」

ククと喉で嘲笑うナイア。白夜又は若干不機嫌そうに、

「のう、ナイアよ。おんし、先程から攻撃を受けてばかりで反撃を仕掛けてこないが、これはどういうことじゃ？ “決闘” を挑んできたのはそちらであらう？」

「何言ってるんだよ、俺の実力じゃ反撃なんて出来ないさ」

「それも嘘じゃろ？」

「まあね」

当然のように言うナイア。白夜又はようやく自分が嘗めていると気づいた。

「フウ……まあいい。——さつきと真面目に闘え、小僧」

再び白夜叉から発せられる威圧感。ナイアはさつきから小僧と呼ばれることに若干イラついていたりする。

ナイアは手を上げて、

「ああわかった。なら少し真面目にやるよ。それでいいか？」

「まあ、それでいいだろう」

どこか腑に落ちないところがあるがそれで納得して少し俯く。そして顔を上げた瞬間、

目の前に剣が迫っていた。

すかさず首を曲げてその剣を避けた。髪先端が少し切れ、背中に冷や汗が垂れる。

(おかしいのう……さつきまで剣なんて持ってなかったはずじゃが……?)

白夜叉は考察する。瞬時に剣を取り出すギフトか、それ以外か。疑惑の範囲が広すぎて絞れない。今のままでは情報が少なすぎるのだ。危険だが、絞るためにはさらに攻撃させないといけない。

考えている間にも、ナイアはさらに剣を作り出す。それを投擲し、

白夜又はそれを避ける。

その際、ナイアの周辺の地面が少し陥没していたのに気づいた。その大きさは剣数本分ほど。

(あの剣は無から生み出すのではなく、周辺の地面を変換して作っておるのか？まるで錬金術のようじゃ……………)

錬金術の基本は等価交換。地面が剣にされていたのなら、それはこのゲーム盤が存在する限り無限に剣が出せるということである。ア  
ンリミテッドブレードワー……………なんでもない。

とにかく、白夜又はナイアの持つギフトを錬金術だと考察した。しかし、

(どうやって太陽の炎を防いだ？)

不思議なのはそこだ。錬金術で壁でも作ったのかもしれないが、そうであれば壁を作った後ろは無傷で残っていたはずだ。しかし無事だったのはナイアのみ。付近の地面は無惨にも焦げていた。よってその説は通じない。

だとしたら何かしら炎に関するギフトでも持っているのであろうか？しかし炎の中でも頂点に近い位置にある太陽を無効化するとなると相当なギフトのはず。箱庭において最大級の情報網を持つ「サウザンドアイズ」の幹部である白夜又でさえ、そんなギフトを持つ者はほんの一握りだと記憶している。少なくとも、その中にこんな顔の者はいなかった。

(考えてもきりが無いのう……………)

ダメージは与えられなくても目眩まし程度には使えるのではないかと思う。先程の土煙からの奇襲でナイアが透視のギフトを持っていないのは確認済みだ。

こうなったら頼れるのは己の体のみ、真正正銘の殴り合いになるのだろうか。しかし、ナイアがそんなつまらない展開を許すとは到底思えなかった。

根拠は無い、確証も無い。しかし、白夜又は感じ取る。目の前のナイアという男がそのようなことを好まない性格だと。

変わらない世界などつまらない。

変わらない展開などクソ食らえ。

それは娯楽を生きる糧としている者だからこそその感覚なのだろうか。

考えれば考えるほど思考の闇に吞まれていく。はて、いつから私はこんなことを考えていたのだろうか？

意識を思考から自分の相手に移す。あろうことかこの男、白夜叉が考えている間、一度も攻撃してこない。

きつと大した時間ではないのだろうが、それでも『決闘』において思考に耽ることは決定的な隙と言っている。しかしナイアはそれを突かない、きつとわざと見逃したのだろう。

何から何まで気に入らない。その嘲笑も、その仕草も、その見下した態度も。

たとえどのような姿を、行動をしていようが、白夜叉は『星霊』。それなりのプライドはある。

嘗められた借りは、数倍にして返さねば。

それからの白夜叉の行動は早かった。最初に撃ったプロミネンス現象を数千度まで引き上げてナイアに放つ。炎が効かないのは既にわかっているから、これは目眩まし。濃い炎が視界を遮り、白夜叉の姿を隠す。その中から迫る白夜叉の攻撃を、ナイアは避けようとせざる受ける。その手はグニヤリとひしゃげ、普通であれば骨が折れているのは確実だろう。しかしナイアはその折れた部分になんの興味も示さず、来るであろう白夜叉の追撃を待った。そしてその予想は的中し、未だ燃え盛る炎の奥から覗く双眸がナイアを捉えたかと思えば、次の瞬間には白夜叉の拳がナイアの目の前に迫っていた。

が、

「甘いんだよ」

不気味に嘲笑うナイアの後ろから、無数の氷柱が白夜叉目掛けて襲いかかる。突然の反撃に白夜叉は見事に反応するが、氷柱の一本が頬を掠めた。傷からは少量の血が流れる。

白夜叉は困惑した。

(こやつはギフトは錬金術ではなかったのか?!)

自分の予想が外れていたことに焦る。また一からの考察することになってしまった。

しかし、今度のナイアは白夜叉にそんな時間は与えるつもりは無いようで、

「次行くぞ」

ナイアの両手に出現した水の塊は、合わさることですらに量を増し、まるでレーザーのように打ち出された。ナイアの手動きに合わせて地面を切り裂くそれはカッターのようで、その凶刃は白夜叉に近づいていった。白夜叉はそれを炎を使つて蒸発させて防ぐ。

が、防いだところでナイアが突っ込み、白夜叉に蹴りを繰り出す。さらに足で地面に勢いよく叩き、地面から石柱を発生させた。

白夜叉は後ろに飛んでそれを回避するが、ナイアの投げる剣が迫ってきたので掌で掴んだ。その体は流星は「星霊」とでも言うべきか、傷つくことなく血も出ない。

飛んできた剣の勢いで回転し、自分の力も上乗せしてナイアに投げ返す。しかしそれはナイアの生成したもの、ナイアが軽く手をかざすだけでポロポロに崩れた。

現状力は互角、今のまま闘っても埒が開かない。

そう、現状は。

ナイアは攻撃の手を止めて話す。

「なあ」

「なんじゃ?」

白夜叉は答える。ナイアは続けた。

「一つ提案があるんだが、あいつら二元の部屋に戻してやってくれないか?」

そう言つて親指を黒ウサギ達に向ける。白夜叉はそれを疑問に思つた。

「はて、それはなぜじゃ?」

「なに、ここから先は少し目の毒かもしれないからだよ」

軽く嘲笑うナイアはさらに言う。

「それに、俺も少し遊びたいと思つていたところだ」



「……………よかろう」

一瞬の間の後に白夜叉は拍手を一つ打つ。黒ウサギは困惑した。

「ちよっ、白夜叉様?!」

その抗議の声は白夜叉には届かず、黒ウサギ達の視界は変化する。十六夜にとってはナイアとのゲームでも似たような光景を目にしているの、もう三、四度目になる変化だ。

記憶に無い場所が流転を繰り返し、脳裏を掠めてはどこかへ消えていく。それを幾度か見届ければ、やがて四人の視界はあの支店にあった白夜叉の部屋に変わる。

実際は全店中身は同じなわけだが、それは今関係ない。

黒ウサギは声をあげる。

「ど、どういうことですか? 何故白夜叉様は私たちをここへ…………?」

それに答えるように十六夜が聞く。

「なあ黒ウサギ。オマエ、さっきのナイアと白夜叉の会話聞こえたか?」

「え、ええまあ。黒ウサギの素敵耳はゲームの情報を収集するために特段聴力が高いですから……」

「それじゃあ、さっきナイアは何て言ってた?」

「ええと………… “ここから先は少し目の毒かもしれない” と……」

「……………そうか」

十六夜は考えるように顎に手を当てる。そして一つの結論を出した。

「多分白夜叉が俺達をここに戻したのは、あそこで何か見せられないものがあるからだろう。白夜叉が炎を起こしても俺達になんの被害も無かったところを鑑みると、そうとしか思えない」

十六夜達はゲームのプレイヤーではない、それは前述の通りだ。だからこそその体は “契約” で守られる。

しかし冒頭で “視覚や聴覚は遮られていない” と既に言っている。つまり、ナイアが何かを召喚したり、その姿を変化させてしまえば、その視覚情報は十六夜たちの目に入るということである。

普通に考えればわかることだろう。ニャルラトホテプの召喚する

ものがどんな姿をしているか。そしてそれを見てしまえばどんなことになるか。



「送ったぞ、これでよいのか?」

ゲーム盤から部屋に戻された黒ウサギ達を見送り、白夜叉は聞く。ナイアはそれに簡単に返した。

「ああ、これでいい」

「……一つ聞いてもよいか?」

「なんだ?」

白夜叉はナイアに質問する。

「私は当初、おんしのギフトは『錬金術』だと思っておった。このゲーム盤を分解、再構築して剣を生み出す、その工程からな。しかしおんしはその後氷を生み出した。………単刀直入に言おう。おんしは一体何をした?何のギフトを持っておる?」

白夜叉の言葉を聞いてナイアは鼻で嘲笑う。

「ハッ、敵にそれを聞くのか?バカ正直に教えるとも?」

「思っておらんさ。ただなんとなく聞いておきたくてな」

「そりやまたなんで?」

白夜叉は答える。

「おんしの霊格を見た限りでは神格が一切入っておらん。なのに私と互角に渡り合うなど、不自然にも程があると思わんか?」

「なるほど、世の中には妙なことがあるもんだねえ」

愉快そうに嘲笑うナイアとは対称的に、白夜叉は神妙な顔をする。

と、ナイアは唐突に、

「まあいい、霊格に関してはニヤルラトホテプ俺の存在に関することだから教えられないが、錬金術云々については教えてやるよ」

と言った。白夜叉はなお不機嫌そうに、

「ほう、自分から種明かしか。随分と余裕があるのだな」

「まあな。俺が太陽前に負けるわけがないだろう」

ナイアの口から飛び出る挑発。白夜又はイラつく気持ちを抑えながらナイアの種明かしを待った。

「さーて、それじゃ種明かしタイム。確かに俺はお前の言った『錬金術』は使った、だがそれだけで俺のギフトを判断するのは少し早計というものだろ」

「まあ、それもそうじゃな。ではあの氷はなんじゃ」

ナイアは人指し指を立てて、

「世の中には『魔術』ってのがあんだよ。火、水、風、土の四大元素に霊を追加した五大元素、それだけに限らず陰陽術や召喚術、その他を全て含めればその数は軽く千を超えるだろう。その中にはお前の言った『錬金術』も入る。俺が使ったのはそんな魔術のほんの一部だ。正直言つて手ならいくらでもある」

口元を歪めるナイア。そして、

「で、これから見せるのはその『手』の一部だ」

その顔に確かな嘲笑を浮かべ、言葉を紡いだ。

——『Summon moon beast』

その声には嘲りを、その言葉には冒瀆を込めて。

## 第六話 「これが俺のやり方だ」

白夜叉は自分の目を疑った。視界に映る地面に無数に出現する魔法陣と、そこから溢れ出る気味の悪い「何か」を感じ取ったせいだ。妖しく光る魔法陣はゆっくりと回転し、光の明滅を繰り返す。

白夜叉は込み上げる吐き気を抑える。理由はわからないが、なぜか無性に気分が悪い。

しかし、その魔法陣にも、すぐに変化が訪れた。

溢れる気味の悪い「何か」は次第に濃くなり、それはやがて視認できなくなるほどの怖気となって白夜叉の背筋をくすぐる。一つ一つは白夜叉の感覚ではそれほど大きくないように思えるが、それが目の前の無数の魔法陣全てから出ているとなれば話は別だ。それらは集束し、大きな塊となって白夜叉に襲いかかったのだ。

とその時、

ズルリ

と、魔法陣から「何か」が現れた。怖気のようなものではなく、もっと悍ましい、冒瀆的な「何か」。それらがほぼ同時に魔法陣から手を出した。

「何か」は太陽の光を反射してヌラヌラと光る手を地面につけ、その体を地表へと這い上げる。それはとても同じ生物だとは思えない、思いたくない風貌をしていた。

丸々と太った蟻蛙のような体、その顔から伸びるように生える無数の触手がうねうねと空をさ迷う。目があるのか、それとも別の感覚器官があるのかそれらは全てが全てが白夜叉の方を向き、触手をくねらせる。それがどうにも気持ち悪くて、白夜叉の腹の底から込み上げる吐き気は更に強くなる。しかし、それ以上に目の前のこの化け物に対する強い嫌悪感があった。ここまで気持ち悪い生物は箱庭広しといえど中々いない。少なくとも、白夜叉は今までこれ以上のものは長い箱庭生活の中でもほんの数回しか見たことがない。

(そういえば)

と、白夜叉は考える。

(昔、〃これ〃に似たものを見たことがあるな)

思い出されるのは数千年前の光景。箱庭に一度だけ現れた最悪の魔王。それが引き連れていた怪物の中に、同じようなものがいたような気がする。その時は他にも別のがいたが。

もしも〃これ〃がその時の〃怪物〃と同じだとすれば、この嫌悪感を感じるのは二度目、目にするのも二度目だ。

見たいとは思っていなかった。出来れば見たくないと思っていた。誰が好き好んでこんなを見たがるだろうか。見たがる奴はきつとよほどの変人だ。

考えている間にも〃怪物〃はその数を増やしている。何体か魔法陣の縁に引つ掛かつて登れてない阿呆がいるが、それが完全に出てくるのも時間の問題だろう。早く対応に当たらなければ、人海戦術で押し切られる可能性もある。白夜叉に限ってそれは無いだろうとは思えるが、この〃怪物〃の身体能力をまだ白夜叉は把握しきれていない。仮にも太陽主権の大半を持っている〃星霊〃がここまで物事を慎重に考えるのは、単に〃怪物〃から感じられる妙な嫌悪感だけが原因ではない。

白夜叉は心の隅で感じているのだ。まだこの男が〃何か〃を隠し持っていることを。しかも、それは恐らく一つではない。警戒していなければ、いつ足元を掬われるかわからないからこそ、ここまで慎重になるのだ。

(――未知とは怖いものだな)

思えば恐怖を感じるのはいつぶりだろうか。東区画最強と呼ばれたあの日から、感じたことなど無かったようにも思える。それが間違いだとしても、そう勘違いするほどに久しい感覚だ。最近やっていた事と言えば黒ウサギにセクハラしたり黒ウサギにセクハラしたり黒ウサギにセクハラしたり………黒ウサギにセクハラしたり。

(私って特に何もやってないのう………)

そんなくだらない思考はやめ、戦いの方に意識を傾ける。この怪物たちは全て魔法陣から出てから攻撃しようと思っているのか、未だにアクションを起こさない。それとも白夜叉と同じように相手の

出方を警戒しているのだろうか。その答えはどうしてもわからない。そして何よりも不思議なのは、この男も何もしてこないことだ。怪物たちの真ん中でただただ冒瀆的な嘲笑を浮かべて立ったまま一步も動いていない。白夜叉にはナイアの行動が一切読めないらしく、その顔をしかめるだけだ。

(何かを仕掛けているのか?)

見ても何もわからない。それどころか、その瞳の奥にある狂気に近いような闇に引き込まれそうな恐怖を感じてしまう。

動けない、動きたくない。しかし動かないと状況は変わらない。

そして、先に動いたのはナイア側だった。

「怪物」が魔法陣から出きつたのだ。それを確認したナイアはフツと口元に嘲笑を浮かべて命令を下した。

「――Go<sup>行</sup>け」

それを聞いた「怪物」の行動は早かった。蟄蛙のような手に先程までは無かったはずの金属の棒を取り出し、それを白夜叉に向かって一斉に投擲したのだ。それはまるで弾丸のようなスピードで飛び、白夜叉目掛けて一直線に向かう。そんな突然の状況でも、

「――遅いな」

白夜叉は顔を少しずらすだけでそれを躲す。後から飛来するいくつもの棒も同様に最小限の動きで回避していった。白夜叉にとって、弾丸程度の速さなどどうということはないということだ。

白夜叉はトンと音がなるかと思うほどに軽く前方へと足を踏み出す。体をユラリと揺らして棒を回避し、一匹の「怪物」の横を通りすぎ、手に持つている扇子の血を払った。その瞬間、

グシャツ

「怪物」から血が飛び散った。その「怪物」は何が起こったかを理解できぬまま力無く倒れ、辺りにドス黒い水溜まりを作る。その水溜まりの横に、白夜叉は立つ。一瞬だけ、無数に飛来する金属の棒の隙間から覗いた白夜叉の眼光は、ナイアを睨み付けてこう語っていた。「次はお前の番だ」と。

「――クハツ、なるほど。これは面白い」

ナイアは軽く嘲笑って眩く。白夜叉は軽く身を屈め、地面にクレターを作る勢いで飛び出した。すれ違い様に「怪物」の体を切り裂き、眼前に迫っていた棒は掌で掴み手首のスナップをきかせて投げ返し、二匹の「怪物」を串刺しにした。

しかし、直も「怪物」は臆することなく白夜叉の前に立ち塞がる。個別に相手をするのが面倒になってきた白夜叉は炎を噴出して数匹纏めて焼き払う。「怪物」は文字どおり灰になり、白夜叉の疾走が起こした風で灰が舞う。

何度も切り裂き、何度も貫き、何度も焼き払う。

繰り返す内に「怪物」の肉の壁は少し薄くなり、その奥から嘲笑を浮かべるナイアが見えた。

白夜叉は勢いを緩めず、むしろ更に強く地面を踏み砕き、疾走する。白夜叉の視界に写るもの全てがスローに見え、まるで自分だけが別の時間を生きているような錯覚に陥る。

横にいた「怪物」はいつのまにか数メートルも後ろにいて、数メートル前にいたナイアはもうすぐだ。

一步を踏み出し、また「怪物」の横を通りすぎ、ついにナイアの眼前まで躍り出た。

白夜叉は拳を握る。目標はナイアの貌に張り付いた嘲笑。

(その笑いを――)

そして拳を引き絞り、

(歪めてやろう！)

放った。それは確かにナイアへと向かっていき、その貌に――  
――当たらなかつた。その代わりに響く肉を貫くグチャリという音と、飛び散る血肉。手を包む生温かい感触。白夜叉が貫いたのは、ナイアではない。それは間違いなく、今まで白夜叉が殺してきた「怪物」。しかし、それらは白夜叉より後ろにいて、ナイアとの間に割り込めるような身体能力は有していなかつたはずだ。

(まさか――)

白夜叉は考える。

(ナイアを守るためだけに、自分の力をを振り絞った――?)

もしそうだとしたら、それはこの「怪物」達が悍ましい程の、そこそ狂信的な程の信奉心をナイアに寄せているということにならないだろうか。

本来この力は、己が危機の時に振り絞られるはずの力だ。言うなれば「火事場の馬鹿力」。決して、ただ召喚を行っただけの小僧のために使われるものではない。

だとしたらこの「怪物」達にとって、ナイアとはなんなのだろうか？絶対の忠誠を誓える程の相手なのだろうか？しかし、ここまで来ると、とある一つの疑問の方が大きくなってくる。

ナイアとは何者なのだろうか？

魔術を使えるだけならまだ人間の域を出ていない。しかし、一度にこれだけの「怪物」を召喚し、さらにこれらを間近で見て発狂する兆しすら無い。もしかしたら、ナイアが黒ウサギ達を部屋に戻させたのはこのせいなのかもしれない。黒ウサギ達が「これ」を見てまともでいられるはずが無いから。

白夜叉とて、今はこんな変態だが仮にも元・魔王だ。ゲームをクリアしてきただけの頭脳はある。しかし、このナイアについて考える時はどれだけ考えても余計に謎が増えて詳細が一切わからない。こんなことは今まで無かった。

しかしわかる事が一つだけ。ナイアは、自分の召喚した「怪物」を殺されても狼狽えることなくただただ嘲笑を浮かべているということ。これはナイアが「怪物」に対してなんの思い入れも無いことを意味している。ということは、ナイアは「怪物」を殺されても何も感じないため、召喚し使役することになんの躊躇いも無いということだ。殺されることを恐れない大軍ほど恐いものは無いのだ。

思考の最中にナイアが拳を引くのが視界の端に映った。白夜叉は急いで「怪物」から自分の手を引き抜き体を反らす。その瞬間、風を切る音と共に、先程まで白夜叉の体があった場所をナイアの拳とバラバラになった血肉が通りすぎた。

「クッ……！」

無理な体勢から回避をしたせいでうまくバランスを保てない。ナ



イアはそれを見計らったかのように白夜叉の足に自分の足を掛ける。当然、白夜叉はそれに引つ掛かり後ろに倒れる。ナイアは好機とばかりに右手に氷を精製し、白夜叉にぶつけるように突き出す。しかし、「ラー——アア！」

白夜叉は手を地面について、足を振り上げてナイアの手を弾き、氷はパキンという音を立てて霧散した。その隙を見逃さず白夜叉は体勢を立て直す。

「へえ、中々アクロバティックな動きをするじゃないか。しかしその服の丈でその蹴り方はやめたほうがいいんじゃないか？」

嘲笑うナイア。傍目から見れば注意なのだろうが、生憎この邪神男はそんなことを態々するほど優しくない。

「ふん、黙れたわけが。どうせそんなこと一欠片も思っていないのじゃろう」

白夜叉もそれをわかっているのか、そっけなく返す。

「しかし、あれだけの大軍をこんな簡単に躲されるとは思っていなかった。もうちよつと壁として役に立つてくれると思っていたのだがねえ」

ケラケラと愉快そうに嘲笑う。対称的に白夜叉は不快感しか感じていなかった。

「壁として？おんし、少々命を軽視しすぎているのではないか？」

「元・魔王が何を言ってる。それに、お前だってあいつらが気持ち悪くて仕方なかったはずだろう？」

白夜叉は黙りこむ。確かに、あの「怪物」に対して嫌悪感はある。むしろ、嫌悪感しかなかった。

「あと俺が命を軽視してる？お前もあいつらを何匹も殺してたくせに？」

ナイアの言っている事は的を射ている。攻撃されたからという理由だが、生物を殺したのには変わり無い。

「ハッ。流石の元・魔王様も言い返す言葉は無しか？ま、俺にとっては、あいつらが死のうが死なまいがどうでもいいんだが——  
「いい加減その口を閉じろ、クズが」

ナイアは話すのを止める。細められた瞳に映る白夜叉の表情は明らかに怒りの色に染まっていた。

「今までのおんしの話を聞いてなんとなく理解したよ。先程の言葉は訂正しよう。おんしは命を軽視しているのではないな。おんしのやっていることは命の冒涇だ。いやあ、なんとも気分が悪い。ここまですれど誰かを嫌いだと思ったのは二度目だ」

白夜叉は扇子を取りだし、それでナイアを指し示す。

「故に、私はお前を殺そう。黒ウサギになんと言われようと構わん。魔王の誇りにかけて、おんしという芽はここで摘まなければいけない」

白夜叉は手を広げて、叫ぶ。

「今一度名乗ろう。私は『白夜の魔王』 白夜叉。14の太陽主権を預かる者として、全身全霊を以て——おんしを必ず殺そう」

真剣な面持ちで名乗る。しかし、

「あ、そうだ。言い忘れてたけど、不意打ちには注意しといたほうがいぞ。——つて」

ガンッ！

「もう遅いか」

白夜叉を背後から強い衝撃が襲った。倒れる体を捻って襲撃者の姿を見る。それは——『怪物』であった。手に金属の棒を持っているあたり、恐らくそれで殴ったのだろう。

白夜叉は足を踏み出して倒れる体を支える。後ろから更に殴りかかる『怪物』。白夜叉はそれを前転して躲し、炎を出して『怪物』を焼き払った。

「Summon 『hunting horrors』」

ナイアは呟く。白夜叉は咄嗟にナイアの方を向いた。そこにはナイアを中心に広がる大量の魔法陣があった。

ナイアは白夜叉に言う。

「不意打ちなど卑怯だと言うか？更なる召喚などせずに自分で戦えと思うか？」

手を大きく広げて嘲笑う。

「卑怯上等だねえ。これが俺のやり方だ」

魔法陣から翼のある巨大な黒い蛇が出現する。

ナイアは手を振り上げ、命令を下す。

「Go<sup>行</sup>」

GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!

KYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!

ゲーム盤に“怪物”達の大声が響いた。地が揺れ、空が揺れる。黒い蛇は光に灼かれるも己が神のために尽くし、狂う蟄蛙は炎に焼かれるも我が神のために戦うことを躊躇わなかった。

その全てはニヤル<sup>主</sup>ラトホテ<sup>神</sup>プのために、その命はニヤル<sup>邪</sup>ラトホテ<sup>神</sup>プのために。

狂い狂ったその信奉心は、神のためにより狂うことを躊躇わない。

白夜叉には理解できなかった。なぜここまで一人の者に執着するのか。なぜ一人の者にその命を捧ぐのか。

もう既に“怪物”達は白夜叉への攻撃を開始している。金属の棒が飛来し、爪が迫る。

(せめて――)

白夜叉の頭に過る考え。

(せめて――)

炎を起こし、自分の周りに陽炎が揺らぐ。

(せめて――)

そして、

「――苦しまないように殺してやろう」

魔王が——顔を出した。



——熱い。

肉が焦げる不快な臭いが辺りを満たしていく。傷を負う感覚を覚えたのは数千年ぶりだった。

——この大火災を招いたのは十中八九あの人間達だろう。元はと言えば平石に描かれている怪物の正体を暴いてしまったあの大学教授が悪かったのに。

——これだけの規模の災害を起こしてしまえば自分達だってただじゃ済まない。今頃炎の熱に焼き殺されて灰になっている事だろう。

——だからあの時——俺が止めた時にやめておけばよかったんだ。そうすればこんな結果にはならなかった。

——いや、そもそもこの話あの大学教授が真実に気づかなければ俺だってあいつを連れてくる必要など無かったんだ。そして人間達が“あれ”を召喚しようとなんてしなかっただろう。自分に害のある自滅なんて、こんなの楽しくも何ともない。

——美しく可笑しく死ぬのならまだしも、一瞬で焼き払われてしまつては散り様など見れやしないのだ。

炎の中で呑気に“それ”は考える。しかし、いくら熱くても燃えたところが内側からせり上がるように再生していくため実質的なダメージはゼロだ。

——しようがない、この森はもう使い物にならないほどに破壊された。場所を変えよう。

今燃えている森は“それ”が地球に来たときに降り立った場所だった。部下も自由に放っているし、中心には化身の姿を彫った平石も置いてある。多少なりとも居心地はよかったのだ。

それが今はどうだ。部下はほとんどが焼き殺され、平石は破壊された。これがたった二人の人間に引き起こされた結果だと思うと妙な気分になる。いや、正確には“二人の人間に”ではなく“二人の人間が召喚したモノに”なのだが。

その時、森に一際大きな炎の風が吹き荒れる。それと同時に響いた狂気に染まりきった形容しがたい声。声と呼べるのかすら怪しいも

のだが、その音は確かに「それ」の耳に届いた。

——早く移動しなくては。

「それ」にとつては本来恐れるものなどほとんど無い。しかし、それはあくまで「ほとんど」である。つまり、ほんの少しだけ、ほんの一握りだけ恐れるものがある。

この炎の風を起こしている原因こそ数少ない恐れるものの一つだった。どれほど恐れているかといえば、わざわざあの二人の人間の前に誘拐した大学教授の姿で召喚をやめるように説得に行くほどである。

——さて、行くか。

若干の思い入れはある。しかし、それすらも「それ」は一度の嘲笑で全て消し去った。

目指すは宇宙の中心。仕えるべき主の下へと。

炎の海に浮かんだ「それ」は、見下すように狂気の炎の塊を睨み付けた。そして次の瞬間、

森から一つの邪神が消えた。

この邪神が箱庭に召喚されるのは、このすぐ後の話である。



なぜこの光景を思い出したのだろうか。大した理由は思い付かないが、それは恐らく今日の前で燃え盛る炎に既視感を覚えたからだろう。

燃えて灰となる「怪物」達。巻き起こる阿鼻叫喚の渦。それはまさしく箱庭に来る直前の光景と同じだった。唯一違うところといえば、ナイアが一切の傷を負わないところだろうか。

ゆらめく陽炎、熔ける地面。皆を照らしながらも、一度落ちればそれは全てを焼き尽くす災厄となる。

今の彼女は皆を照らす太陽ではない。

それはまさしく、全てを焼き尽くす太陽<sup>魔王</sup>であった。

(力を封印されていてこれか……)

腐っても元・魔王。東の階層支配者を名乗るだけはある。

(ムーンビーストと忌まわしき狩人は使い物にならない。俺の召喚で  
きる中で高位なモノはそんなないし………)

そこまで考え、ナイアは何か思い付いたように口を歪めた。

(そうだ、あいつがいたじゃないか)

右腕を横に突き出し、探るように指を動かす。しばらくそれを繰り返してはいたが、やがて何かを見つけたかのように動きを止め、腕を引っ込めた。そして地面を足で砕き、大量の破片を巻き上げる。

「さあ、耐えてみせろ」

付近に満ちる暗い煙とひどい悪臭。白夜叉がそれを巻き上げられた大量の破片の鋭角の部分から発生したものと認識するのに時間はかからなかった。

まるで世界の不浄という不浄の全てを凝縮したかのような霧囲気。先程の「怪物」よりもさらに気持ち悪い「それ」は、煙が固まるかのように形を成していく。そして、

「おいで、「ティンダロスの猟犬」」

ナイアの眩きと同時に飛び出した。何体もの獣に似た何かが、白夜叉へと向かっていく。白夜叉はそれを焼き払おうとするものの、しかしそれは一切のダメージを負った様子も無く、炎を突き破った。

「クツ——！」

白夜叉は横へ跳び、それを避ける。地面に獣のような動作で着地して立つ「それ」は、先程の「怪物」と同じようにナイアの呼び掛けで出てきたが、「Summon」とナイアは言っていないし、そもそも纏う霧囲気も別物だ。「怪物」は完全にナイアへの狂信的な忠誠心のようなもので動いていたが、目の前の「これ」はそんなものとは関係無い、完全なる自分の意思のみで動いているように感じる。

それはまるで強すぎる執着心。獲物をどこまでも追いかける「猟犬」。

白夜叉はなんとなく察した。きつと——

(きつとこやつらも、ナイアに利用されただけなのだろう)

「猟犬」自身は自らの意思で動いていると思っただろう。



しかし、ナイアは恐らくそれすらも利用して、この「獵犬」を便利な駒に仕立て上げた。つまり、「獵犬」が自分で白夜叉を追っているという状況を作り出した。それだけのことなのだ。

それだけなのに……………

(どこまで……………)

白夜叉は基本的に温厚な人物だ。よく変態的な行動はするが、本気で怒る事などまず無い。

白夜叉が怒る時は決まっている。それは、

(どこまで命を弄べば気が済むのだこやつは——！)  
相手が本物の下種の時だけだ。

憤怒の形相に顔を染める白夜叉。しかし、ナイアはそれを知ってか知らずか、ヘラヘラとした様子で、

「アハッ、何を怒ってんだよお前？俺が何かした——」

ズドオン！

足元に巨大なクレーターを作りながらナイアに向けて跳ぶ。ナイアはそれを回し蹴りで上に流した。

「——台詞の途中で攻撃するなってママに教わらなかったのかい？」

「生憎私に母親はいないのでな、教わりようがない」

白夜叉は上からナイアに向けて足を振り下ろす。ナイアは後ろに数歩下がってそれを回避した。

「そうかい。あ、頭上注意な」

ナイアは人指し指を上に向ける。それに伴って響く鳴き声。白夜叉が上を向くと、そこには今まさに白夜叉に襲いかかろうとしている「獵犬」の姿があった。

「アツハ♪教えてあげる俺やつさしー」

「獵犬」の牙を扇で受け止める。白夜叉は力を入れて「獵犬」を

弾き飛ばした。

さらに襲い来る「猟犬」。ナイアはそれを見て言った。

「——ほら、非情になれよ元・魔王。このまま俺に利用されてる可哀な犬を放っておくつもりか？」

まるで語りかけるように話すナイア。白夜叉は「猟犬」の突進を避けてその内容に耳を傾けた。

「第一おかしいだろ？あの「怪物」どもは普通に殺すのに、そいつだけ殺さないなんてさ？これって差別じゃない？」

——黙れ

「そうだ、特別にそいつの撃退法を教えてやるよ。体が粉々になるまで徹底的に碎けばもうこれ以上追ってこれなくなる」

——黙れ

「ほらやれよ、元・魔王。救われぬ執着心に救済を。終わらぬ追跡に終止符を」

——黙れ

「さあ、時空を越えた悪夢を絶て」

「黙れッ！」

思わず叫ぶ白夜叉。ナイアは口をニイと歪め、

「今、逃げたいって思ったろ？そうだよ、それでいいんだ」

ゆつたりと白夜叉に近づく。

「“なんで私だけ” “なんでこんなやつと関わってしまった”。それが正しい反応だ。俺と関わったやつのは半はそう言うんだよ」

ナイアは更に近づいていき、白夜叉の前まで来て覗きこむように言った。

「非道と非情の限りを尽くせよ元・魔王。「猟犬」を殺すのが、その第一歩だ」

「うるさいー！」

効かないと頭ではわかっているのに、反射的に腕を振るって炎をナイアに浴びせる。

「なぜそこまで歪んだ——？なぜそこまで狂った——？おんしは一体何を見てきた——？」

絞り出すように放ったその声が自分のものだと理解するのに妙に時間がかかる。頭の中がグチャグチャになつて整理がつかない。どれもこれもがナイアと話し始めてから起こった異常だ。

「なぜ歪んだ、ねえ………。それを答えてお前に何ができるわけでもないだろう。強いて言うならそれが俺の在り方だからだ」

絶句。白夜叉がそれ以外にとつた行動は無かった。それほどまでに、ナイアの発言は無茶苦茶すぎる。つまりそれは、生まれた時から歪むことを決定付けられていたということと同義なのだ。

歪むことがさも当たり前かのように、狂うことが間違いではないように話すナイアに、白夜叉は狂気を感じずにはいられない。

「歪むも狂うも、全ては行い次第だろ。歪みが正しさに結び付くこともあるし、狂気が人を救うこともある」

ナイアは語る。それはまるで赤子に知らないことを教えるような声音。優しくも、しかしナイアのそれは明らかにそんなきれいなものとは思えない色を含んでいた。

「でも逆もありえるんだ。歪みはそのまま正されず、狂気は誰かを不幸にする。いや、むしろそっちの方が多いな」

その声は段々と優しいものから離れていく。

「俺が見てきた人間はな、歪みを見たら同じく歪み、狂気にあてられたら等しく狂う。そいつらの結末はなんだと思う？」

白夜叉は次の言葉がわかっていった。わかってしまった。ナイアの声は嘲りに染まっていき、その言葉を口にする。

「等しく死だ。最悪のな」

口は三日月のように曲げられ、そこから嘲笑が漏れる。最悪、というのが何かは白夜叉には想像もつかないが、少なくともそれが決して恵まれたものではないのはわかった。

「死とは救いだ。最大の。中には死を喜ぶやつもいた。狂気に染まり、恐怖に怯えながらも満足そうに笑うんだ」

そんなもの、嘘だ。死とは命の終わり、絶望の終着点だ。それが幸せなわけがない。幸せな……わけが……

「不安と絶望と終わらぬ悪夢の中で生きるよりも、一瞬の安堵の末の

永遠の闇を好むやつもいるんだ。お前だつて見ただろう。使い捨ての駒として散つていくやつを。俺のために死すら躊躇わない愚者を」  
白夜叉の横を通り抜けて「獵犬」の下へ歩くナイア。コツコツといやに響く足音を鳴らして「獵犬」の横に立ち、白夜叉の方へ体を向ける。

ナイアは手を広げた。

「お前なら知っているはずだろう元・魔王。死とはどういうものか。思ったことがあるはずだろう、苦痛とはどういうものか。考えたことがあるはずだろう、絶望とはどういうものか。思い出せ、自分の殺した「怪物」の表情を。そして、その目に刻め。お前の殺した「命」ではなく、お前のせいで苦痛に歪む「命」を」

指を曲げて親指と中指を擦り合わせる。

そして、

「濃厚な「死」を、今」

パチン

ナイアは指を鳴らす。それが白夜叉の耳に届いたと同時に更に響いた破裂音。視界に映る形容しがたい何かと鼻をつく不快な臭い。それがナイアの横にある獣らしかった何かから発せられたものだと理解するのに時間はかからなかった。

「——はい、死んだ」

あつさりと放たれたその言葉。手を下ろして白夜叉に向かつて歩く。

「見たか、これが死だよ。一瞬で、永遠で、苦痛であり、救いであり、絶望であり、希望である。お前が見た「あれ」の表情はどうだった？ 苦痛に歪んでいたか？ 救いに溢れていたか？ 俺にはな——」

白夜叉の横で足を止め、言う。

「——すごい滑稽に見えたよ」

駒だと言いつつ切った相手をあつさりと殺し、あまつさえその様を滑稽だと言う。理解できない、理解したくもない。きつとこれを理解できるのは同じレベルの狂人だけだ。

「このままでいいのか？ 俺をこのまま放っておいて。お前がここで俺

を止めないと、俺は箱庭で更なる狂気を振り撒くぞ？更なる死を齎すぞ？その対象はお前とは関係の無い他人かもしれない。お前の知り合いかもしれない。はたまたお前の友人かもしれない。もしかしたら

黒ウサギかもしれない」

白夜叉の肩が一瞬上がる。ナイアは更に続けた。

「あいつは死が迫ってきたとき一体どんな反応をするんだろうな？泣く？叫ぶ？笑う？いずれにしても、きつと最高の喜劇<sup>シヨウ</sup>を見せてくれ――」

ナイアが嘲笑っていた、その瞬間である。

ドゴオン!!!

突如胸に強い衝撃が走ったかと思うと体がとてつもない勢いで吹き飛ばされ、岩に叩きつけられる。砂ぼこりが舞って視界が覆われるが、その先に見える眼光は、その中で確実にナイアを捉えていた。

「そうか……………」

その眼光の主は口を開いた。

「貴様はそれほどまでに私を怒らせたのか――!」

眼光の主は――白夜叉は先程までと比べ物にならないほどの怒りを顔に深く刻み、ナイアに声をぶつけた。

「――いいねえ」

岩に体をめり込ませながらもなおナイアは嘲笑う。

「いい顔になったじゃないか」

白夜叉の目を見据え、怒りを向けられているとは思えないほどの軽い口調で言う。白夜叉は更に不快そうに述べた。

「——一つ言っておきたいことがある」

「何？」

「私はな、別に私自身が貶されても構わない。魔王として行ってきたことが消えるわけでもないし、それで誰かに恨まれても仕方ないと思っっているからな。だがな、私の友人に手を出すなら、相応の覚悟をしろ」

キツとナイアを睨み付け、白夜叉は告げる。

「さあ、行くぞナイア。その身、滅ぶ程度で済むと思うな——！」

その怒りは、まるで太陽の如く。

## 第八話 「ベラベラうつせえんだよ」

「やらかした」、ナイアが抱いた感情はそれだった。

白夜叉の精神はもうボロボロになりかけていたのだ。度重なるストレス、見せつけられる狂気。どれほどまでの力を持つとも、どれほどまでの年月を生きようとも、それらは全てニヤルラトホテプの前では無に等しい。

魔王の名を捨てて久しく、死という概念から余りにも長く離れすぎていた白夜叉という少女は、ニヤルラトホテプという邪神にとっては格好の遊び道具だった。

歪みを見せつけ、正し<sup>死</sup>さを見せつけ、狂<sup>死</sup>気を見せつけ、救<sup>死</sup>いを見せつけ、絶<sup>死</sup>望を見せつけ、希望を見せつけた。

あとはほんの少しの光を闇に染めればいい。遠くから見れば輝く光は、掴んでしまえば容易く壊れる幻想と化す。人は初めて、希望など常世には存在しないことを知る。

自分のせいで友人が狂う。自責の念に囚われてしまえば人はそう簡単には抜け出せない。白夜叉の心を完全に閉ざして初めて、ナイアは白夜叉に勝利したと嘲笑って言えるのだ。

逆に言えば、それが出来なければナイアは白夜叉との決闘すらも無かったこととして扱うかもしれない。

話を戻そう。ともかく、ナイアにとって黒ウサギが狂うという言葉は闇へと誘う悪魔の囁きのような言葉のつもりだった。これで白夜叉の心が折れてくれれば、その時点でナイアは宣言するつもりだったのだ。

「東の階層支配者はこの程度だった」と。

心を折り、信頼を砕き、その全てを無くさせてから歩く箱庭はさぞ美しく見えることだろう。はるかに見える太陽は虚しく輝き、その光は闇に陰ることだろう。

しかし現実はどうだ。白夜叉の目はまるで白き空に浮かぶ太陽のように輝き、その魂は陰るどころかさらに光を増した。

ようやく悟る。白夜叉に対して「友人がひどい目にあう」という

のは絶対に言ってはならない禁句だったのだと。その言葉こそ、彼女の本気を超えた怒りを引き出すスイッチだったのだと。

ニヤルラトホテプにしては珍しい、感情の読み間違い。それは箱庭に戻ってきた昂りからか、それともただ白夜叉を嘗めすぎただけか。

答えなどナイア自身すらわからない。彼を動かす感情など、娯楽と愉悦、狂気に染まったありもしない忠誠心が軸になっているいくつもの人格が混ざった闇だ。そもそも、今考えていることさえ無限の貌の中の一つが思ったことにすぎない。貌を変えれば、その役に成りきるのがニヤルラトホテプという邪神が取るべき行動なのだ。

実際、それが破られることは幾度もあったが。

(これは少し手こずりそうかな……)

過去の「ある出来事」が原因で一部のものを除いて炎が効かない体にはなっているが、打撃や斬撃が100%効かないわけではない。傷は受けるし、体液だって流れる。

「さて、覚悟は出来ておろうな」

白夜叉が一步踏み出す度に地は割れ、そこに炎が流れる。陽炎がユラユラと揺らめいて、それを切って白夜叉は更にナイアに近づく。

煙が晴れ、ナイアの姿が薄っすらと見え始めたところで白夜叉は足を止めた。



怒り。

白夜叉の心はそれに支配されていた。しかし頭は自分でも驚くほどクールだ。

どこに、どうやって、どんな攻撃を入れれば相手が怪我をするのかわかる。

よって白夜叉は勝利は既に確定していると確信していた。

「残念だったな腐れ外道。私はあれで折れるほど弱くはないということだ」



故に生まれた余裕。慢心ではない、勝者の余裕。

先程のナイアへの打撃、手応えはあった。確実に胸を吹き飛ばせるだけの力を込めていたし、死ぬ……とまではいかなくても、せめて瀕死の状況まで追い込めると思っていた。

しかし、ここで気づいておくべきだったのかもしれない。

その「手応え」というのが、少し妙な感触だったのを。

「クハッ……」

煙の奥から小さく漏れる笑い声。生きているのはそれだけで一目瞭然だった。

次の瞬間、

「クツハハハハハハハハハハハ!!」

冒流するかのように、嘲笑うかのように響いたその声は、それだけで白夜叉を不快にさせた。

煙が晴れる。シルエツトが映し出され、その姿が見えてくる。そこには――

――胸に大きな風穴を開けながらも立っている、ナイアの姿があった。

「ッ?!」

白夜叉は絶句する。それもそうだ、だってその胸の穴からは、黒くドロリとした液体が漏れていたのだから。

気持ち悪い。それはそれは気持ち悪い。

地に垂れたその液体は地面の僅かな傾斜に沿ってゆっくりと流れ、割れた地面に吸い込まれていく。ナイアが動く度にその液体は更に垂れ、同じ動きを繰り返す。しばらくするとナイアの胸の穴の内側が盛り上がるようにウネウネと動き始め、埋めるようにその穴を塞ぐ。それと同時に服も修復され、何事も無かったかのような状態へと戻った。

白夜叉はその様子を見てゆっくりと口を開く。

「……………貴様、本当に人間か？今のを見る限り、とてもそうは思えないのだが……………」

「さあね？そういうのは自分で確かめろよ」



アツツツツ!!!

杭を更に深く押し込んだ。地面に走るヒビ、響き渡る白夜叉の悲鳴。口の中に鉄の味がした。白夜叉を中心に広がる、ナイアとは対称的なキレイな赤い液体がヒビに吸い込まれ、杭を赤く染める。

ナイアは白夜叉を縫い付ける杭に足を乗せて、覗きこむように白夜叉に顔を近づける。

「なあ、どうだ、痛いかな？」

痛いかな、という答えが決まりきっている問いを発するナイア。当然、痛いに決まっている。いつも以上に赤い口を白夜叉が開こうとしたとき、ナイアが割り込むように言った。

「ああ痛いだろうな、当然だ。お前の答えなど聞く必要もない」

その言葉にギリツと音が鳴るほど歯を強く噛み締める白夜叉。出来ることなら「なら聞くな」と叫んでやりたい。

「でもさあ、よく考えてもみろよ。お前は生きてるだろう？ だけどな、お前に殺されたやつらはどうだ？」

ふと白夜叉の脳裏に過る先程の「怪物」達の死に様。視界の端に見えた自分の手が自分の血で赤く染まっているのが、妙に醜く見えた。

「お前の手は血で染まりすぎた。殺しすぎた。壊しすぎた。最早その手に染み付いた死の怨嗟は何度洗い流しても消えることはないだろう」

どんな生き物にだって大切なものはある。それは家族かもしれないし、友人かもしれない。はたまた同じ生き物ではなく、ただの物かもしれないし、もしかしたら自分の信じる信念かもしれない。

生き物を殺すということは、それらが大切にしていたものまでも一緒に壊してしまうことに他ならない。

「お前が今階層支配者と呼ばれようと、それは所詮お前が積み重ねてきた魔王時代の<sup>殺</sup>上塗りに過ぎない。表面をどれだけ飾ろうと、それが過去の上に成り立っていることには変わりないんだ」

「……………だ……………れ……………」

「ああ？」

「……黙れ………外道が………」

「………」

グレイ

「ツ・アアア——！」

見下した目で白夜叉を縫い付ける杭を足で捻る。白夜叉は苦しみの声を漏らす。

「黙れ？何を言ってるんだよ “大量殺人鬼”」

ナイアの言葉に眉を顰めつつも、血で塞がる喉をこじ開けて白夜叉は言う。

「………貴様には………わからんだろうな………人が罪を償うために………どれほどの苦しみを課せられてきたのかを………」

「………」

無言。白夜叉は続ける。

「………人は悩み………苦しみ………贖罪によって今を作ってきた………。どれほどの過ちを繰り返そうとも………切り抜けてきた………。過去に傷が付いたら終わりなのか………？上塗りではないのか………？」

「………」

無言。ナイアは何の行動も起こさない。

「………貴様にはないのか………？人の罪を共に背負ったことが………？人の苦しみを感じたことが………？答えてみる………貴様には………誰かを大切に



「へえ……やるじゃん」

「褒めていただき光荣——とは一切思えんな。不思議なものだ」

「いいや、全然不思議じゃないぜ？俺の言葉を真面目に受け止めないその姿勢には関心だ」

「中々妙な事を言いよるな」

「でしょ？結構気に入ってんだぞこの口調」

左腕をもぎ取られたにも関わらず変わらない軽口を叩くナイアを見て、白夜叉は余計にナイアが人間とは思えなくなってくる。

「貴様、本当に何者だ？」

「だから言ったじゃないか、そういうのは自分で確かめろって」

苛つく言い方だ。ケラケラと嘲笑いながらだと余計にそう思う。

「ふむ、ならばそうさせてもらおう」

白夜叉は低く身を屈め、

「かのッ！」

勢いよく飛び出した。今はもう“怪物”の壁は無い。減速することなくナイアまで到達した白夜叉は拳を引き絞り、放つ。ナイアはそれを体を三日月のように曲げることで躲した。

白夜叉は更に追い討ちをかけるべく拳を横へ振る。ナイアはジャンプして腕を踏みつけ、その勢いで一回転して踵落として白夜叉の頭を狙う。しかし白夜叉はその足を掴んで岩に投げつけた。

岩に衝突したナイアはすぐに体勢を立て直しソニックウェーブを起こしながら突進してくる白夜叉を迎撃する。体を低く、地と水平になるまで屈め、真上を通りすぎる白夜叉を右手で殴る。真下からの衝撃をその身に受けた白夜叉は一瞬体が宙に浮くが、続いて放たれたナイアの蹴りによってすぐに横にはね飛ばされた。

何度か地面を跳ね引き摺られるが、何とか立ち上がる。そして再び突撃を開始した。あと数センチでナイアの首筋に手が届くという距離。しかし——

——それはすぐに阻まれた。

突如動かなくなる体。どれだけ力を込めようともビクともしない。原因を探ろうと目を動かす。見れば自分の体は地面から伸びる黒い何かで全身を拘束されていた。足、手、胴、胸のあらゆる部位に巻き付けられたそれは、生物学的な質感を持っていても、決して生物とは思えないものだった。それはまるで先程の「怪物」と似たような………そんな感覚。

「いやあ、こんなに簡単に捕まってくれるとはねえ」

ナイアが口を歪める。そしてどこかへ歩いていくと、ナイアは自分の左腕を持つて戻ってきた。

ナイアはまるでその左腕を見せつけるようにヒラヒラと動かして言う。

「それ、何だかわかる？お前を縛ってるそれだよ」

白夜叉には検討も付かない。今まで見た中にこんな拘束具は無かった。

「まあ、わかるわけも無いか。正解は〜」

右腕に持った左腕を白夜叉の前に持つていく。すると——  
「これ」

ドロリと溶けた。それは地面に落ちた瞬間動き始め、白夜叉の方に向かう。足を伝い、胴を伝い、頬を撫でる。凄まじい嫌悪感が白夜叉を襲った。

「便利だよねえ俺の体液。こんな風にも使えるんだから」

白夜叉は思い出した。ナイアの腹から漏れるあの黒い液体が地面のヒビに吸い込まれていったのを。まさかあれがこのような役割をするとは夢にも思ってもいなかった。

恐らく誰も想像できまい。こんなのは、明らかに人知を越えているのだから。

液体を固体として使うなどは、普通は誰も出来ないような芸当だ。液体を扱うギフトを持つ者は多くいるが、ここまで特異な者はいない。

「どれだけ力を入れても、そう簡単には千切れない。仏門に下って力が落ちてるお前なら尚更な」

確かにナイアの言う通り、全然千切れない。伸びるわけでも縮むわけでもなく、ただただ白夜叉をそこに固定しているだけなのに。

さらに、ナイアにもとある変化が起きた。

無くなった左腕の千切れた部分がモゾモゾと動き始める。黒い液体が滴り、肉がさらに奇怪なダンスを踊る。そして、

——ズルリ

と、音がしそうなほど滑らかに、しかし悍ましく、断面から「何か」が飛び出した。

赤黒い、まるでタコの足のようにも見える「それ」は、白夜叉の方に向けられ、そっと頬を撫でる。黒い液体が白夜叉の頬に跡をつけた。

気持ち悪い。気色悪い。白夜叉の頭はそれで埋め尽くされた。

と、そんな白夜叉にナイアは不意に口を開く。

「……ところでさあ、お前気づいてる？俺がお前のこと、一回も白夜叉って呼んでないの」

白夜叉はこれまでの戦いを思い出す。確かに、ナイアとは途中で何回も話した。その度に怒りが湧き、心も折れかけた。しかし、ナイアが使った二人称は「お前」だけだったのだ。

「なぜ……貴様は私の名を呼ばないのだ？」

当然の疑問。ここまで言われれば疑問に思わないほうが難しい。

ナイアは答える。

「いやね、昔のお前を知っているとどうしてもその名前は違和感があるんだよ



——ねえ、白·夜·王·？」

「ッ!？」

なぜその名で呼ぶ。なぜ貴様がその名を口にする。

「ああ、やっぱりこの貌だと気づかれないか。いいよ、思い出させてやる」

ベキリ

ゴキツ

ナイアの体から鳴る異音、肥大化していく体。

グチャツ

ニチャツ

変質していく手足、赤黒く染まる皮膚。

白夜叉はようやく悟った。自分が何を相手にしていたのかを。

「まさか……………貴様は……………」

貌に覗く黒より真つ黒な虚無、そして見えるはずのない嘲笑。

「ああ、そういや、お前俺のこと散々小僧とか言ってくれたな」  
冒瀆的な声、狂気を孕んだ存在感。

「その言葉、そのまま返すよ。——調子に乗るな、小娘が」

それは——その名は——

震える声で、不意に漏れた言葉。

「まさか……………」

まさか、と思いたかった。ありえないと思いたかった。しかし、目

の前のこれは明らかに現実だった。

「貴様は……………ニヤルヲト……………ホテ……………」

伸ばされる触手に呑み込まれ、白夜叉の意識はそこで絶えた。

## 第九話 「俺は優しいからさ」

「はい、終了です」

巨大な怪物と化したナイアは口も無いのに声を出す。誰に聞かれるでもない独り言だが、別に誰かに聞いてほしいわけでもない。

未だウネウネと動き続ける触手に覆われた白夜叉を触手の中から外へ出す。気絶してはいるがきちんと息はしているようだ。白夜叉が死ぬところなど想像もできないが……。

怪物のシルエットが縮む。それはみるみる小さくなり、やがて人間の大きさにまでなった。しかし、白夜叉を乗せた右腕だけはまだ怪物の時の触手のままだ。

ナイアが姿を変えると同時に光を放ちながら手元に現れる「契約書類」。

ナイアはそれを横目に流し見る。

『ギフトゲーム名：「太陽は無謀を焼くか」

勝者：ナイア

※この「契約書類」は今後白夜叉への隷属権として使用可能です』（そっぴや決闘で勝ったんだよな）

弱体化しているとはいえ、元・魔王の現時点の全力を撃ち破ったのだ。隷属するのは当たり前と言えれば当たり前なのだろう。

しかしナイアにしては珍しく、あまり乗り気には見えない。

白夜叉の心は最後まで折れなかった。勝負を決めたのはあくまで「ニヤルラトホテプの物理的な力」であって「ニヤルラトホテプの精神的な力」ではない。

徹底的に狂わせて、相手を破滅に導く。それが出来なかったのはニヤルラトホテプにとつての、ある意味での最大の屈辱だった。

だから白夜叉の隷属はさせない。ゲームに勝つてなお、その景品隷属権を手にしなないというのは、またある意味で、白夜叉にとって屈辱となるのではないか。

心が折れないならば、せめてプライドだけでも傷つけていきたい。それがニヤルラトホテプが箱庭に戻ってきてからの最初の大仕事

だった。



「うーん……………」

ナイアは顎に手を当てる。白夜叉を起こすか起こさないかで悩んでいるのだ。

理由は今いる白夜叉のゲーム盤から出るため。ナイアならば自力でも出られるのかもしれないが、出来れば労力を使わずに出たい。

しかし起こせば白夜叉に突っ掛かられるだろう。絶対に。間違いなく。むしろそうされない理由が無い。白夜叉はナイアの正体に気づいてしまったのだから。

面倒なのは避けたい。しかし労力は使いたくない。ならどうするか。

「……………しようがない、か」

悩んだ末にナイアは白夜叉を起こすことに決めた。地面に下ろし、右腕を戻して体を揺する。

「おーい、起きろー」

「んん……………んむ……………」

ゆっくりと目を開け、光を取り込む。うつすらとボヤけた視界が次第にクリアになっていき、先程何が起きたかを思い出していった。

思い出したが故に、驚愕から目を見開き、体をガバツと起こす。

「…そうか……………私は……………」

「ようやく気づいたか “負け犬”。現状把握が済んだらさっさとゲーム盤から出せ」

「…呵呵、その喋り方、一々癩に触るな。」

白夜叉はいつものような笑い方をしているが、その声にいつものような力強さは無い。

「まあよい、どちらにしろ私は負けたのだ。文句など言わんさ。――

――後で色々聞かせてもらおうがな」

パンツ、と一回柏手を叩く。すると、みるみるうちに世界は目まぐる

るしく変化し、一瞬で白夜叉のゲーム盤から元の部屋に戻ってきていた。

「よお、随分と遅かったじゃねえか」

そんなナイア達に、胡座をかいて座っている十六夜が声をかけた。ナイアは笑みを浮かべて返す。

「意外だな、お前はきつと退屈に耐えきれずにどっかに行ってると思ってたんだが」

「そんなに子供じゃねえよ、俺は」

若干拗ねたような顔をする十六夜だが、すぐにいつもの薄ら笑いに戻す。

「で、お前はどうかだったんだ？——って、そういうことか」

白夜叉の方に目を向ける。その表情から察したのか、十六夜はそれ以上続けなかった。

白夜叉は座布団に座り、十六夜を見て少し微笑んで、続いて黒ウサギを見た。

「氣遣いすまん。それで黒ウサギよ、今日は何の用じゃ？」

「え？あ、はい！今日は白夜叉様にギフト鑑定をお願いしようと思っただけです」

ゲツ、と一転して気まずそうな顔になる白夜叉。

「よ、よりにもよってギフト鑑定か。専門外どころか無関係もいいところなのだがの」

白夜叉はゲームの商品として依頼を無償で引き受けるつもりだったのだろう。困ったように白髪を掻きあげ、十六夜ら三人の顔を交互に見つめる。

「どれどれ……………ふむふむ……………うむ、三人とも素養が高いのは分かる。しかしこれではなんとも言えんな。おんしらは自分のギフトの力をどの程度に把握している？」

「企業秘密」

「右に同じ」

「以下同文」

「うおおおおい?!いやまあ、仮にも対戦相手だったものにギフトを教

えるのが怖いのは分かるが、それじゃ話が進まんだらうに」

「別に鑑定なんていらねえよ。人に値札貼られるのは趣味じゃない」

ハツキリと拒絶するような声音の十六夜と、同意するように頷く二人。

困ったように頭を掻く白夜又は、突如妙案が浮かんだとばかりにニヤリと笑った。

「ふむ、なんにせよ『主催者』として、星霊のはしくれとして、試練をクリアしたおんしらには『恩恵』を与えねばならん。ちよいと贅沢な代物だが、コミュニケーション復興の前祝いとしては丁度良からう」

白夜叉がパンパンと柏手を打つ。すると三人の眼前に光り輝く三枚のカードが現れる。

コバルトブルーのカードに逆廻十六夜・ギフトネーム コルド・アンノウ 『正体不明』

ワインレッドのカードに久遠飛鳥・ギフトネーム 『威光』

パールエメラルドのカードに春日部耀・ギフトネーム ゲノム・ツリ 『生命の目録』

『ノーフォーマー』

それを見た黒ウサギは興奮気味に叫ぶ。

「ギフトカード!」

「お中元?」

「お歳暮?」

「お年玉?」

「ち、違います!というかなんで皆さんそんなに気が合っているのです?!このギフトカードは顕現しているギフトを収納できる超高価なカードですよ!耀さんの『生命の目録』だって収納可能で、それも好きな時に顕現できるのですよ!」

「つまり素敵アイテムってことでオツケーか?」

「だからなんで適当に聞き流すんですか!あーもうそうです、超素敵アイテムなんです!」

そこから先は白夜叉による解説と、十六夜のギフトカードを見た白夜叉が驚いただけで特に目立ったことは無かった。

ふと、十六夜がある疑問を投げ掛ける。

「そういえば、ナイアの報酬はどうなるんだ？ギフトカードは渡してないだろ？」

ピシリと白夜叉の表情が固まる。それに反して、ナイアはニヤニヤと嘲笑いながらポケットから一枚の紙を取り出し、渡した。十六夜はそれを受け取り、固まっている白夜叉と交互に見比べて言った。

「…………隷属権か。なるほどな、“決闘”に負けるとこうなるのか」

黒ウサギ達も十六夜の後ろから覗き見たその内容に皆一様に目を丸くし、黒ウサギは少し気まずそうな顔をした。自分の連れてきた者のせいでややこしいことになったのに責任を感じたのだろう。

「ええと…………ナイアさん、一体これは…………？」

「見ての通り、俺はこの元・魔王様に無事勝利致しましたー」

十六夜の手から“契約書類”を抜き取り、白夜叉を指して嘲笑うナイア。しかし、黒ウサギにとっては全然笑えない。

コミュニケーションが壊滅しても“ノーネーム”がやっていけたのは白夜叉のおかげと言ってもいい。その恩人が今、箱庭に來たばかりの“人間”に隷属されかけている。そんなこと、献身を評価されて箱庭に招かれた“月の兎”には到底許容できない。

しかし、黒ウサギに何ができるわけでもない。白夜叉は強大な力を持つ“星霊”だ。普通に考えれば、これほどの存在を隷属できる機会を見逃す者などいないだろう。

だからこそ、黒ウサギにとって、次のナイアの言葉は天恵にも等しかった。

「でも俺は優しいからさー。隷属権を破棄してやってもいいんだよ」

は？と声を上げたのは黒ウサギではなかった。それは間違いなく、今渦中にある白夜叉の口から発せられたもの。

「…………貴様、正気か？」

「そう言う君はもつと喜んだ方がいい。俺のお情けで晴れて自由の身になれるんだぜ？」

そう言ってヒラヒラと白夜叉の前で“契約書類”をちらつかせる。ポカンとする顔を引き締め、白夜叉はナイアの続きの言葉を聞いた。「それにさ、俺は従順じゃない奴隷はいらないんだよ。そうじゃな

きや、いつ反逆されるかわからない」

ナイアはこう言っているが、実際はそんなことありえない。『契約』による束縛がある以上、この箱庭にいる限りそれからは逃れられない。一度隷属した相手に反逆をするというのなら、主が認めた上でそれを解消しなければいけないのだ。拘束されている場合の脱出や逃亡はその限りではないが、原則反逆など出来るはずがない。

黒ウサギはそのことを知っていても、あえて口にしなかった。ナイアが白夜叉を解放するというのなら、それに越したことはないからだ。

ナイアは両手で『契約書類』を持ち、真つ二つに引き裂く。丸めて無造作に投げ捨てられたものはゴミ箱に入るわけでもなく床に落ち、光のように消えていった。

それはすなわち、ナイアが白夜叉の隷属権を破棄したことを意味していた。

黒ウサギは意図せず顔が綻んだ。よかった、よかったと心の中でしきりに呟いて歓喜する。しかし彼女は気づかない。それはつまり、白夜叉はナイアの情けを受けたことになるのだと。黒ウサギは無意識の内に、白夜叉をナイアより下に位置してしまったのだということに。

これがナイアの狙いだった。隷属権を破棄して、白夜叉のプライドを傷つける。白夜叉は頭がいい。かつて魔王として、そして今階層支配者として君臨している以上、かなりの数のゲームをしてきた。その結果として、思考は磨かれ、脳は研ぎ澄まされる。だからナイアの意図を理解するのに、難しいことは何もない。

だからこそ彼女は悔しかった。黒ウサギの中で、彼女のお気に入りの中で『ナイア』白夜叉』の方程式が成り立ってしまったことが、何よりも屈辱だった。

しかし、彼女は何も言えない。黒ウサギに『ナイアより下に見ないでくれ』などどうして言えようか。白夜叉は負けた。現時点で、ナイアに手も足も出なかったという事実は覆りようがないのだから。

唇を噛み締めてナイアを睨むが、本人はそんなの気にしていないと





思い出されるのは部屋に戻ってきたときの白夜叉の表情。『決闘』が終わって雌雄を決したにも関わらず、あそこまで苦い表情をするとは思えない。白夜叉という人物を知っていれば、なおのこと思う。う。

「だからこそ、私は何かあったと思うんです。だから教えてください。私には、あなたを箱庭に招待した者として、それを知る義務があります」

いつになく真剣な表情の黒ウサギは必死にナイアに訴えかける。しかし——ナイアはそれに嘲笑いで返した。

「——ハッ、だってさ。どうするよ白夜王。そろそろこいつに教えてやるか？」

黒ウサギは驚愕する。それもそのはず、『白夜王』とは、白夜叉の魔王時代を知る者しか使わない呼称だからだ。そこから導き出される結論はつまり——

「……そうだな。ここで知らさなくとも、どの道知ることになるだろう」

重い声で答える。

白夜叉は言いにくいことを伝えるようにゆっくりと口を開く。

「のう黒ウサギよ。おんしは間違いなく、異世界から最強のカードを引いた。……ただ、その中の一枚は、自分でも制御できない最悪のジョーカーだったがな」

端から聞いていた十六夜には次に白夜叉の言う言葉が予測できた。それは、彼自身も考えていた『ある仮説』だったからだ。

あの黒い『契約書類』、燃える森、平石に書かれた貌の無い怪物、そして燃えながらもなお光など見出だせないほどの虚無を湛える貌の真正正銘の『化け物』。

道化師は……トリックスターはいつ現れるかわからない。それはもしかしたら、日常に静かに這いよってくるかもしれない。

そして、白夜叉は告げた。

「〃千の貌を持つ魔王〃 ニヤルラトホテプ。数千年前に箱庭に現れた、最悪の魔王だ」  
ニヤルラトホテプは嘲笑を上げた。

## 第十話 「仕込みは上々だ」

「最悪の——魔王——？」

黒ウサギは白夜又言っていることが飲み込めずにいた。それも当然である。なんせ、自分の呼び出したコミュニケーション復興のための人材が魔王だったのだ。こんな事実をどう受け入れるというのか。

しかしそんな黒ウサギとは正反対に、十六夜の表情に大きな動揺は見られない。むしろ十六夜は全て合点が行ったとばかりに落ち着いている。

これまでの不自然な言動が全てニャルラトホテプの行ったことだとわかったからだ。極端な話だが、ニャルラトホテプは基本的に何でもできるし何でもやる。不可能というものはないのだ。

だからこそ納得できる。ナイアが白夜又に勝つなど常識的に考えて無理な話だが、ここは人外魔境の箱庭。そして目の前には常識の“じ”の字も無い邪神。一体どんな手段を使ったのかはわからないが、ニャルラトホテプとしての手段を行使したのなら、きつともな方法ではない。

心を折り、砕き、その上で成立する“最悪”を使ったのだ。

白夜又がこうして十六夜たちと話せている時点でそれは失敗に終わったことを意味しているが、それでも少なからず影響を及ぼしているはずである。正確には“傷をつけた”という形だが。

「白夜又様……それはどういう……」

「言葉通りの意味だよ、黒ウサギ。“最強”ではなく、“最上”でもなく、“最悪”。箱庭に害を振り撒く災いそのものとして顕現したが、このニャルラトホテプという魔王だ」

「そんな……」

そういえば、と黒ウサギは思い至る。黒ウサギの記憶ではナイアは十六夜と一緒に森で見つけた”ということになっている。その記憶の通りであれば、ナイアを見つけた森は“人間とは違う種族のコミュニケーションのテリトリー”だったはずなのだ。神霊レベルのメンバーはいなくとも、小さな子供でもただの人間の驚異となりえる力は

持っている。時間は昼間、暇を持て余した子供たちがうろついてもおかしくないはずなのに、ナイアはあまりにも無傷すぎた。その小さなすぎる違和感が鍵となり、ナイアが黒ウサギに施した改竄のメッキがボロボロと剥がれていく。

思い出す、小鬼のことを。思い出す、ゲームのことを。思い出す、あの十六夜の表情を。

そして全てを理解したとき、黒ウサギを襲う恐怖。

忘れてた方がよかったかもしれない。ゲームの時、十六夜は自分に何も見せてくれなかった。まるで自分を庇うかのように抱き寄せられたあの十六夜の胸の先に、何か悍ましいモノがあったとしたら――

ゾワリと背筋を駆けていく悪寒。一体どんな姿をしていたにせよ、十六夜があそこまで怯えるなんてことは信じられなかった。たった数時間前の、「世界の果て」で見せてくれた笑顔が歪む。返した自分の笑顔も歪む。記憶のどこからどこまでが本当で、どこからどこまでの感情が本物か判別がつかなくなる。その細い指が抱いた自分の二の腕に食い込んで痛みを及ぼしても、狼狽した黒ウサギには気にする余裕が無い。

――なぜ忘れていたんだろう

――なぜ思い出したんだろう

その恐怖がニャルラトホテプに仕組まれたものだど気づけない。わざと剥がれやすい記憶の改竄をしていたことにも気づけない。思い出す――そんな、大きすぎる恐怖というものに飲み込まれてしまったてはまともな思考などできるわけもない。容赦なく頭を蹂躪するそれに対抗する術もなく削られていく精神を直視しているような錯覚に陥る。もう少し力を加えれば黒ウサギ自身の指が彼女の柔肌を突き破るであろう、その直前まで来たとき、

「――おい黒ウサギ！」

突然の大声によって黒ウサギの意識は現実に戻された。開けた視界には肩を揺する十六夜がいて、不安そうな顔をする飛鳥と耀が見える。さつきまでは完全に無意識だったが、今は二の腕に走る痛み

もしっかり感じることができた。

「え……あ……私は……？」

「落ち着け、とりあえず深呼吸だ。ほらひっひっふー」

「ひっひっふー……いやこれ違いますよね?!これ出産ですよね?!」

スパアアン!と十六夜の頭を襲うハリセン。先程までの様子とは一転して元気になった黒ウサギに、十六夜は安堵する。しかし、ケラケラという不快な笑い声がそんな空気を凍らせる。

「いやあ、全く面白いよお前たちは。見ていると笑いに事欠かない」

その声の主は当然ナイア。黒ウサギは顔を引き締めてキツと見つけて言う。

「ナイアさんが今まで何をしていたか教えてください、と言っても、きつとあなたは教えてくれないでしょう」

「当然だな」

ナイアははつきりと言い切る。それを聞き届けた黒ウサギは白夜叉に視線を移した。

「だからこそ、白夜叉様に聞きます。この場で彼のしたことを知っているのはあなた様だけですから」

いつになく真っ直ぐな瞳。それに対し、白夜叉はフツと軽く息を吐いて返した。

「………わかった。よいよ、黒ウサギ。教えてやろう。こやつがどうして『最悪の魔王』と呼ばれるようになったかをな」

それは、とある狂気の歴史でもある。



「まずはおんしらに聞きたい。おんしらは『ニヤルラトホテプ』というものが何かわかるか?」

その問いに対して頭の上に『?』を浮かべる飛鳥、耀、黒ウサギの三人。しかし十六夜はスラスラと答える。

「………ハワード・フィリップス・ラヴクラフトの築いた神話体系、『クトゥルフ神話』に登場する邪神の一柱だ。『這いよる混沌』『無

貌の神”など多くの二つ名を冠し、どのような姿にも変身できる特異な力を持っている、異形の神」

「正解。よく知っておったな」

「あんまりメジャーなジャンルじゃないけどな。まあ、知識として一応知っておいたただけだよ」

肩を竦める十六夜。ふむ、と白夜又は声を漏らす。

「更に言うなら、クトウルフ神話において『盲目白痴の魔王』と称される『アザトース』、そしてその他の『外なる神』の意志を代行する使者でもある。と言つても、やってることは滅茶苦茶じゃがな」

白夜又はチラリと横のナイアを見やるが、本人はそんなのどこ吹く風といった風に呑気な顔をしている。それがなんともイラつくのはナイア本人の所業によるものであるが、今はそんなこと言つても仕方ない。

「さて、ここからが本題じゃ。そんなものが箱庭で何をしたのか、話そうじゃないか」

白夜又は顔から一切の表情を消して扇子を畳んだ。

「——あれは、まだ私が魔王だった頃の話だ」



——ある街の一角で、それは囁かれていた。

「おい、聞いたかあの話」

「ああ、なんか魔王が次々に潰されてるらしいな」

「なににせよ、私たちにとっては過ぎしやすくもいいじゃない」

ワイワイと賑わう街の中に流れる一つの噂があった。どうやら最近になって箱庭に流れ着いた何者かが、魔王と呼ばれる者たちを片っ端から潰して回つてるといふのだ。

そのおかげで人々は平和を享受し、安心して眠ることができるよう。

ある意味で、その人物は人々の間のヒーローであった。

しかし誰もその人物の名前を出したり、特徴を上げたりしない。なぜか？

当然である。何故なら——誰も、その人物の名前も、貌さえも知らないのだから——



——蠢く肉の中心にそれはいた。燃えるように真っ赤に染まった液体が吹き出る様に目を輝かせ、グジュグジュという湿った音に耳を傾ける。

不穏な暗闇、不吉な光。相反する二つが奇妙に入り交じる様は正に混沌と称するに相応しい光景であった。が、その中心にいる者はそれ以上の混沌をその肚はらに宿しているように見えた。

右腕はその足元で脈動を続ける肉塊よりもお悍ましく蠢き、その姿は一度として留まることはない。無数の触手が集まり、うねるその様は吐き気を催すほどだ。

音もなくそれは立ち上がり、その右腕と呼んでいいのかすらわからない肉塊に掴んでいた。何かを目の前の高さまで掲げた。

闇の中、はつきりとした姿は確認できない。しかし、闇とは違う悍ましい光だけはそれをうつすらと照らし出してくれた。

それは人の形をしていたものだった。そう、あくまで過去形である。今現在はその形を歪に歪め、とても人間とは言えない見た目へと変貌していた。

よく耳を澄ませば聞こえてくる不気味な吐息。口から流れ出る呪詛がそれに彩りを加えている。

——殺し——てやる

——できるもんならやってみる

それに対する反応。嘲笑うかのような声音で吐き出されたそれを聞き届けた人の形。"だったもの"は、終止絶望した表情のまま、一切の反応を示さなくなった。

ひとしきり嘲笑った後に貌に浮かべたつまらなそうな表情。反応を示さないただの肉塊に興味などとうに失せていて、あとはどうなるかと知ったことではない。

しかし今の状況ではまだ使い道がある。

掴んだ肉塊を適当に地面に放り投げる。そのとたんに、地面はグ



ジグジュとグロテスクにその姿を変えて肉塊を包み込んだ。すると――

ベキツ  
バキツ

硬いものを砕く音。それと同時に更にその形を歪める肉塊。やがてそれは段々小さくなっていき、ついには先程と同じような平らな地面へと姿を戻した。

ケラケラと木霊する嘲笑、脈動を続ける地面。

明らかに狂つていようとも、それを許容するかの如く辺りを包みこむ混沌が、どれだけ異常であろうとそれを指摘するものはここにはいない。

あるのはただ、狂気だけなのだから。



「魔王狩りじゃと?」

団子屋の一角で投げ掛けられた問い。訝しげに振り向くと同時に鈴の音が凜と響く。はい、と近くにいた店員は答えた。

「なんでも最近名のある魔王が次々と倒されてるらしくて……。しかも倒された魔王本人もその後見つかってないとか」「ほう?」

物騒だな、と心の中で付け加える。団子の最後の一個を食い千切り、串を既に高々と積み上げられた山の新たな材料とする。後に店員に聞いた話では、その魔王たちはなんの前触れもなくピタリと出現しなくなったらしい。さらに、噂を囁いているその誰も彼もが魔王とその「魔王狩り」のゲームを見たことがないという。

「なんとも可笑しな話よの?」して、その「魔王狩り」というやつはどのようなやつなのだ?」

もつともな疑問。団子屋で大量の串を積み上げてようが、これでも魔王と呼ばれる身である。心配になるのは当然であろう。

しかし店員は、

「いえそれが……誰も姿を見てないらしくて……」

「誰も？それはおかしいだろう、なら誰が『魔王狩り』などという噂を流したのじゃ？」

「噂を流した人もわからないらしいんです……。いつからか気づいたら流れてた、みたいな感じなので……」

「ふむ……」

中々奇妙な事態に陥っているようである。行方不明の数多の魔王、姿が知れない『魔王狩り』、発信源の分からない噂。

娯楽を求める神仏にとつて、好奇心とは天の啓示に等しい。ならば従わない道理は無いだらう。

「御馳走様」

口を拭いて立ち上がり、懐から出した代金を店に置く。さて『魔王狩り』の搜索だ、と意気込んだところで店員から声がかかった。

「あのお……とここで一つ聞きたいのですが……」

「なんじゃ？」

「……こんなところで何してるんですか、白夜王様？」

ピシッ

白夜王の表情が固まる。そう、何を隠そうこのお方、お忍びのつもりで団子屋に来ていたのである。魔王と呼ばれても仮にも女の子(?)である。甘いものが食べたいときだつてあるのだ。

「あゝ……バレてた？」

「逆によくバレないと思つてましたね」

はあゝと、目の前のうっかりした魔王様にため息が漏れてしまったのはきつと店員のせいではないはずである。



——仕込みは上々だ。

噂で人々の記憶に『魔王狩り』は深く根付いた。一部では『魔王狩り』を英雄視している者もいるらしく、憧憬の念すらも生まれていくらしい。



一切掴めずにいた。

行方不明の魔王は少なくとも十人から二十人。これだけの数がいなくなっているのに一切の情報が無いなど明らかに異常だ。

(一体どうなっておるんじや?)

あまりにも完璧すぎる隠蔽、あまりにも無さすぎる情報に、白夜王も少し疑問を持ち始めていた。

情報という形の無いものは必ずどこからか漏れるものである。にも関わらず「コレ」なのだ。勘違いで済ませるには惜しい。

(まだ調査が必要かの?)

再び歩き出そうとした、その時、

カタン

「ん?」

後ろから聞こえた不思議な音。まるで蓋を閉じたかのような音だった。

しかし近くに蓋のついた物など持っている者はいない。気のせいかと割り切つて前を向く白夜王。照りつける太陽の光が妙に心地よくないのは何故だろうか?

白夜王は太陽の星霊である。故に太陽とは己自身のようなものであり、分身であるとも言える。そのはずなのに心地よくないというのはどうにも解せない。まるでこれから起こる何かを無意識に予期しているような――。

悩んでも起こっていない未来などわからない。そう理解してはいなくてもどうしても頭が晴れない。

ふと上を見上げてみる。太陽は視線の先で光り輝き、隣に高く聳える塔を照らしていた。

しかし、今日の塔は何か違った。いや、正確に言えば屋根に誰かいる。屋根に登れる手段などあの塔には備えられていなかったはずなのに。

キョロキョロと街全体を見渡すように首を右へ左へ動かすその人影。何を見ているのかは白夜王の位置からは把握できないほど離れた距離にいるというのに、その瞳がこちらに向くと白夜王の背筋に嫌

な悪寒が走る。

やがて人影は首を動かすのを止め、視線を一点に固定する。その方向は――。



――さて、クライマックスだ。

人影は塔の屋根の上から街を見下ろしていた。

――登場はどこがいいだろう？あそこか、あそこか、あそこもいいな。

様々な場所に目移りしながらクツクツと笑う人影。目を彷徨わせるとどこも人の笑顔で満ち溢れていて、彼ら彼女らが幸せを満喫しているのだと容易に察することができる。

――だからこそ――  
だからこそ、やりがいがある。そう口には出さずに心の中で呟いた。

これから起こる“ショー”は、皆が幸せでなければ面白くないのだ。幸せで、笑顔を浮かべて、そしてその現実に溺れていてもらわなくてはならない。

――あそこも魅力的だな。  
目を向けた先にも多くの幸せがあった。子供の笑顔、戯れる親の笑顔、どれもこれもが素晴らしい美しさを誇っている。

右へ、左へ。最も美しい輝きを放つ場所を探す。この街は素晴らしい。不幸など微塵も見受けられず、街を包む光に一点の陰りもない。

――だがやはり――  
人影が目を向けたのは先程の子供がいた場所。親子の絆の美しさに勝る物は中々無いだろう。

しかし、人影はある事実気づく。

――あれ？

記憶ではあの場にもう一人いたはずなのだ。頭に鈴を着けて、扇子を持っていた女の人が。

一体どこへ？と思考を巡らせている人影に、唐突に声がかかった。「ほう、中々良い眺めだな。上から見下ろすとまた違った風景が見える」

それは女性の声。凜と鳴る鈴がその女性の優雅さを引き立たせているようにも思える。

振り返れば、そこにいたのは先程まで下の街にいたはずの女性であった。一体どうやって一瞬でここまで移動してきたのか疑問が残るところではあるが、今はそんなことどうでもいい。

「おんしはどう思う？……ここからの眺めは実に良いと思わんか？」

「———そうだね。そう思うよ」

女性に対して初めて開いた口。妙に柔らかい口調であったが、その声音に柔らかさなど一切感じられない。

女性——— 白夜王は少し不信に思っただけで問いかける。

「ところでおんし、ここで何しておったのだ？まさかただ街を眺めておった、というわけでもあるまい？もしそうだとしたら、わざわざ屋根まで登る必要は無いであろうからな」

「へえ、流石だね。『白夜王』。流石の考察、流石の思考力といったところか」

ピクリと白夜王の眉が動く。それを知ってか知らずか、人影は得意気に進める。

「やだなあ、そんな顔しないでよ。だって貴女有名人だよ？知らない奴がいけないわけじゃないでしょ？」

「それもそうか……つて、そうではなくてだな。おんしはここで何を、しておったのかと聞いておるのだよ」

そうだねえ、と人影は顎を指で押さえた。

「これからやる『シヨール』の場所選びだよ。そうだ、白夜王も見えていつてよ。ここは特等席だ」

「『シヨール』……とな？」

「そう、『シヨール』だ」

隣に立つ白夜王に対して顔も向けずに言い放つ。

一筋の風が二人の間に吹いた時、人影は急に口を開いた。



その悲鳴を皮切りに、街のあらゆるところで蔓延していく惨状。肉塊に吞まれ、絶叫を響かせる人々。

血が飛び散り、肉は引き裂け、絶望が空気を満たす。

白夜王はその光景を塔の上から、目を見開いて見つめていた。

「なんだ……………これは……………?」

「ッジョー」だよ」

ハツとして人影の方向に振り向く。その人影は嘲笑を浮かべながら宙に浮き、白夜王を見下ろしている。

「ああ、そう言えば自己紹介がまだだったね」

まるでこの状況を愉しむかのような声で告げられたその声は、果たして白夜王に向けられたものだったか。それとも、この箱庭という世界に向けられたものだったか。

人影は全てを見下すように、バカにするように嘲笑いながら、人影は告げた。

「箱庭の民に告げる！後世まで俺の名前を語り継げ！俺の名前を思い出せ！俺は這いよる混沌」ニヤルラトホテプ」!!!君たちに、恐怖と狂気を振り撒く者であるッ!!!!」

声高らかに、堂々と。!!!!」







テプへと移す。その顔を見れば、苦悩する白夜王を嘲るようにニヤニヤと口を歪めるのが目に入った。なんともムカつくことである。「そうだね、そりゃわからないだろうよ。だってわかるようにしてないもの」

そう簡単にわかるわけない、と付け加えながらニヤラトホテプはケラケラ声を上げる。そして人差し指を下に向けながら白夜王に言った。

「で、どうする？ 正体がわからないからってここで観察を続けるか？ ほら、そんなことをしている間に——」

白夜王がニヤラトホテプの指に倣って下を見れば、そこには迫り来る肉塊から逃げる小さな子供の姿。その子供は先程、にこやかに親と笑っていた子供である。どうやらニヤラトホテプ的には白夜王があの子供を助けに行くのが見てみたいらしい。だからこそその忠告、だからこそその勧告だった。

白夜王もそんな思惑には気がついていない。だが、当然無視することも出来ず、白夜王は塔から飛び降りた。ニヤラトホテプはそれを見て更に嘲笑を深める。

突如上から落ちてくる白夜王に気づいたのか、その肉塊は赤いその体から何本もの触手を伸ばして迎撃する。しかし、白夜王は空中での体重移動と姿勢制御によってその尽くを避けて見せた。そのまま吸い込まれるように子供に迫る肉塊のもとに近づき、拳を引き絞る。炎を出せばすぐその子供にも被害が及んでしまう。その危険を恐れただからこそその判断だ。

肉塊まで手が届く距離まで近づいたとき、引き絞った拳を力を入れて突き出した。その余りの拳の速さに空気が啼き、風が起こる。そして、そんな強大な衝撃を受けた肉塊はまるで豆腐を崩すようにグチャリとその形を変えた。

——はずだった。

「……………えっ？」

意図せず漏れてしまう間の抜けた声。しかし、そんなものも気にならない衝撃が白夜王を襲った。

なぜなら、攻撃を加えたはずの肉塊が、一切の傷を負うことなく子供を食らったからだ。

白夜王は確かに肉塊を殴った。全力とはいかなくても、子供に迫るあの部分を吹き飛ばすには十分な威力だったはずだ。

しかし、そんな思考は今の白夜王には出来ない。

血が吹き出る。肉が裂ける。臓器が見える。

そのグチャグチャになったただの肉の詰まった袋は、確かにさつきまで人間として存在していて、人間としての幸せをその全身で感じていたはずである。

それが今はどうだ。幸せは絶望に変わり、死んで使い物にならないその体は何処の何とも知れない肉塊に貪り食われている。

そして何より、その最後の表情が一番悲惨であった。

食われる瞬間の、白夜王に伸ばされた最後の希望に縋るその手を、白夜王は掴めなかった。赤い肉塊が伸ばされた手を折り、千切り、食らう。幼い子供には強すぎる痛みだったことだろう。

瞳は苦痛に染まり、顔は絶望に歪む。その瞬間、白夜王が感じたのは何か。

怒り？悲しみ？違う。白夜王の心を埋め尽くしたのは、ただ一点の曇りも無い後悔だけだ。

なぜあのとき子供を優先しなかったのか。なぜあのとき肉塊を殴ることを優先してしまったのだろうか。なぜあのとき……………ニヤルラトホテプを放置してしまったのだろうか。



う証拠だった。

パラパラと崩れ、塵を巻き上げる塔の屋根 “だったもの” はもはや見る影もなく、赤以外の唯一の色だった空の青すらも、風にのって運ばれていく塵で黄土色に染まり始めていた。

即死。この光景を見れば誰もがそう思うだろう。

太陽の星霊による過剰<sup>オーバークイル</sup>な衝撃を浴びせられたのだ。普通に考えれば生きていられるはずがない。

人間の脆弱さなら、この街の惨状がありありと語っているのだから。

だがそれでも白夜王の顔が晴れることはない。

本能で察しているのだ。あの気持ち悪い何か<sup>ニヤルラトホテブ</sup>が、この程度で死ぬはずがないと。

そして、その予感の本物となる。



舞い上がる塵が視界を遮る。普通であれば鼻や口から侵入した灰塵を体外へ排出するために咳の一つや二つするのだろうが、今この場にそのような音は無い。

白夜王がニヤルラトホテブに向けて放った衝撃は、偶然かそれとも意図してのものか、塔の屋根だけを的確に吹き飛ばした。そのおかげで搭自体は形を保っていて、なんとか崩れずに済んでいる。

しかし当然屋根は跡形も無く消し飛んでいて、砕けた瓦礫が辺りに散らばるといふ様相を呈していた。

その瓦礫の中、モゾモゾと動く肉片がある。湿っぽい音を立てて這いずるそれは、他にも飛び散ったと思われる肉片とくつつき、その体積を増大させていく。

いくつも、いくつも、いくつも、いくつも。集まっては取り込まれていく肉片が人並みの大きさまでなったとき、その形に変化が起きた。

ベキベキと硬いものを無理矢理曲げるような音がなったかと思え

ば、細い触手のようなものが飛び出し、数本集まり人の腕のような形を作る。

そのまま足、首と人の部位が次々と生まれ、ただの肉の塊にしか見えなかったその表面にも肌のような光沢が見られるようになった。

「乱暴だな……」

新たな体を確かめるように指を開いたり閉じたりしているそれはゆっくりと口を開いた。続いて顔に厭らしい嘲笑を貼り付け、バカにするように言う。

「自分でもそう思わないか？——白夜王」

言い切った直後に振るわれた拳。たった一度の跳躍でニヤルラトホテプのもとまで跳んできたと示すようにクレーター状にその身を歪ませた肉塊がその視界に入った。しかし、やはり肉塊に傷が付いた様子は無い。

ニヤルラトホテプはまるでわかっていたと言いたげに軽い動作で躲すと、揚々と声を上げた。

「おいおい危ないな。怪我したらどうする」

「戯けが。どうせ貴様はそんなこと微塵も思っておらんだろう」

「あ、バレた？」

クカカと笑いながら続けて襲い来る白夜王の蹴りを手首で受け止める。そしてそのまま手を返して掴み、へし折るために力を込めた。足首から走る鈍い痛みに危険を感じた白夜王は、急いで足を引き戻す。その勢いでニヤルラトホテプの腕がもげて足を掴んだままとなってしまったが、ひとまず危機は脱せたと安堵した。

——しかしそれは下策だった。

足を掴んでいた腕がドロリと溶ける。驚いたのも束の間、その溶けた腕だったものは瞬く間に白夜王の全身に広がり、拘束する。腕から足から、服の内部にまで侵入して一切の身動きを取れない状態にまで追い込んだ。

「ぬう……くっ……くっ……」

なんとかかして振りほどこうと四肢に力を込めるが、拘束が緩む兆しはない。

そんな白夜王に、態と足音を大きく鳴らしてニヤルラトホテプは近づいていく。

「なあ白夜王、今どんな気分だ？悔しいか？悲しいか？」

白夜王の前で足を止め、見下すような目を向けながら問う。屈辱からか、白夜王は口をきつく結んだままだ。

「俺はな、がっかりだ。まさかこんな簡単に捕まるなんて思わなかった。天下の白夜王様もこんなものか、とな」

顔を近づけ、その嘲笑を白夜王の眼前まで持っていく。白夜王は顔を背けて目を合わせないようにするが、ニヤルラトホテプは無理矢理自分の方向へ向けてそれを許さない。

「自分の立場をわかっていいるのか？俺はこの場でお前を罵ることだって出来るんだ。そうしない分、まだ優しい方だと思え」

顔を離してクツクツと喉で嘲笑う。三日月のように歪んだ口と目の奥に妖しい光が宿り、白夜王を見据えた。

「安心しろ。俺はお前に何もしないよ。自分の手を汚すのは好きじゃない。」

——あくまで、俺はね」

さよなら、とだけ言い、ニヤルラトホテプは白夜王の胸を軽く押した。ギフトを持たないただの人間でもできる、ほんの少しの力をかけるだけの行為。

だがそれだけでも、身動きの取れない白夜王の体を傾けるのには十分だった。



徐々に後ろに倒れていく体。重心がズレて体勢の立て直しが効かなくなる。

見開かれた目が捉えたのは、こちらを見下ろして嘲笑うニャルラトホテプの姿。

足が搭から完全に離れ、重力に従って自由落下を始める自身の体を制御することはもう出来ない。ニャルラトホテプの腕だったものが未だに白夜王を縛り続けているからだ。

落ちていく下には、新たな餌白夜王の到来を喜ぶ肉塊。ウネウネと肉と触手をくねらせる様子がまた気持ち悪い。

たった数十メートルを落ちる数秒の時間が数倍にも、数十倍にも引き延ばされたような錯覚に陥る。

そんな白夜王の耳に、ニャルラトホテプの声が滑らかに侵入してきた。

「そうだ、最後にネタばらししてやろうか。お前の攻撃があの肉塊に効かなかった理由」

こんな状況で何を言っているのだろうか。いや、ニャルラトホテプのことだからこんな状況だからこそ言っているのかもしれない。

「あの肉塊はね、とある怪物を核にして、そこに色んな魔王とかを合成して作ってあるんだ。近頃噂になってた『魔王狩り』とかはこの素材集めだな」

口元に手を当てて可笑しそうに事実を告げる。しかし、白夜王にとってのそれは当然初耳であり、耳を疑った。

それもそうである。姿を消した名だたる魔王が『こんな肉塊』に変貌したのだ。驚くなどというほうが無理な話だ。

「で、噂を流した。『お前らのヒーローだった『魔王狩り』はこんなことを仕出かしました』って、人々に衝撃を与えようとな。しかし失敗だったよ。そんなこと言う前に全部死んじまいやがった」

心底残念そうに語るニャルラトホテプには、人の命や苦痛に寄り添う色など無く、あるのはただ、自分の計画の失敗に対する落胆だけだった。こんなのは異常と形容する他無い。

「おっと、話がずれたな。で、お前の攻撃が効かない理由ってのが、こ

の素材にした魔王の中にある。正直、今回の計画で一番の懸念はお前だったんだわ。せつかく作った化け物も、太陽の炎で焼かれたら一瞬だからな。だから、太陽が効かないようにした。羿げいって知ってるか？中国神話に出てくる英雄でさ、太陽を9つ落とした功績を持っている。つまりだ、太陽に対する耐性だけはあるんだわ。太陽そのものみたいなお前じゃ、普通に考えて勝ち目無い。

——ネタばらしは終わった。それじゃ、今度こそさよならかな」

引き延ばされた時間が正常に動き出す。ゆつくりに見えた光景が一瞬で移り変わるほどのハイスピードまで引き上げられ、その変化に目が狂ってしまう。

しかし、そんなことを思っていたのもほんの少しの間のこと。すぐに背中にグチャリとした生温かい柔らかいものが当たり、グニャグニャと動き始める。

形を変え、姿を変えて白夜王を呑み込む肉塊は止まることなく深くへと餌を誘い、大きすぎる死の悦楽へと導いていくことだろう。

どれだけ抵抗しようとも、素材になった羿のせいで一切の傷は付けられない。詰まるところ、白夜王一人では抜け出すことなどできないのだ。

——そう、一人だけなら。

白夜王が全てを諦めかけたそのとき、辺り一帯に響き渡った雷鳴と、照らし出した光。それは街全体を覆う肉塊に直撃し、その体を焼いた。

そのショックからか、肉塊から吐き出される白夜王。美しい装飾を施された服は赤い液体に染まり、鮮やかだった髪は乱れてしまっている。しかしそれでも、その目には活力が戻っていた。

そして、白夜王が見たものは——



あちこちに落ちる雷は肉塊に穴を穿ち、焦がし、潰していく。

その様子に、ニャルラトホテプも驚愕を隠せないでいた。

そして、白夜王の傍に佇む雷を起こした張本人と思われる男の姿を見て、崩すことのなかった嘲笑を一瞬歪めた。

「そうか——」

その男とは——

「——ここでお前か——帝・釈・天——  
!!!!」

護法十二天の長にして、最強の軍神。

帝釈天が、そこにいた。

## 第十二話 「神とはなんだ？」

光が……………無い。

どこまで行っても暗闇ばかり。手を伸ばそうとしても体が動く気配は無いし、そもそも体が存在するかすらわからない。

いや、そもそも話、どうしてこうやって思考できているかすらもわからないのが現状だ。

自分が誰だかわからない。どこでどうしてどうやって生まれ落ちたかすら思い出せない。なのに体の動かし方は知っていて、しかし体は動かせない。

目があるのか、耳があるのか、口があるのか、脳があるのか。今こうやって考えている自分自身は常世に存在するのか。それともただの精神体なのか。

たった一つの手がかりすらも今の自分には無い。だが一つだけわかることがある。

あるのかわからない耳に聞こえる悲鳴。あるのかわからない口に入る血の味。あるのかわからない目から見える赤色。

それは正しく地獄絵図。壊れているとしか思えない惨状。そして、今自分が間違いなく人を殺しているということの証明だった。



「……………なあ白夜王。これは一体どういう状況だ？」

金剛杵を掲げながら男——帝釈天は傍らで佇む白夜王に問う。しかし、それに対して白夜王は知るか、と返した。

「私だつてわからん。気づいたらこうなつてた。わかるのは、アレが私たちの敵だということだけだ」

睨み付けた先。そこでは上から白夜王たちを見下ろすニャルラトホテプが、ただただ冷めたような目で佇んでいた。

「なあ白夜王、あいつの名前は？」

帝釈天が問う。白夜王はその質問に答えた。

「あやつは先程『ニヤルラトホテプ』と名乗っておった。心当たりは？」

「無いな。一切無い」

きつぱりと帝釈天は断言する。しかし、この箱庭において名前すら聞いたことがないというのは、実は結構珍しい。

ギリシア神群しかり、インド神群しかり、その全ての神群は外界にて発生した神話という概念が箱庭に來たものである。そして人間の信仰によって力を増幅し、その存在というものを増していくのだ。

そして、ここで矛盾が発生する。人類最終試練として、天動説を背負っている太陽の星霊『白夜王』の力というものは、箱庭に名前すらも届いていないニヤルラトホテプでは、到底及びもつかないほどの力のはずなのだ。なのに白夜王はニヤルラトホテプを殺せなかった。

信じられないことだが、事実こうなっている。理由を探ろうとしても手がかりなどほぼ無いも同然だが、無理矢理こじつけるならこうなるだろう。

人間以外のものに信仰されている、と。

あんな狂気に染まったとしか形容できないようなモノを信仰するとなれば、きつとそいつもマトモとはいえないだろう。しかしなぜ、人間に信仰されないのか？狂っているから？違う。狂っていても、同じ狂人なら信仰の対象となりえるだろう。だとしたら、残された可能性は二つだ。

その可能性とは、そもそも外界で存在が観測されていないか、発祥の文献もしくは資料がまだ出来ていないかという、神の存在を根底から覆す、矛盾しか孕んでいない仮説。

ありえない。しかし、それしか他にありえないのだ。

考えれば考えるほどにハマる泥沼のような思考が頭を支配するが、それを無理矢理に振り払い白夜王はキツとニヤルラトホテプを見据える。ニヤルラトホテプは困ったように肩を竦めた。

「おいおいそんなに睨まないでくれ。俺みたいな脆弱なヤツだと怖くて恐くて動けなくなっちゃうぜ？」

「減らず口をッ……………」

歯をギリと噛み締めて殺意を剥き出しにする白夜王。しかし、帝釈天はそれを手で制する。何故、と言いたげに白夜王は横の男を見遣るが、帝釈天の目に映る光から彼の考えを察したのか、すぐにその殺意を抑えた。

それを見ていたニヤルラトホテプはクツクツと可笑しそうに嘲笑う。

「あれえ？どオオオオオオしたのかなア白夜王サマア？」

あからさまにバカにしたようなその口調に苛つきを覚えるも、理性でそれを抑える。挑発が失敗したことで何か思うところがあつたのか、ニヤルラトホテプはチツと舌打ちをした。

「なあんだ、乗ってくれないのかよツマラナイ。——で、そっちは何か用でもあるのか帝釈天？」

首をグレイと曲げて白夜王から帝釈天へと視線を移す。その問いかけに、訝しげな目で彼は答えた。

「…俺は疑問なんだよ、ニヤルラトホテプ。お前の事が、不思議で堪らない。こんな惨劇を引き起こしたかと思えば、お前はただ見てるだけ。白夜王を地に落とすだけの力があるかと思えば、挑発するだけで自ら手を下さない。目的が一切見えず、むしろ目的なんて無いように見える。——単刀直入に聞こうか。お前は何をしたいんだ？」

「何を、ねえ？」

その言葉を受けて、ニヤルラトホテプは顎に手を添えて少し考えるような仕草を見せた。

「お前らってさ、人形遊びとかしたことあるか？」

口を衝いて出てきたのはそんな問い。帝釈天と白夜王は意味を理解できず首を傾げた。

「俺はそういうのを見てるのが結構好きでさ。ミニチュアの中でいくつもの登場人物を操って、その人生を見るのが楽しいんだ。でも、破壊させるのはつまらない。」

カミサマが人形を壊すのなんて、人が雑草を踏むのと同じくらい無意味なことなんだ。圧倒的な力に蹂躪されるのは見てて飽きないが、蹂躪するのは何も神じゃなかったっていい。

だから俺は考えたんだよ。そして思い付いた。神が手を下すんじゃない。登場人物を一人、増やせばいいんだって。そのために、何人かの登場人物は消えたけどね」

そう語るニヤルラトホテプの口は可笑しそうに歪んでいて、ケラケラと笑いが漏れていた。

帝釈天には、それが気持ち悪くてしようがなくて、

「……お前、本当に神か？」

「もちろん。俺こそが、神だ」

帝釈天の言葉に、嘲笑いながらニヤルラトホテプは答えた。

◆◆

痛い。

体が焼かれる。雷が貫き、心地の悪い痺れを残す。

何故。何故。何故。何故。何故。

このような痛みを受けねばならない。

……これは報いなのか？

人を殺した。人を食らった。そんな禁忌を犯した私への、下されるべき罰なのか？

かつて太陽を落とした英雄として君臨していたというのに、いつから私は裁かれるべき悪と成り代わった？

……

私は、いつから私自身を英雄だと認識した？

◆◆

果たして、神とはなんだ？

定義としては、『宗教信仰の対象』だとか、『絶対的、超越的な存在』だとか、様々な考え方があって、一概に神というものは表現できないものだ。

それは力であり、知恵であり、災いであり、祝福であり、自然であ

り、文明であり、人に近いものであり、人とは遠いものである。

それではこの混沌は、神と呼べるのか？

災いを振り撒き、狂気を齎し、知恵を授け、文明を進める。ある時は人間の味方をして、ある時は人間の敵となる。しかしそれは二面性などではなく、むしろ「二」などという数字では計り知れないほどの貌を使った結果生まれてしまった、人間の言う「化身」だった。

その化身が信仰を得て存在を確立させ、神の名前を冠し、力を増大させ、貌となる。その貌にも名前が付き、千の貌の一つとなって存在する。

それは男だったり、女だったり。王だったり、市民だったり。生物だったり、無生物だったり。ありとあらゆるものに姿を変え、ありとあらゆる場所に現れる。それぞれに信仰が伴っているのならば、それは神と言えるのだろうか。

だが、誰も見たことない化身さえも神と成り得るといふのなら、それはきつと、神というものの定義を塗り替えてしまふのだろうか。

その答えは、きつと誰も知らない。



「俺はね、帝釈天。メタつてのがあんまり好きじゃないんだ。ストーリー上の登場人物たちの間に割って入る現実という矛盾が、とても耐えられない。機械仕掛けの神デウス・エクス・マキナじゃないんだからさ、思い描いた展開の中に直接入り込むカミサマが、どうも見るに堪えないんだ。まるで子供のお遊びの中に大人が入っていくみたいな、そんな感じがする。

そして今、俺が手掛けたこの箱庭を舞台にしたシナリオの中に、お前というメタが入り込んだ。カミサマが登場人物になって、あまつさえ作者に意見した。これが許せると思うか？ああ許せない、許せないね」

ニヤルラトホテプはそう口にした。しかしその声に怒りや焦燥は無く、あるのはただ決められたことを言うだけの機械のような、無機質な冷徹。突如出現したイレギュラーに向けられた、明らかな落胆



だった。

「そういうわけだから早いとこ出ていってくれ。折角面白くなりそうだったのに興ざめだ。それとも何か？お前が新しい登場人物になつてくれるのか？」

そうは言うものの、ニヤルラトホテプの仕草に期待の色は無い。それこそ、面倒なものは早く片付けてしまいたいという、人間に酷似した願望をその貌に張り付けていた。

「一つ、聞かせてくれ」

帝釈天が言う。いいだろう、とニヤルラトホテプは質問を許可する。

「お前は何故、こんなことをする。お前は何故、人形遊びに拘る」

「そんなこと、決まってるだろう？」

まるで小さな子供に当たり前のことを聞かれたかのように返すニヤルラトホテプ。しかしその返答は、およそ当たり前とはかけ離れていた。

「楽しいからだよ、好きだからだよ。俺の書いたシナリオで、俺の掌の上で踊る人間を見るのが、ね。簡単に言えば趣味だ。それが何か？」

「……それだけか？」

「ああ、それだけだ」

「………そうか」

帝釈天は短くため息をついて言う。

「なら、俺は徹底的に邪魔をする」

右手には黄金の紙片が握られ、やがてそれは光輝く槍へと姿を変える。それこそが、インドの叙事詩『マハーバータ』や聖典『リグ・ヴェーダ』に名を残す神インドラの、真正正銘の切り札。穿てば必ず勝利する、最強の武器——インドラの槍。

それを見て、ニヤルラトホテプは不敵に笑う帝釈天の意図を理解し、焦った。そして、肉塊に命令を下す。

「まずいッ——早くそいつを殺せ『シヨゴス』！今すぐだッ！」

その叫びに応じたのか、今まで手出ししてこなかった肉塊は一斉にその身をうねらせ、大量の触手を生み出した。それらは全て方向を帝



……ああ、この光こそが……  
私の求めていた、光ものだったのだ。



赤い雨が降る。

弾けた肉はあちこちに、飛び散った血は降り注ぎ、食われた市民の骨が地面を白く染める。

不吉な血の色に彩られた紅の空を見上げる白夜王の、骨のような鮮やかな白銀の髪は今や真っ赤になって、足元全域に広がる血の池と同化していた。

その横に佇む、同じくその髪を赤く濡らした帝釈天は、視線の先で髪を乱暴に掻き上げるニヤルラトホテプを見つめていた。

視線の先では、

「あアんのクソがッ！なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでツ！！なアにが『求めていた光もの』だッ！消え損ないの滓風情がいつちよ前に人と同じようなこと考えてんじやねえよッ！」

これまで見せることのなかった、ニヤルラトホテプの明らかな『激情』。落胆、嘲笑、それらは何度も見せていたが、それでも見せることのなかった『怒り』という感情が、今爆発していた。

「どこで間違えた?! 『シナリオ』は完璧だったはずだ！登場人物キャラクターも、舞台ステージも、全て用意した！なのに何故——！！！」

その時、気づいたようにニヤルラトホテプはハツとする。そして、帝釈天の方へ睨み付けるような目を向けた。

「ああそうだよ————てめえのせいだよ帝釈天！てめえささえ………てめえいなければッ！」

「悪いが、それは出来ない相談だな」

ニヤルラトホテプの言葉をそう一蹴し、帝釈天は右手に金剛杵ヴァジュラを握自ってニヤルラトホテプの敵へと向けた。

「お前がこれ以上今回のようなことをしようというのなら、俺は護法

十二天の長として、そして一つの神として、お前を殺すために全力を尽くす」

その眼差しに込められていたのは、やると言ったらやるという、明確な決意。たとえ馱神と呼ばれようとも、けして衰えることのないその威光は形の無い刃となり、ニヤルラトホテプを刺した。

「……そうかい。決意表明ご苦労さん」

ヒョイと軽い動きで塔から飛び降り、ニヤルラトホテプはピチャリと地面から血を飛ばす。

そして踵を返し、近くの建物の影へと歩いていく。

「なら俺も言っついてやるよ」

ふと足を止め、振り返った横目で帝釈天を睨み、ニヤルラトホテプは告げる。

「そう簡単に死ぬんじゃねえぞ。お前は俺が、手ずから殺す。それまで作者に齒向かったメタとして、死の恐怖に怯えてろ」

それだけ言っつて、ニヤルラトホテプは再び歩き出した。待て、と帝釈天は言おうとするが、その言葉は上から突如現れた顔から触手の生えた蛙のようなモノに阻まれる。

「じゃあな。せめてそいつらの相手でもして暇でも潰してろ」

まるで親しい友人にでも別れを告げるかのような口調でそう言い残し、ニヤルラトホテプは闇へと消えた。

## 第十三話 「アンサー」

「ニャルラトホテプ？それがあの災害の原因？」

日の差す縁側でお茶を啜りながら、斉天大聖——孫悟空——は隣でポーツと空を見つめる白夜王に問うた。彼女は茶碗を横に置いて答える。

「ああ、そう名乗っていたよ」

そう答える白夜王の目は虚ろで、遠い過去を見つめているように悟空には思える。彼女はそつと、「そうか」と答えた。

「しかし、一体そいつは何をやったんだ？街の者が全員例外無く皆殺しにされてるせいで、目撃者はお前と帝釈天しかない。街の外から遠目から見た奴の話では、ものすごい叫び声が出たとか赤い雨が降ったとか、曖昧なものばかりだ」

「まあ、大体あっておるよ。それはニャルラトホテプの生み出した結果の一つに過ぎないがな」

〃結果〃

それが何を意味するかは悟空にはわからない。当時その場に居合わせていない彼女には、白夜王の言葉から推測する他その時の状況を把握する手段は用意されていないので、よりハッキリと理解するため白夜王に更に質問をぶつける。

「……なあ白夜王。そのニャルラトホテプってのは結局何なんだ？お前の話を聞いても、イマイチどんな奴かわからないんだが……。せめて人相とかさ、覚えてないのか？」

悟空の頭に好奇心が芽生える。娯楽を求める強者の性か、それともただの物好きか、どうしてもそれには抗えない。白夜王もそれに応えようと、当時の光景を思い出そうとする。

「ああ、そうだな。あいつは……」

顎に手を当て思考して、ふと気づいた。

「……………あれ？」

「ん、どうした？」

悟空が白夜王の言葉に首を傾げる。白夜王は手で髪を掻き上げ喉

を震わした。

「……どういふことだ……どうして……どうしてあいつの顔が思い出せない……?!」

恐怖。白夜王は真つ先にそれを感じた。その当時どうしていたかはハッキリと思いつける。ニヤルラトホテプが何を言ったかも覚えている。破壊された街並みも、赤く染まった風景も覚えている。しかし、その中で不自然にニヤルラトホテプの姿だけが記憶から抜け落ちている。顔も、容姿も、服装も、あらゆる全ての情報が、まるで黒く塗り潰されたかのように思い出せない。そして何より怖いのが、その事実に関心するまで気づけなかったことだ。普通に考えれば、目の前に真つ黒の人物がいたら誰でも不審に思う。しかし白夜王は思えなかった。それほどまでに自然に、恐ろしいほど自然に不自然を隠蔽した。それこそ、人に言われて意識しなければ気がつかないほどに。

「……思い出せないなら、いいよ。無理しなくて。多分認識障害関係のギフトか何か使ったんだろ。白夜王<sup>オマエ</sup>を欺くほどとなると大分高位のやつなんだろうが。ギフトも、ニヤルラトホテプ自身も」

高位……本当にただそれだけののだろうか。白夜王にはむしろ、その対極——ニヤルラトホテプという存在は、誰よりも下に位置する地を這う闇風情にしか思えなかった。

「ああ、そういえば、あいつは自分のことを『神』だと名乗っておつたよ。帝釈天の問いかけに対して、な」

「神?じゃあ出典は何になるんだ? 神群か、それとも信仰か? それを判明すれば対策の立てようはあるはずだろう。俺はニヤルラトホテプなんて聞いたことないんだが……」

「そう、それなんだよ。私はそれがわからない」

キツパリと白夜王は言い切る。は?と悟空は間抜けな声をあげた。「私はな、この箱庭で魔王として過ごした数千年、ニヤルラトホテプなんて名前を聞いたことはただの一度も無い。それにな、あいつは赤い怪物が帝釈天に殺されそうになったとき、怪物のことを『シヨゴス』って呼んだんだ。こつちの方も、私は聞いたことがない。ましてやこの二者が所属する神群なんてものも、な」

「ええと、それってどういうことだ？ギリシアでもケルトでもエジプトでもインドでもないんだろう？どんな神だつて単体でその存在を確立させるのは難しいだろうて。だから神群なんてモノを作つて信仰を集めるんだろう？その大前提が存在していないなら、それはそもそも神として成立してるのか？」

悟空の意見も尤もだ。いや、むしろそれが当然の摂理であり、正しい答えである。ならばそこから外れたニヤルラトホテプは、一体どのようなにして「神」と名乗れるのだろうか。

「そんなの、神群以外に拠り所を作ればいいんだよ」「ッ?!」

突如横から聞こえた声。振り向いた先にはたった今話題に上がっていたニヤルラトホテプ自身がいて、さつき白夜王が置いた湯呑みに口をつけていた。

「ふむ、温ぬるいな。冷めた茶ほど不味いモノはないだろうに」

「貴様ッ……何しに来たッ！」

そんなニヤルラトホテプに白夜王は声を荒らげるが、当の本人は気にした様子も無くケラケラと笑っている。

「まあそう怒るな。俺はただ、手も足も出せずに家に帰った白夜王様が、どんな顔で過ごしているかを観察しに来ただけなんだからさ」

「嘗めた口を…………！」

挑発するような言葉を発するニヤルラトホテプ。白夜王は怒りを顕にして拳を握り締めるが、待てと悟空は片手でそれを制した。

「あれ、お前は」

いきなり間に介入してきた悟空に、何をしていると言いたげな雰囲気きういで声をぶつける。そんなニヤルラトホテプに、彼女は軽く笑みを浮かべて返答した。

「やあやあ、初めましてニヤルラトホテプ。俺の名前は知ってるな？」「勿論。『齊天大聖』孫悟空、有名人だ。そっちも俺の名前を知ってるってことは、もう白夜王から聞いたんだろう？」

「ま、そういうこと。話された内容は、にわかには信じがたいことだけだな」

「なるほど、全部聞いたのか。勝手なことをしてくれるな、白夜王」  
ニャルラトホテプは視線を悟空から外し、彼女の手の後ろでこちらを睨んでいる白夜王に移した。両者の眼光は交錯し、端から見ればまるで火花が散っているようにも見える。

「フン、何がいけない。未知の敵に対抗するのに持っている情報を共有するのは至極当然のことだろう」

「まあ、そう言われるとその通りなだけどさ。こっちだってシヨゴスが殺されて頭に来てるんだよ。これ以上邪魔されたら遊べないじゃないか」

「……遊び？」

悟空が「わからない」といった風に首を傾げる。ニャルラトホテプのいう遊びとは、曰く「人形遊び」であるが、その言葉の意味するところは小さな子供がするような平和的なものではない。

「そ、遊び。人形遊びだ。世界という小さな箱庭ミニチュアを舞台に、人間という小さな人形フィギュアをシナリオ通りに踊らせる、愉快的愉快なお遊びだよ」  
「……そんなこと、許されると思っているのか？」

不快感を隠す様子も無く言う悟空。普通はこのような話を聞かされた者は皆一様に同じ反応をするだろうが、しかしニャルラトホテプは呆れたような、失望したような表情を浮かべていた。

「ハア？何言ってるんだお前？この程度のこと、やっつてるのが俺だけでも？冗談で言ってるなら笑えないぞ。ああ笑えない。

いいか、これが神の在り方なんだよ。人を騙して、人を貶めて、人を操る。そうやって、自分が楽しめるような展開を演出する脚本家、それが「神」というモンだろうが。欲望を満たすためだけに生きる外道こそが神そのものだ。北欧のトリックスターと呼ばれたロキはどうだ？息子可愛さにカルナを陥れたインドラはどうだ？全部全部ぜーんぶ、許されてはいけない外道だろうが」

「ッ……それは……」

確かにその通りだ。神というのは生まれつきの強者。強い故に困難に遭うことなど人に比べれば圧倒的に少ないだろう。だから、その開いた時間を、暇を別の方法で潰すしかない。その矛先が向けられ



る機会が最も多いのは——神より弱い、人なのだ。  
でも、それでも。

「それでも——お前は異常だ」

その言葉を発したのは、悟空か白夜王か、どちらだったか。

神は人を貶める。しかし、怪物をけしかけて街一つ壊滅させ、その様を楽しむなど、そんな外法に手を染める者はいない。悟空も白夜王も、そんなニヤルラトホテプの在り方を受け入れられなかったし、受け入れたくもなかった。

「異常、ねえ。そんなレッテル、貼り付けてどうするんだ？俺にとっての普通がお前らにとつての異常であるのなら、お前らにとつての普通こそが、俺にとつての異常なんだ。普通だとか異常だとか、所詮そんなの主観の相違でしかないだろう？」

「……………」

何故、そんなことを言う。

間違っていない。むしろ正しい。だからこそ、厄介だった。

ただ外道なだけなら真正面から否定できる。だが、間違いながらも真理を突くなら、それを否定することはできない。

ニヤルラトホテプは相手を嘗めたように振る舞う。白夜王はそんな態度に心底苛ついてしたが、その実、嘗めていたのは自分の方だった。

嘲り、蔑み、見下す。相手から反論のカードを奪って、ニヤルラトホテプ自身の論を突きつける。

——ニヤルラトホテプの狡猾さを、嘗めていた。

「おいおい、そんな怖い顔するなよ。蛇に睨まれた蛙みたいに動けなくなっちゃう」

そう言いながらも、ニヤルラトホテプは言葉通りの様子など全く見せず足音を鳴らしながら庭の木の近くまで寄る。

「ま、元気そうで何より。そういうわけで、俺はそろそろお暇しようか」

クスクスと癪に障る笑いをあげて、ニヤルラトホテプは木の後ろの暗い影に同化していく。その際、「あ、そうそう」と言って、一言付け

加えた。

「予言してやるよ、白夜王。お前は近い内に必ず、俺の言葉に従うことになる」

それだけ言い残し、スウと音がしそうなほど滑らかにニヤルラトホテプは彼女らの前から消える。しばらく経った後に、悟空がゆっくり声を出した。

「あれが……ニヤルラトホテプか」

話を聞くだけでは伝わらなかったその狂気が、直に相對して初めてわかった。そして確信する。その気持ちは白夜王も同じなようで、互いに言葉を交わして意思を確認した。

—— あいつだけは必ず ——

—— ヤツだけは必ず ——

「箱庭から —— 追い出す」



暗い、完全なる闇に閉ざされた空間。そこに二つのモノが存在していた。

片方はニヤルラトホテプ。嘲笑を顔に貼り付け、暗くて見えないはずの手元に本を持ち、もう片方のモノを見据える。

もう片方は人間。黒人のように黒い肌を持ち、見た目は極々標準的に見える。

人間はニヤルラトホテプを見て問う。

—— クエスチョン、お前はどうかやって箱庭に来た？

ニヤルラトホテプは答える。

「アンサー、今回の召喚に別段イレギュラーは絡んでないよ。強いて言うなら、そうだな……：ファラオが死んだ、とでも言っておこう。あいつが死んだ時に輝くトラペゾヘドロム辺りでも回収されたんだろ。その内クトウル俺神群同が来るだろうが、あいつらと違って俺は色んなところに化身を持つてるからな。歴史に関わる機会も必然的に多くなるのさ。はい、次」

——クエスチョン、なんでお前の名前は箱庭に伝わってない？  
「アンサー、ハワードが生まれてないからじゃないか？クトゥルー神話という物語群が外界にまだ無いんだ。そもその話、作者が生まれてないのに俺という神がいること自体おかしい話だろ。はい、次」

——クエスチョン、ニヤルラトホテプ<sup>前</sup>を名乗ったのはお前だけか？

「アンサー、ま、そういうことだろうな。実際、何人の俺が箱庭に来たのかは知らない。赤の女王が来てるかもしれないし、膨れ女が来てるかもしれない。いや、もしかしたらオールド・ワンの使者が来てるかもしれない。当の俺は貌の無いスフィンクスとして召喚されたしな。化身なんて有りすぎて、名前なんか忘れたさ。俺の名前が知られてなかったってことは、俺みたいに悪ノリする奴がまだ来てなかったんだな。——お前だってそうだろう、人間<sup>俺</sup>？」

——クエス

「そこまででいいよ。答えるべきことにはもう全部答えたさ」

パタンと本を畳み、わざとらしく靴を鳴らしながら闇の中を進む。その背中を見て、更<sup>ニヤルラトホテプ</sup>に人間は問いを口にした。

——クエスチョン、お前は箱庭に何を望む。

「答えるべきことは全て答えたと言ったろう。まあいいよ、答えてやる。」

——決まっているだろう。更なる狂気を、更なる恐怖を。——

——何物にも勝る、混沌を。まずは………そうだな、手始めに白夜王の心でも折ってくるか」

クツクツと湧き出る笑いを堪える様子も無く、さも楽しげにニヤルラトホテプは底知れぬ闇に足を踏み入れた。



ガヤガヤと賑わう街中、道から外れた裏路地の奥にニヤルラトホテプは佇んでいた。まるで会う約束をしていた親しい恋人を待つかのように鼻歌を歌って、口元を歪める。

「ああ、〃招待状〃は届いただろうか。彼女は来てくれるだろうか。彼女はこの演出を楽しんでくれるだろうか」

何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、期待と不安を口にして、その度に恍惚の表情を浮かべる。その様子は正に恋の熱に浮かれる少年のものだが、しかしニヤルラトホテプのこれまでの所業を知っているととてもそうは思えなかった。

——— どれほど時間が経っただろうか。数秒か、数分か、数時間か。裏路地に現れたもう一つの足音に、ニヤルラトホテプは満足そうに振り向いた。

「ああ、やつぱり来てくれた。君ならきつと誘いに乗ってくれると思っていたよ。——— 白夜王」

満面の嘲笑で、ニヤルラトホテプはそう言った。



—— 惨劇だった。

数多の怪物が地から、空から、ありとあらゆる空間に開いた穴にも似た魔法陣より這い出る。黒い巨大な蛇に触手が付いた墓が街を縦横無尽に駆け巡り、悲鳴をあげて逃げ惑う人々を惨殺していく。蛇の牙に引き裂かれ、墓の操る棒に貫かれ、命ある生命から命なき肉塊へと変貌した。

「ヒツ……こつちへ来るなツ……ギャア——」

「ママ……ママアアアアアアアアアアアア!!!」

「お願い！お腹の子は……アアアアアアアアアア!!!」

眼前の墓から逃げようと身を翻したところで上から落ちてきた墓に押し潰される男が一人。親とはぐれたのか泣いているところを鉄棒で貫かれた子供が一人。身重の体では逃げられなかったのか、倒れたところで腹を裂かれ胎児を蛇に食われて絶望に染まる女が一人。

地獄絵図。阿鼻叫喚。死という概念を詰め合わせたようなこの空間において、白夜王は何をしていたかというのと、

「ツ——ラアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

怪物の殺害を始めていた。今にも市民に襲いかかるといった直前の墓を捻り潰し、足に子供を挿んだ蛇を叩き斬って子供を降ろし、まだ助けられる者を助けた。

もしもこの場でニャルラトホテプを攻撃していたら、これから奴が起こす悲劇を止めることが出来たかもしれない。バラバラにしても

いずれ再生するが、ならば再生出来ないようにバラバラにし続けなければならない可能性があったかもしれない。

しかしそうした場合、そちらに時間の全てを取られ表通りの市民を助けられない。これからのことを考えてニヤルラトホテプを殺すか、今表で起きている惨劇をおさえるためニヤルラトホテプに背を向けるか。白夜王が選んだのは、後者だった。

——ああ、そうだよ白夜王。お前がそうするからこそ、俺はお前に殺されない。

ニヤルラトホテプと相対するには、あまりにも邪魔だったモノ。それは——優しさ。

——お前は優しいから。俺を殺せるかもしれないけど、人を助けることを選んでしまう。

本当に白夜王が取るべきだった選択肢は、表の者を見捨ててニヤルラトホテプのみに標的を絞ること。そうすれば街の人間は死ぬが、それだけの犠牲でこれから起こるかもしれないニヤルラトホテプが原因の惨劇は防げる。でも、それでも、

——お前は余りにも、人間らしすぎた。

人は全てを救うことなどできない。誰かを救済するということは誰かを見捨てるということであり、誰かを見捨てるということは誰かを救済することである。相反するこの二つが隣り合わせで存在しているという事実こそが、この世界の覆しようのない真実であり、白夜王に突きつけられた現実だった。

——そうそう、あの招待状には続きがあったんだ。

悲痛と嘆きが合わさったような表情で怪物を蹂躪する白夜王を遠目で一瞥し、踵を返して行き止まりの方へ歩く。そして、その「続き」の言葉を口にした。

「——死を記憶せよ。殺し殺される惨劇を目に焼き付けろ。死と退廃に彩られた狂宴に、貴女をご招待しましょう」

そう言つて、ニヤルラトホテプは暗い影に身を落とす。ズズズと引き込まれるように沈んだその後には、そこに誰かがいた痕など何も残つてはいなかった。

——ああそうだ。折角だから、一つ置き土産を残していこう。  
そう、決意して。



白夜王は怒っていた。ニヤルラトホテプの狡猾さに、自分の愚かさ  
に、怒っていた。

「ツアアアアアアアアア——！！！！」

砕く切る投げる貫く穿つ擲つ壊す殴る破る咬む蹴る流る曲げる薙  
ぐ千切る剥がす開く撃つ。ありとあらゆる手段を用いて殺し尽くさ  
れた、もはや何だったかすら判別できない残骸が積み上げられる中  
で、白夜王は「魔」そのものの雄叫びを張り上げた。

怒りで我を忘れる、なんてことはない。むしろ彼女の頭は今までに  
ないほどクールで、今までにないほど冷静に、冷徹に対象の殺戮を行  
うために動いていた。

蛇の翼をもいだ。蟄の触手を千切った。蛇の牙を砕いた。蟄の腹  
を裂いた。繰り返される傷の生成。怪物が人間にやったことを、そっ  
くりそのまま白夜王は怪物にやり返した。

怪物を傷つけければ傷つけるほど、殺せば殺すほど、彼女の心も同様  
に擦りきれていった。むしろ、この状況下で見境なく逃げる人々にま  
で手を出さなかった分、彼女は耐えた方なのだろう。

そして、全ての怪物を殲滅し終わった後——もう白夜王に、誇  
りは残っていないかった。

周りに人はいない。粗方避難したのだろう。中には転んだのか、避  
難した者の残したらしき多くの足跡が刻まれたまま潰れた人のよう  
なナニカもあったが、きつと運が悪かったのだろう。

——ピッ、ピッ

白夜王は自分の体を見る。鮮やかな模様が刻まれていた着物は怪  
物の赤黒い血に染まり、手は肌色の部分が無いほどになっていた。

「——何故」

何故、私ばかりこんな目に。白夜王がその言葉を続けることはな



かった。視線の先に一人の女の子を見つけたからだ。

——ピツ、ピツ

逃げ遅れたのか親とはぐれたのか、不安そうな表情で嗚咽を漏らし  
ている。白夜王は見てられず、その子の前でしゃがんで優しい声で話  
しかけた。

「どうした？」

——ピツ、ピツ

ふんわりと柔らかく笑う。目を手で押さえていた女の子が白夜王  
に気づき、涙でうるんだ目に彼女を映した。

女の子は震える喉から懸命に声を絞り出す。

——ピツ、ピツ

「あのっ……あのね、白夜王様……」

「ん？」

——ピツ、ピツ

「あの……真っ黒なお兄ちゃんが、これ持って白夜王様のところに行  
けて」

そう言つて女の子は服をゆっくりたくしあげる。そこにあつたの  
は——

爆発二秒前の爆弾だった。

「ッ

——ピツ



「もういい。放っておいてくれ。私は疲れた。ここで貴様を見逃して、腑抜けと罵られようが構わんさ」

「……へえ」

ニヤルラトホテプは落胆したように目を細めた。そして、彼女の中の感情の正体を察する。

それは——諦め。

届かない。殺そうとすればするほどに、他の誰かが死んでいく。長い年月を生きたとしても、その精神は“死”を達観できるほど強くない。だから白夜王は目を逸らした。それがニヤルラトホテプにとつては何よりも不快で、何よりも理解しがたいことだった。

ニヤルラトホテプは邪神である。だからこそ、人を振り回すことはあれど振り回されることはない。故に、誰かのせいで諦めるということを経験したことがないのだ。

——気に入らない。

ニヤルラトホテプは確かに心を折ろうとした。白夜王が足掻いて藻掻いて苦しむ様を見て楽しもうとした。でも、こんなにあつさり落ちるとは思っていなかった。

だとしたら、今やるべきは逆のプロセス。つまり——白夜王に希望を持たせる。

——本当なら、これはもつと後なんだがな。

「なあ白夜王、取引をしないか？」

「……………取……………引？」

「そう。端的に言おうか。——俺は箱庭から出て行ってやるよ」

「ッ……………」

それは、ニヤルラトホテプに関わった者なら誰もが望んでいた言葉。白夜王もそれに違わず、ハツとした表情でニヤルラトホテプを見上げた。

「それは……………本当か？」

「ああ本当だ。お前が俺の言う条件を呑むなら、俺はそう約束してやるろう」

——あと、一歩。

「条件？」

「そう。白夜王、お前は俺が出ていく代わりに仏門に下つて霊格を落とせ」

「ッ！」

それは取引というには余りにも分が悪すぎる条件。何故なら――

「貴様ッ……まさか他の魔王を……！」

「流石、察しが早いな白夜王。お前の身内鬣は有名だからな。うっかり動いてお前の大事な知り合いに手を出したら太陽を敵に回すことになる。そんなお前が霊格を落としたり、どうなるかわかるよな？」

遠回しな言い方をしているが、要訳するところなる。つまり、『ニヤルラトホテプが箱庭から出ていく代わりに他の魔王に好き勝手させる』ということだ。そんなことをすれば、この世界はより混沌とする。

「私……は……」

「さあどうする白夜王？俺を追い出すか、見逃すか。前者を選べば、箱庭は魔王が跋扈する文字通りの人外魔境になる。でも後者を選べば、俺はこれからも箱庭に君臨し続ける。どちらにしろ、お前の白夜王という名には二度と消えない傷が付くけどな！アッハハハハハハハハハハ!!」

響く嘲笑。狂ったようにグルグルと目まぐるしく駆け巡る思考の中、白夜王の頭にある言葉が浮かんできた。

「予言してやるよ、白夜王。お前は近い内に必ず、俺の言葉に従うことになる」

以前ニヤルラトホテプが言った言葉。あの時はただの戯れ言程度にしか思っていなかったが、まさか――こんなところでその言葉の通りになるなんて。

与えられた二択の選択肢。一見選ぶ自由があるように見えるが、違う。実のところ自由なんて存在していないのだ。

何故なら、白夜王の中には敵意があるから。二度と見たくもないという、人間染みた憎悪があるから。

嫌いなやつを追い出したいと、人を殺したやつを除きたいと願うことは、何もおかしいところはない。

だから——彼女の取れる選択は一つだった。

「私は……お前を追い出そう」

白夜王は——未来を捨てた。



「というのが、過去の事件の全貌だな」

時は戻ってサウザンドアイズの支店。白夜又は苦々しい顔で話を締め括る。同様に、黒ウサギ含むノーネームの面々も皆苦しい表情をしていた。

そんな中、一人ナイアは心の底からどうでもよさそうな声色で、

「まあ、そういうことだ。これでわかっただろ。俺は、お前らを助けるようなヤツじゃない」

そう言つて音もなく立ち上がる。そして襖に手をかけ開く。

「ま、待つてくださいナイアさん！」

「なんだよ黒ウサギ。言つとくが、俺にまだ何かを期待しているなら、その幻想をさつさと捨てることをオススメするぞ」

振り向き様に放たれた言葉。それと同時に黒ウサギに襲い来る圧力で彼女は一瞬押し黙るが、それでも次の瞬間にはなんとか喉を震わせることに成功した。

「私は……いつか必ず、貴方を——」

それは決意の言葉。黒ウサギだって、この邪神は怖い。内心は挫けそうなほど怯えているし、きつと顔は恐怖ですごいことになっているだろう。でも、言わなければならぬ気がした。だって——ニヤルラトホテプは、野放しにしているはダメなモノだから。

そして黒ウサギが続く言葉を言おうとしたとき、ナイアはそれを拒んだ。

「やめておけ黒ウサギ。それを言ってしまうえば、お前は二度と普通には戻れないぞ」

———これは忠告だ。悪に理由を求めるな。特に  
ニヤル俺みたいなやつラトホテプにはな」

それだけ言い残し、ナイアは襖を閉める。黒ウサギがそれを追おう  
としたとき、もう既にナイアは消えていた。

(……私は……貴方を……)

———貴方を、『ヒト』にしてみせます)



「もうお帰りですか？」

店先で掃除をしていた女性店員が、出てきたナイアに声をかける。  
ナイアはニコリと嘲笑って「ええ」と答えた。

「そうですね。俺はもうここでやることはやりました。あとは  
……」

ククと声を漏らし、ナイアは女性店員と目を合わせる。女性店員は  
その奥の光に嫌悪感を覚え目を逸らそうとするが、瞬間、彼女は目眩  
がしたのか少しよろけた。ナイアはそっと手を添え、支える。

「ああ、ありがとうございます。大丈夫ですよ、大したことはないの  
で」

「そうですか。では俺はこれで。ああそれと」

「なんででしょう?」

「貴女は少し笑った方がいい。でない、悪いもの”を引き寄せますよ」

では、と軽く手を振ってナイアは踵を返す。———「悪いもの”  
というのが何かを告げないまま。」



———しかし、何故だ?

ナイアは一つ疑問があった。明日飛鳥達が相対するガルドの発言によれば、どうやらあの外道は吸収したコミュニティの女子供を全て腹心の部下に食わせていたらしい。それがおかしいのだ。

腹心というからにはその人数は少ないはず。なのになぜ、数多のコミュニティから人質に取った者を一人残さず食べたのか。それに、残った戦力となる男共にも食事は与えなければならぬはず。それから全てを賄うのに、ゲームだけで事足りるのだろうか。

そこでナイアは思い当たる。

———いたじゃないか。人を消して祝福を与える、俺の化身が。

それは以前箱庭から去るとき、ちよつとした置き土産程度で置いておいたものだ。確か東区画を出た森に放置してあったはずだが———。

———そういえば、ガルドは元々森の守護者だったんだっけ。偶然見つけたんだな。いやあ、なんて運がいい。

どんな目的であれ、生け贄を捧げて恩恵を受け取っていたのならそれはニヤルラトホテプの信者と言ってもいい。だったら、そいつにやるべきことは一つ。

———それじゃあ一つ、邪神様が恩恵授けてやろうか。



暗い暗いとある屋敷の一室。そこで喉元を押さえて悶え苦しむ、虎





ば一目瞭然だった。

何か黒い液体が虎に注ぎ込まれている。それが男の手から出てい  
るのはすぐにわかった。

「GI……GU……GAAAAA!!!」

収まりきらないのか、口から液体が逆流する。それは床に大きな水溜まりを作り、手を抜かれた虎はその真ん中へ倒れ付した。そして、その体が少しずつ変化していく。よりおぞましく、より奇怪に。

男はその様子を見下ろし、愉快そうに嘲笑う。

「俺が直々に新たな名を授けよう。今からお前はガルドじやない。お前は……そうだな、Skinless beast“皮膚なき獣”とでも名付けよう。喜べ狂信者。お前は今日からお前でなくなる」

狂ったように、ケラケラと。



「さてさて。どう出る新生“ノーネーム”」

月が照らす森の木々の上。黒い翼と金色の髪を持つ美女が、舌で唇を舐めて妖艶な笑みでそう呟いた。その唇は赤く血で染まっており、それがその女が人という概念から外れた存在だということを示している。

と、突然彼女は笑みを消し、視線を背後へ移す。

「それで？いつまでお前はそこで見ているつもりだ。名乗りをあげる無礼者」

一瞬の沈黙。そのすぐ後、木々の間から大量の蝙蝠が飛び出し女の視界を遮る。それらが全て飛び去った跡に舞う青い葉の中で、一匹の巨大な双頭の蝙蝠が女を睨んでいた。

「……ほう。その姿は私が吸血鬼と知ってのものか？だとしたら悪趣味にも程があるな」

「いや悪いね。俺的に、夜に紛れるにはこれがちょうどいいと思ったのさ」

その声と共に蝙蝠は消え失せ、代わりに男が表れる。夜だからなの

か、それともそういうギフトでも持っているのか、顔が一切認識できない。

「初めましてレティシアⅡドラクレア。俺はニヤルラトホテプ、まあ気軽にナイアとでも呼んでくれ」

気味が悪い。レティシアが最初に思ったのはそれだった。まだ出会って数分なのに、もう「関わりたくない」と思い始めていた。言い様の無い嫌悪感を抱くが、レティシアはそれが表に出るのをなんとか食い止める。

「で、なんの用だニヤルラトホテプ。くだらない事だったら今すぐにも帰ってもらおうぞ」

「いや、別にくだらなくはないと思うぜ？それに、俺は腑抜けたレティシアⅡドラクレアに用は無い。俺が話したいのは「同族殺しの魔王」の方だからな」

その名を出した途端、レティシアの表情が変わる。ギリと歯を強く噛み締め、口からノンストップで吐き出されようとしている罵詈雑言を押し留めるその顔は、ナイアから見れば相当滑稽に映った。

「どうした、そんな顔して。もしかして「あのバカ共」に何か思うところでもあったのか？」

「……あのバカ共？」

レティシアは頭に疑問符を浮かべた。ナイアの言う「バカ」とは十中八九反乱を起こした者たちだろう。しかし、何故ナイアは彼らを知っているのだろう。「バカ」と呼ぶからには、彼らがしたことも知っていることになる。——何故、知っている？

「そう、バカ共だ。何時だったかな、前に会ったことがあってさ。その時に少し吹き込んでみたんだ。『お前らの王が太陽主権を手に入れた。このままでは思い上がった暴君になる。その前にお前らが王を討て。これは革命である』ってな。そしたらアイツ等まんまと鵜呑みにしやがった！少しは考えようとしなのかね？アツハハハ！」

「ツ！あれは……お前が?!」

「——そうだよ。俺が原因だ」

瞬間、レティシアの手に有無を言わさぬ速さで槍が握られ、ナイア

へと突き出された。一切の迷いが見られないその一閃はナイアの体を穿った。

——はずだった。

槍を通してナイアの向こうの闇夜が見える。しかし穴は開いておらず、血の一滴も出ていない。

信じがたい光景だった。ナイアはあろうことか、脊髄や肋骨を無視したかのような動きで体を三日月のように曲げ、槍を躲したのだ。そしてそれだけに留まらない。彼は液体のように体を変質させ、突き出された槍の上をグルグルと這って槍の刃の付け根まで移動し、レティシアの眼前に躍り出る。そこに現れたナイアの姿は——レティシアだった。

それは正に鏡写し。二つ、鏡と違うところを挙げるとすれば、左右反対でないところとナイアの変身であるレティシアが、本物にはない嘲笑を浮かべているところだろう。

「……さて、ここからが本題だ。『同族殺しの魔王』。お前、売られかかっているだろう?」

ナイアから出てきたその言葉に、少しビクリとするレティシア。小耳に挟んだ話を試しに言ってみただけなのだが、凶星だということはその反応で察せた。

「二つ提案だ。俺がそのコミュニケーションを潰してやる」  
「ッ……………」

レティシアは息を飲む。もし本当にナイアがペルセウスを潰してくれるというのなら、彼女はノーネームに帰れる。それは夢にまで見た理想だった。

ナイアは右手を差し出し問う。

「もしもお前が仲間と共に笑い合う未来を望むというのなら、この手を取れ。それで契約は完了だ。でももし救いを求めないというのなら、その槍で刺すなり何なりすればいいさ。さあどうする?魔王としての誇りを全てかなぐり捨てて俺にすぎり、ただのレティシアIIドラクレア」に戻るか?それとも全ての尊厳を捨てて所有物に成り下がるか?」

「そんなもの……」

屈辱だ。こんなやつに縋るなんて嫌だった。でも、ノーネームの皆との笑顔をもう一度見れるというのなら――

「――頼む。私を助けてくれ」

返ってきた返事は嘲笑だった。

「――いいね。かつて同族なかまを陥れた男に頼って同土なかまの元に帰るか。

中々俺好みのヒロインじゃないか」

そしてナイアは両手を広げ、大きく声を張り上げる。

「ならばその目に焼き付けろ！その心に刻め！このニヤルラトホテプの蹂躪を！ニヤルラトホテプの行う外道を！狂気にまみれたこの姿を！さあ――魔王の凱旋だ！」

嘲笑って、堂々と。

## 第十五話 「その獣の指先は」

「ちよつと、どういうことなのよこれは！」

東区角のある日。箱庭の太陽がそろそろ頭上に差し掛かろうという時、〃ノーネーム〃のメンバーの一人久遠飛鳥は、森と化したコミュニティ〃フォレス・ガロ〃の居住区画の前で、さも不機嫌そうに一枚の契約書類を他のメンバー——十六夜等——に見せつけるように突きだし声を荒らげていた。

そこに書かれていた内容は、

『ギフトゲーム名〃At the closed door the key to blood〃

・プレイヤー一覧 逆廻十六夜

久遠飛鳥

春日部耀

ジン＝ラッセル

・クリア条件 無垢なる心の鍵を用いて、装飾を剥がれた扉を開け。  
・クリア方法 フィールドの何処かにいる〃案内人〃を見つけ、〃扉〃と〃鍵〃に辿り着け。

・敗北条件 プレイヤー側が上記の条件を満たせなくなった場合。

プレイヤー側全員の死亡。

プレイヤー側の降参。

・ルール 〃扉〃は、〃鍵〃以外のあらゆるギフトによる全ての影響を受けない。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、〃ノーネーム〃はギフトゲームに参加します。

〃フォレス・ガロ〃印』

全ての文面に目を通し、黒ウサギ、耀、ジン、十六夜の四人は三者三様ならぬ四者四様の反応をそれぞれ見せていた。

黒ウサギはまさしく「やられた」と言いたげに顔を歪め、耀は「わけがわからない」という風に首を傾げ、ジンは「扉と鍵……」とずっとブツブツと呟いている。そしてその誰よりもその反応がわかりや



飛鳥も同意見だったのだが、今この場で一番不服に思っているのが十六夜だというのは一目瞭然だったので、ここは彼に発言の権利を譲ろうと一歩下がった。

抗議の目で見つめる十六夜に、ほんの少し黒ウサギはビクリとする。しかし自分は審判。ここでは一切の私情を捨て、冷静に現場を見通すのが役目だと理解していた。だからこそ、怖くても怖じ気づいてはいけない。

「契約書類に書かれている以上はそれに逆らうことは出来ません。たとえ十六夜さんであっても、こうしてギフトゲームの形を取って存在するゲームにエントリーされているのでしたら、従ってもらうのが当然の運びです」

「でもよ——」

「では貴方は、魔王のゲームでも同じことが言えるんですか?」

何時になく饒舌な黒ウサギの言葉に、十六夜の口から続く論は出ない。そう、いくら不服でも契約として成されたのであれば、その身は逃れられぬ束縛に捕らわれる。『主催者権限』の用いられたゲームではないにしても、飛鳥が「やる」と言って敵が用意した、両者合意の上のもの。拒否権は、無い。

「……チツ、わかったよ。やればいいんだろやれば。乗り気にはなれねえけどな」

「ありがとうございます、十六夜さん。この埋め合わせはいつか必ず」  
「そうか。なら今度白夜叉に頼んでエロエロな衣装を一緒に着せ替えさせてもら」

「そ・れ・以・外・で・お願いします!」

「ヤハハ、冗談だ」

「十六夜さんが言うのと冗談に聞こえないのですが……」

トホホと肩を落としながらも、黒ウサギの表情に不安は無い。なんにしても、十六夜が少しでもやる気になってくれればそれでいいのだ。

「ゴホン、それで?準備はいいかしら、十六夜君?」

「ああ、たった今完了したぜお嬢様。褒美は黒ウサギの一日デート券

で手打ちだ」

「そう、それならよかったわ」

「よくないデスヨ?!」

先程までの険悪な雰囲気は何処へやら。そこにいる集団は皆和やかに微笑み、明るいムードに包まれていた。

そして、

「じゃあ行ってくるわ黒ウサギ。祝杯の準備、忘れないでね?」

「はい!それでは皆さん、行ってらっしゃいませ!」

飛鳥、十六夜、耀、ジンの四人は喜色満面の笑みを浮かべた黒ウサギに見送られ、森の中へ足を踏み入れた。それと同時に門が不快な音を立てて重く閉まり、外と中を隔てた。——ここに、ゲーム“Ablood”は始まりを告げた。



「しかし、どうするんですか皆さん。あのルールを見る限り、かなり難儀なゲームですよこれは」

ノーネーム一行が進む中、ジンは不安そうにそう言った。十六夜は足を止め、ジンに首だけを向けて返す。

「まあ御チビがそう言うのも無理は無いな。なんせこのゲームは圧倒的にヒントが不足してる上に、こっちのハンデがでかすぎる。 ”鍵” っていうのが何なのかも分からないし、それに俺らのギフトが通用しないんだ」

「でもそれじゃ、クリア不可能なんじゃない?」

十六夜の言葉に飛鳥がすかさずそう言う。が、十六夜は昨日黒ウサギから箱庭のシステムを聞いていたときの彼女の説明を思い出す。

「いや、それはない。黒ウサギに聞いたんだが、そもそもクリアが可能なゲームは成立し得ないらしいんだ。だから、どんなに不条理でも何処かに攻略の道筋はある」

「そう、なら大丈夫ね」



——しかし解せない。

クリア不可能なゲームは成立しない。それはつまりどのゲームも必ずクリア出来る方法を主催者側が用意せねばならないということ。然るべき手札を揃えれば、絶対にクリア出来るはずなのだ。——  
だったら、ニヤルラトホテプのゲームにもクリア方法は存在するはずだ。

“X”——十六夜と黒ウサギが巻き込まれた、ニヤルラトホテプからの挑戦状。無貌の神の貌を見ろという正真正銘の無理難題。だが、もしそれにもちゃんとした突破口があるのなら——。

(諦める必要……無かったのかもな)

嘗めさせられた辛酸、吞まされた煮え湯。味わった屈辱はとても苦くて、あの光景を思い出す度吐きそうになる。でも、あの選択が結果的に自分と黒ウサギを救ったのだと言い聞かせ、思考を目の前のゲームに戻す。

「まずは『案内人』ってのを見つけなきゃいけないな。そいつがこのゲームクリアの鍵を握っていることは確かはずだ」

そう他の三人に告げ、十六夜は一步踏み出す。近くの蔦が、不自然に脈動した。



「ハッ…ハッ…ハッ…！」

薄暗い森の中、一人の少女が走っていた。その顔を恐怖に歪め、裸足のその白い足を枝や雑草で小さな切り傷をつけながら、ひたすらに逃げようとしていた。そして、その後ろから熱い吐息と不快な唾液を滴らせて追ってくる獣。木葉を散らし、ただ目の前の少女を引き裂かんと迫る。

「あつ……！」

地面から隆起する木の根に躓き、少女は土にその五体を打ち付ける。状況を理解し振り向いた時にはもう遅く、獣はその巨体で少女の四肢を押さえつけた。

「うぐツ……ああ……！」

体に重い物がのし掛かる鈍い痛み。幸いなことに骨は折れていなかったが、血液の流れが止まったのか指の先から温もりと感覚が抜けていく。少しずつつ身を侵食していく空虚さに怯えながらも上を向けば、そこには異臭を放つ唾液を少女に垂らして牙を剥く禍々しい獣が、今にも少女の白い首筋に牙を突き立てんとしていたところだった。

「やめっ……」

その悲痛な求めは届かない。獣は口を大きく開き、少女へとその牙を――

「――なにしてんだこの野郎オオ!!」

突き立てることは叶わず、突如横から到来した地を揺るがすほどの衝撃によつて、三本ほどの木々を薙ぎ倒しながら真つ直ぐ吹き飛んだ。

少女は解放された体に血液が廻るのを感じ、その下手人だと思われる人物を見る。もうもうと煙る土埃の中から現れたのは、金髪が印象的な少年――逆廻十六夜だった。

十六夜は、薙ぎ倒された木々の向こう――獣がいる方向をじつと見つめる。その奥から、バキバキとまるで倒れた木の枝を払っているような音が聞こえ、彼は不機嫌そうに舌を鳴らした。

「クソガツ……やっぱりギフトは効かねえみてえだな。ピンピンしてやがるぜ」

その声に応えるかのように煙の中から姿を現した獣。その姿を目にしたとき、十六夜の表情は一変した。

「……おいおい、笑えねえぞ、これ」

初めに殴ったとき、十六夜には獣の全身が見えていなかった。木々で視界が遮られていたし、何より森は薄暗かったから。唯一見えていたのは少女を押しえつけていた指先だけ。だが、その時から違和感があったのだ。

――その獣の指先は、まるで皮膚を剥がれたかのように赤かった。



しょう」

「そう……どうにかしてあげたいのだけど」

飛鳥が気になっていたのはこれだった。ケイと名乗る少女の見た目は大体ジンと同じかそれより下程度。少なくとも、今意思を持ち物を見聞きしているような幼子を易々とこの世から“消滅”させて平気でいられるような心を持つてはいなかった。

「……一つ、方法が無いこともないです」

ジンが考え込んだ後、そう言う。飛鳥の目に希望の光が差した。

「それ、本当？」

「はい。ケイさんを飛鳥さんの隷属という扱いにすれば、ゲーム終了後も存在し続けるのは可能です」

「れ、隷属？それはちよつと野蛮じゃないかしら……」

隷属という言葉の響きに一瞬たじろぐ飛鳥。しかし、ジンは軽く苦笑して彼女の言葉を否定する。

「隷属と言っても思ってるのとは違うと思いますよ。言うなれば、ただの主従関係です。それに、主従とは言いますが別に命令するわけじゃないならいつもと変わらない生活ができますから安心してください」

「そう。それじゃあ……」

飛鳥は話を聞いていたであろうケイの方を向き、その目を真っ直ぐ見つめる。ケイも、今の話に思うところがあつたのかその瞳を空に彷徨わせることはない。

「貴女はどうしたい？ケイ」

飛鳥が問う。

「私は……」

ケイは一瞬口ごもる。が、少しの間考えを巡らせ、答えを出す。

「……生きたい……です」

それは、付属品の精一杯の思い。ゲームのための存在が望む、存在への願望。

飛鳥はそれを聞き届け、やがて満面の笑みで彼女の言葉を迎えた。

「それが聞きたかったわ」

飛鳥とケイの間に、目に見えない淡い繋がりが生まれる。それこそが隷属の証明。死なない限り消えることのない、繋がりが。

これでケイはゲーム終了後も消えることはなくなり、晴れて飛鳥たちの仲間となった。

「さあ行きましょう皆！こんなゲームさつさと終わらせて、新たな仲間を迎え会しなくちゃね！」

飛鳥は声高らかにそう宣言し、大きく一步を踏み出す。『鍵』を手に入れ、勝利を手にするために。

——ケイの左胸に白銀の十字が輝いたのを見た者は、ここには誰もいなかった。

## 第十六話 「そりやあもう死にたいくらいに」

私、春日部耀は動物の言葉がわかる。

猫、イルカ、鳥—— 外の世界で会った動物とは全ての言葉が理解できたし、話すこともできた。そして箱庭に来てから、黒ウサギ曰く幻獣とも話せるかもしれないと言われた。

それを知ったときは、友達が増えると喜んだ。もつと色んな動物や幻獣と話して、分かりあつて、友達になつて、コミュニティのために力をつけようと考えた。

それはきつと悪いことではない。むしろ良いこと、誰かに話せば誉められて然るべきことだということとは自明の理。私自身この異能を誇りに思っているし、この異能があつてよかつたと胸を張つて言える。

でも、やつぱり箱庭は甘くなかつた。私が抱いていたような幻想なんて簡単に砕け散ると理解した。

そして、私は恐らく人生で唯一このギフトを持っていたことを後悔した。だって—— あんな化け物 ガルドの叫びすらも理解できてしまったのだから。



「うあつ……ぐう……ッ！」

頭が痛い。ガンガンと鳴り響く頭痛が、耳を塞げと警告をしている。

原因は明白だった。獣の咆哮、皮膚無き化け物と化したガルドから放たれた声が、耀の鼓膜を揺らし、ギフトの発動を促した。

“動物との会話”

そう言えば聞こえはいいだろう。しかし、彼女のギフトは会話などという生ぬるいものではとても済まされない。

人間以外の種族の言葉の強制理解。言うなれば、彼女のギフトの一つはそれで簡単に説明がつく。それはつまり、理解したくなくても勝



「春日部さん?!大丈夫なの、春日部さん?!」

森の奥から咆哮が聞こえた後、突然耀が耳を押さえて苦しみ始めたことで、飛鳥は心配をし駆け寄る。一体何が彼女をこうさせているのかはわからないが、それが耀にしか理解しえない人知を超えた何かだということだけは明白だった。

と、そんな飛鳥の心配を他所に、耀は暫くの後すつくと立ち上がり、表情を固くして飛鳥に顔を向ける。

「……うん、大丈夫。心配しなくていいから、ね?」

「そ、そう?それならいいのだけど……」

耀はそう言うが、飛鳥の心配はむしろ別のところへ向いた。

明らかに、耀の表情が違いすぎる。その顔はまだ十四幾ばくかの少女がする表情ではない。それはまるで、人の本当の苦しみを見てきたかのような――。

何にせよ、今の彼女には一人で何処かへ言ってしまうような危うさがある。放っておいたら独断専行して、大きな危険の中に身を曝してしまうような、そんな危うさが。

「大丈夫だよ飛鳥。心配はいらない。私が全部終わらせるから」

――ああ、やっぱりだ。

飛鳥は悟る。きつと彼女はこの一瞬の間に、飛鳥には到底解せないであろう心境の変化があったのだらうと。

止めるべきであらうか。こんなゲームのためにそんな顔をするべきではないと、友達として言っただけでやるべきであらうか。

本当は言っただけでいい。思いの丈をありのまま、耀に伝えてやりた。でも、それは出来ない。何故なら飛鳥は、耀の心が理解できてないから。無責任に、ただ自分の気持ちをぶつけるだけのことなど出来るはずもない。

「……………そう……」

彼女に出来たのは、死地に赴くような覚悟をした友人に向けたその一言を、そつと絞り出すことだけだった。





「首尾は上々、と言ったところか。十六夜は無事『鍵』を発見した。あとはいつそれに気付くかだが……なあレティシア、ドラクレア、お前は思う？」

脈打つ森の、その一角。木々の上で佇むのは二つの人影。すなわち、ナイアとレティシアの二人である。

ナイアは隣で苦い顔をしてゲームを見守るレティシアに目を向ける。その口には彼女の反応を楽しむかのように奇怪な笑みを浮かべ、その口内が赤く三日月を形作るように見えるほどだ。

「……どうもこうもあるか。貴様、よくここまで上げつないゲームを考え付けるな。とても正気とは思えん」

「前に白夜王にも言ったけどさ、どうしてお前らはニヤルラトホテプを正気と狂気の尺度で測ろうとするんだ？……まあそれはいいや。それよりもほら、見てみるよ。ノーネーム期待のルーキーの一人、春日部耀の顔付きを」

「……悲しそうだな。悲哀と、それと決意だ」

「そうだな。きつと彼女は感じたんだろうよ。ガルドの心の内をな」  
ケラケラと首を傾けて木の影にいる耀に視線を動かし、次に息を荒くしてのっそりと歩くガルドを見る。

「しかし、お前も酷な事をする。鬼種と引き換えに理性を奪うとは、そんなもの意味が無いじゃないか」

「……あれでよかったのだ。心ある『ガルド』を殺すのは、ルーキーには耐えられないだろうからな」

「ああ、そういうこと。じゃあ悪いことしちゃったかもな」

笑いながら、ナイアは目を細める。悪いこと？とレティシアは一瞬訝しげにナイアを見るが、すぐにその意図を察し顔を険しくする。

「……お前、まさか……」

「ニヤルラトホテプ俺を混ぜるとき、どういうわけか理性が戻っちゃつてね。もつともそれは狂気に染まりきったものだから、そこからはもう生き地獄だ。なんせ身体中の皮膚全部剥かれて、その中で俺の断片が暴れまわってんだからな。そりゃあもう死にたいくらい痛いだろ

うよ」

しかし、本来ならそれはありえない。何故なら、このゲームではガルドは「鍵」以外のギフトの影響を受けないはずだからだ。だから、ガルドに傷一つ付けるなんて普通なら出来っこない。だが、ナイアはそのルールの隙間を掻い潜った。そもそも、今回のギフトゲーム自体ナイアが仕組んだものだ。そのくらい雑作もなかった。

つまり、ガルドは傷は付かないと言ったが痛みを感じないとは何処にも明記されていない。

「……下種が」

「誉め言葉として受け取っておこう」

レテイシアから滲み出る嫌悪感をナイアは感じ取り、満更でもなさそうに顔を嘲笑に歪める。その余りの異常さにこれ以上隣にいたくないと思つたレテイシアだったが、それを知つてか知らずかナイアは、

「さて、それじゃ俺は失礼するでしょう。やることもまだあるのでね」

「そうか、それはそれは僥倖だな。こちらとしては願つたり叶つたりだ」

「ハハッ、口の聞き方には気を付けろよ同族殺しの魔王。これからやるのは仕込みだ。今日の夜には完成する。楽しみに待つておけ」

それだけ言い残し、ナイアはその体を一瞬にして霧散させる。レテイシアは漸く隣の気持ち悪いものがいなくなった安堵からそつと息を吐き、空を見上げる。

——どうかこの試練を打ち砕いてくれノーネーム。私が、安心できるように。

その身勝手な願いを胸に秘め、燦々と輝く太陽の光に、レテイシアはその身を浸した。



『GURU……AAAAA………AAA……!!!』



もう、ガルドを過去に縛る鎖思い出は何もない。自分が自分である最後の証明を失ったガルドは、再び痛みの中で苦しみ悶える時に戻される。

——いつかまた、あいつらに会える日が来るのなら……

——？

——あいつらって、誰だっけ？



春日部耀は走る。ただ哀しき獣を亡き者とするため、その一心で走る。

飛鳥はいない。置いてきた。彼女では、自分のスピードに着いてこないから。

そうして、どれくらい走っただろう。いつしか耀は、広さ10メートル程の円形の広場に出ていた。その中心には平石があって、そこには絵が刻まれている。

「……なんだろう、これ」

そこにあつたのは、虎のような獣の胸に何かを突き刺している人間の絵。獣と人間の手に隠れてよく見えないが、そこには確かに柄のよくな何かが握られていて、普通に考えればそれは少し大きめの鍵のようにも見えた。

耀は平石に近づき、そつと指先を触れさせてその絵を軽くなぞる。その途端、表面に幾何学的な蒼白い光が走り平石が分解される。その様相とはまるで合わない機械的な風景に呆けていた間に完全に平石は無くなり、その下にあつたであろう窪みが露出していた。

そこにあつたのは、一つの鍵だった。

耀の手には少々大きすぎる気もするそれは金に塗られ、余計な装飾の類いが一切無く、先端が刃のように尖っている剣のような鍵だった。

「これが……鍵、なのかな」

平石に描かれたあの絵が正しいならば、虎のような獣は恐らくガルドのこと。与えられたヒントを簡単に解釈するならば、ガルドをこの

鍵で突き刺せということだ。

ということとは、それすなわち扉とはガルド自身を意味していたということになる。つまり、このゲームの本質とは指定武器でのガルドの討伐だったのだ。

これでこのゲームを終わらせられる。そう確信した耀はフツと微笑んで、再び走り始める。その後ろで、分解された平石が一人でに組上がっていった。

——そして、その平石に刻まれた絵の人間が、踊らされたプレイヤーを笑うかのように、その口を嘲笑に歪めていたことに、当の彼女は気づきもしなかった。

## 第十七話 「ワカラナイ」

「いた……い」

枝葉を掻き分け、木の根を飛び越え、草を踏みながら疾駆する耀。走る中で感じた異常な程の血の匂いに顔をしかめながら、その手に持った鍵剣を強く握りしめる。

その匂いのする方向に足を向ければ、更に強くなる気配。死と退廃の獣が放つ、世界の腐臭。

やがて目にするその姿はとてもマトモとは形容できない。悲哀、醜悪、そんな言葉を連ねてもきつと言い表せる者はいない。狂気の一端に片足を踏み入れた獣、それが今のガルドなのだ。

そう、狂気的一端。それも片足を踏み入れただけ。遙か昔白夜叉が経験した邪神の狂気とは恐らく比べ物にならないくらいには、目の前のそれは矮小で貧弱だろう。でも、それでも。

——今のガルドは確実に強かった。

獣が耀に気づき、咆哮を上げる。しかし彼女は怯まない。怯んで堪るものかと気圧されそうになる弱気な自分を殺して、虚勢と意地だけで塗り固めたペルソナを顔とした。

地を踏み、空気の抵抗を最小限に。走り方はチーターに、抵抗を減らすのはマグロに教わった。

加速を続ける耀に獣の爪が無情にも迫る。しかし耀は勢いを殺すことなく上に飛び上がり、グリフオンの風を操る異能を駆使して空中で旋回、擬似的に追い風を起こして更なる加速を得た。

獣は突如視界から消えた獲物に動揺を隠せない。あちこちキョロキョロと見回し、疑問に首を傾げる。

上からの強襲。数多の生物にとって、視界の範囲に入らない空中とは絶対の死角。重力の助けも得られ、位置的有利を取るといふ、戦いの中においての鉄則を最も簡単に達成出来る場所。自ら身動きの出れない所に身を投じるといふことを考えればハイリスクハイリターンとも言えるが、それは耀のスピードを以て強制的に相手の視界から外れることでカバーできる。

獲った。勝利の確信が耀の脳裏を掠める。無傷の勝利、それを持ち帰って宴を開こう。何が食べたい、何が飲みたい、食欲の権化たる耀はそんな想像に胸を膨らませた。

あと少して刃が届く。あと少して勝てる。思わず彼女の顔に笑みがこぼれようとしていた、そのとき。

——獣の額に瞳が開いた。

死角のはずの自分直上を見れる第三の目。その目が耀を捉えた瞬間、彼女の体に衝撃が走る。

「なッ………がア………!!!」

幾つもの木を薙ぎ倒し直進する耀の体は、“フォレス・ガロ”本拠地の壁にぶつかり、円状に亀裂を走らせてようやく停止する。

訳がわからなかった。本当に、理解が出来ない超常現象。

ギフト？いや、そんな生易しいものじゃない。あれは才能なんていう幸せなものなんかではない。

それは遥かに言葉を遡った先、古代ゲルマンで“不吉な贈り物”を意味した言葉、“ギフト”。受け取っても良いことなど何もない、相手を害することしか考えていない贈り物。そんなものがまさしくよく似合う。

ギョロギョロと血走ったように不自然な脈動を続けるその目と耀の視線が交錯する。その数瞬後、ガルドは大きな土煙を巻き上げながら猛スピードで突撃した。それを確認するや否や大急ぎで耀はめり込んだ体を壁から引き抜き回避の体勢に入る。——が、間に合わない。

嫌な音を立て、スピードに着いてこれなかった左腕がガルドの脚で潰される。骨が碎ける感触と激しい痛みが伝わった。

「くっ………」

生ぬるい液体がぬるりと肌を撫でる。それを受けて苦悶の表情に顔を歪ませる彼女はなんとも背徳的な輝きを放っていて、見る人全ての心を捕らえてしまいうようなほどに甘美で淫靡な光景だった。

がしかし、そこは相手も獣。敵が雄であろうが雌であろうが本能と狂気に任せた蹂躪には、己の情欲など介入する余地も無い。

更に強く耀の腕を壁へと押し付ける獣。そこへ、必然と言うべきか余りの圧に壁が耐えきれず大きな風穴を覗かせた。

勢いそのまま建物に突っ込む獣。これを好機と見なし耀は一瞬にして離脱、碎かれた左腕に力がこもらないながらも、感じる熱によって神経が壊れていないことを確認した。

ともかくにも、まずは情報の整理が先決と考え森の木陰に身を隠す。雄叫びを上げてまたもや壁をぶち破り飛び出してきた獣に見つからぬよう息を整えた。

「はあ……はあ……なんなの……あれ……？」

思わず漏れた小さな呟き。無理もない。いくらその雄叫びから獣の内に駆け巡る狂気を垣間見たとはいえ、昨日まで人として言い争いをした相手がまさか本物の化け物になっているとは思ってもいなかった。それも、明らかに現実離れた凄惨な姿で、だ。齢十四の少女には強すぎる残虐性。今も耀の中では逃げたいという弱気が顔を出しかけているが、それを押さえ込むのも難しい状況だ。

(……落ち着こう。こういうときこそ……)

そんな不安を吐き出すかのように息を吐く。頭を一度クールダウンして、一から考え直す。

判明していることは三つ。

一、アレはもう話を通じる相手じゃない。

思考という思考全てを完全に苦痛に狂わせてしまった獣だ。言葉を理解する脳がまだ蝕まれていないとは限らないし、むしろその可能性の方が低い。万一理解できたとしても、それを本能を押さえ込んだ上できちんと行動として反映できるかどうかの問題だ。

二、膂力が違いすぎる。

これは一目瞭然といえる。事実、あの獣の一撃でこれほどの傷を負うのだ。正面に立とうなどとはとても思えないほどの単純な力の差。

三、上記を踏まえて普通に戦って勝てる保証が無い。

左腕を潰され、死角を無くされ、友達から貰った能力を使っても届かない手に持つ刃を見れば、そんなこと態々考えるまでもない。だとすれば、耀が取るべき策は自然と絞られてくる。



撤退という選択肢が、恐らく今一番適した最適解だ。しかし、そんなことは耀のプライドが許してくれない。よって無意識のうちにそれは選択肢から外れていた。

右手を握り締める。鍵剣の金色が、耀を鼓舞するかの如く輝いた。策は——既に思い付いていた。



獣は吼える。かつての本拠の壁をぶち抜き、蔦と草に侵されて変わり果てた内装を苛立ちの俣に荒らした後、外に向かって雄叫びとも狂乱ともつかぬ咆哮をあげる。

左腕を潰した少女が視界から消えた。力を入れすぎて脆い壁を崩したのが誤りだったか、と獣は狂った頭で考える。しかしその思考は数瞬の後に黒い忘却へと追いやられた。

今あるのは殺意という装飾で着飾った狂気。意識と理性はあるが正気ではないという、拷問にも近い苦しみ。獣はその苦痛の全てを八つ当たりにも似た形で春日部耀という少女にぶつけようとしていた。だが、その少女は獣自身の失態により見逃してしまった。

募る苛立ち、昂る本能。殺意の俣に矮小な人間を蹂躪したいという獣の狂気は行き場を無くし、ただそこに在るだけの欲望の皮を被った木偶同然だった。

と、そこへ——

ガサリ：

草が揺れる小さな音。目を向けた先に残る、ヒトの気配。

昂った。荒ぶった。それを確認した瞬間、獣は空気すらも置き去りにするかのような速さで気配のある場所に爪を立て突っ込んだ。無惨にも切り裂かれる木に、舞う葉。絡んでいた蔦も千切れ、長い尾を引き蛇のように宙を舞った。——それだけだった。

確かに獣の凶爪は少女の気配のあった場所を的確に切り裂いた。肉が裂け、血が飛び散るのを幻視してしまうくらいに生々しすぎる少女の気配がそこには残っていたはずだった。しかし、そこには何も無

かった。

浮かぶ疑問。それを遮るかの如く、また現れる気配。今度は真後ろ

『GEEEEEEYAAAAA  
AAA!!』

咆哮と共に体を180。反転。再び爪で気配を切り裂く。何もな  
い。

また現れる。今度は右——いや、左？

後ろ、右前、左前、右後ろ、正面——。

あらゆる場所に現れる気配。混乱し、渦巻き廻る獣の思考は、頭  
を使い理性で考えるほど更にグルグルと理解不能の迷路へと迷い込  
む。

それはまるで分身。いくつもいくつも、獣を取り囲むようにして増  
える少女の残り香は、獣の鼻を擦り闘争本能を昂らせる。

そして、獣は狂気の誘惑に勝てなかった。

『GEEEEEEYAAAAA  
AAA!!』

疾駆。気配のある木の奥目掛けてその巨体を捻り込む。木が巻き  
上げられるが何もない。次の気配にも同じく蹂躞の爪を突き立てる。  
何もない。次、次、次、次、次、次、次、次。

全ての気配目掛けて本能の俣に暴力をぶつける。辺りにはいくつ  
もの木と長い蔦が転がる。ただ、それだけ。それ以外に何もない。

——わからない、わからない、わからないワカラないワカラナ  
イワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイワカラナイ！

駆け巡る思考は闇に囚われ、残ったものは混乱だけ。

更に昂る蹂躞の欲求。血を求めただの暴獣。望む通りの展開に  
ならないことに不満を抱えた、我が儘な子供のような獣。それが、そ  
こにいる獣の総評だった。

苛立つ獣は地面に爪の跡を残し、牙を強く噛み締める。垂れた唾液  
が爪の跡に染み込んだ。

と、そこに吹く風。

初めは弱いそよ風だった。それが勢いを増し、荒ぶり、やがて転がっていた木と蔦の全てを巻き上げる程の強烈な暴風となった。

風向きは——上を向いていた。

獣はそれに倣い空を見上げる。そこにいたのは——

「これでチェックだよ、<sup>ガルド</sup>獣」

探していた少女——春日部耀だった。



耀は、半ば抜け道とも言えるような方法で獣を攪乱することを思い付いていた。

使うのは、別にそれほど強い生物の力ではない。むしろ慣れ親しみ、普段から口に行っているような生物だ。それは——烏賊。

別に水を噴射して高速移動しようというわけではない。墨を吐き出すわけでもない。耀は墨を吐くという行動の極致へと注目した。

勘違いされがちだが、実は蛸と烏賊では「墨」というものの成す役割が違う。

蛸の吐く墨は、有り体に言えば煙幕。広がり、敵の目を塞ぐことに特化したもの。逆に、烏賊の吐く墨は広がらない。そこに留まり、形を成すことで自分の分身を作り出すことが主な目的なのだ。

それは自分がそこにいたこと、いることを欺き続ける案山子。耀はそれこそが烏賊の「墨を吐く」ことの極致だと見定めた。

簡単に言えば、耀は烏賊が墨を吐くように自分の気配を偽造した。結論として、獣は見事それに引っ掛かり、耀の狙いを完遂させた。

膂力で勝てない耀は、何とか獣に隙を作れないものかと思案した。押さえ込むのは当然無理。なら物理法則に頼ればいい。

十六夜の話では、傷は付けられなくても吹き飛ばすだとかそういうつたものは通じると聞いた。それを有効に使わぬ手はないだろう。

手札は揃った。あとは、<sup>ガルド</sup>耀のゲームメイク次第。

「これでチェックだよ、<sup>ガルド</sup>獣」

勝ちへの確信を込めて、空から彼女は呟いた。



「春日部さーん！どこなのー？」

深い森の奥、飛鳥と十六夜とジンとケイは突然走り出し行方知れずとなった耀を探していた。

ただでさえ薄暗い中で、鬱蒼と茂る草木を掻き分けながらだとその搜索は困難を極める。だからこうして声をかけながら進んでいるのだ。

「全く、何してんだ春日部の奴。勝手にいなくなって怪我とかしてねえだろうな」

鬱陶しそうにしながらも心配なのだろう、十六夜の愚痴からは少しの焦燥が滲み出ている。それは飛鳥にも感じ取れて、一刻も早く見つけなくてはという思いを強くさせた。でないと彼がいつ爆発するかわからない。

そうして探し続けた末、彼女らとはある広場に行き着いた。

広さは直径10メートル程。その中心には平石があり、他には何も無い。

「何かしら此処？ねえ十六夜く——」

飛鳥の言葉が詰まる。当然である。何故なら今、この広場の中心を見つめる彼の顔に貼り付けられた表情が余りにも「とんでもないもの」を見たかのように固まってしまっていたから。

「まさか……そんな……いや、でも……ああそうかよ、そういうことかよあのクソ野郎ッ！」

目に見えて取り乱す十六夜に驚きビクリと飛鳥は体を震わせる。彼の中では何かが自己完結したのだろうが、飛鳥には何のことかさっぱりわからない。

「十六夜君、一体どうしたの？何をそんなに……」

「どうしたもこうしたもねえ！全部仕組まれてたんだよ、ニャルラトホテプになー！」

「なッ……！」

ニヤルラトホテプ。昨日から嫌になるほど聞いた名前。それが、このゲームに絡んでいる。

「そんな……」

「俺は春日部の方に向かう！お嬢様、攻略は頼んだ！」

「え？ちよつと——」

言うが早いか、十六夜はその脚力で瞬く間に飛鳥の前から姿を消す。辺りにはその余波の大量の砂埃が舞い、一瞬彼女の視界を塞いだ。

「ケホツ、ケホツ…ケイ、ジン君、大丈夫？」

「ええ、なんとか……」

「怪我は無いですけど……」

どうやら案内人と我らが幼いリーダーは無事らしい。砂埃で若干服が汚れた以外に大した影響は無さそうだった。

しかし……

「十六夜君、何を慌てていたのかしら……？」

こびり付いたその疑問だけが、汚れよりも酷く、飛鳥の頭からずつと離れなかった。



十六夜の心には、これまで経験したことがないほどの強い焦燥があった。

——俺の予想が正しければ、このゲームには絶対裏がある。ニヤルラトホテプならきつとそうする。

別に、十六夜はニヤルラトホテプという邪神の全てを知っているわけではない。むしろ知らない、わからないことの方がずっと多い。しかし、これだけは確信を持って言える。あいつの性根の悪さなら、ゲームの性質も悪質だ。

だからこそ焦る。どのような罠が仕掛けられているかわからないこのゲーム、今最も危険なのは単独行動している春日部耀だ。

——クソツ！無事でいてくれよ春日部！

そうして木を避け、葛を避け走りたどり着いた先。かつてのフォレス・ガ口本坩前に、彼女はいた。

——左腕を潰され、右腕を皮膚なき獣に噛まれ引きずられた、血まみれの姿で。

「……………あ……………あ……………」

そんな十六夜の声に呼応するように、赤く染まった金色の鍵剣が嘲笑うように輝いた。

## 第十八話 「これは全部」

風が吹く。空間を縫うように、うねり這いずるように暴力的なまでの圧を撒き散らして風が吹く。

巻き上げられた木と蔦は規則正しく並び、風に沿って絡まる。

木に蔦が結ばれ、更にその端が他の木に結ばれる。それを繰り返すうちに、獣が見上げる空は緑と茶色のネットに覆われた。

それは目が人一人ゆうに通れるくらいの荒さを持つ網であったが、体格が遥かに人を超す獣を抑えるには充分だった。

きっと獣もそれをわかっていたのだろう。頭上一面に広がる網は全力で走ってもその範囲から逃れることは出来ない広さまで達している。だから獣は大地を蹴り、跳躍する。逃げる事が出来ないのなら、耀を殺してこの危機を脱するしかないと考えた。だから跳んだ。耀の喉元目掛けて、結ばれず空中に放置された少ない木々を使って。そして、それこそが耀の狙いでもあった。

たとえ風を操るギフトを持っていようと、下には落ちる。

どれだけ高く飛ぼうと、下には落ちる。

どれだけ広く広がっても、下には落ちる。

この世界に体が存在する限り、全てのモノは重力から逃れることは出来ない。

わざわざ逃げ場の無い空中に身を置いた獣は、その時点で落とされることが確定している。いくら木々を足場にしたところで、それは無限にあるわけではないのだ。

—— 見てみる獣。お前の足場はもう無くなったぞ！

空中にあった木片は全て獣が耀にたどり着く前に地に落ちていた。落としていた。そこにあるのはただ、剥き出しの化物ただ一つ。あとはただ、体が下に引っ張られるだけ——

そう思っていた矢先、獣の顔に何かが叩きつけられた。

それは緑色をしている。風のようなものに後押しをされ、想像以上に速いスピードで落ちてゆく。

これは一体何なのか。考えるべくもない。答えはたった一つしか

ないのだから。

それは空中で結ばれていたネットそのものだった。耀が獣の足場が無くなったその瞬間に風を操り落としたのだ。

上からのネットによる圧に風が乗り、体は簡単に動かせない。逃げようにも自然落下のスピードよりもネットが落ちるスピードの方が速い。だからそんなことは出来ない。怒りの雄叫びを上げようにも、口を開いて音を出すことすら難しい。

あらゆる抵抗の手段を封じられた獣に待っていた展開は、背中に響いた強すぎる衝撃が物語っていた。

『GIIII……!!』

苦痛とも呻き声とも取れない声がようやく喉から絞り出される。獣としては、地面に体がついたのだから体勢を立て直したいところなのだが、ネットはピンと張られていてそれが不可能となっていた。その原因は、ネットを為している蔦が結ばれた木の幹だった。

それらが地に落ちたと同時に深く杭のように土に食い込んでいる。これがネットを固定し、獣の動きを封じていたのだ。

焦りが募る。全力で暴れば長くても十秒程度でこの拘束から抜け出せるだろう。問題は、その十秒をどうやって凌ぐかだ。しかし狂った獣の頭はそんな生産的な考えなど浮かばない。ただ体を縛るこの網が鬱陶しくて。だから、壊すために暴れるのだ。

そんな時、獣が見たもの。それは曇った空に浮かぶ、明るい少女――  
耀。そして、その右手からこちらに向けられた、黄金の鍵剣だった。



今、耀は絶対的有利に立っている。

何故なら位置的な有利を取り、その上敵の動きを封じることが出来たからだ。さらに、手には武器を持っている。生憎と左腕が使えないが、これ以上に相手を「殺す」ことに有利な状況はこれから先望めないだろう。



しかし、耀の心に油断は無い。ネットに使っている鳶はジンによると鬼種のギフトが宿っているらしい。強度は既に把握してはいるが、所詮植物は植物、大きな獣をずつと押さえられるだけの頑丈さはない。持っても精々十秒がいいところだ。だから、その前に決着を着ける。

右手に握る鍵剣を獣に向け、体に纏う風を消す。ユラリと緩やかに下降を始めた耀の体は段々と加速していき、地面に近づいていく。目指すは赤、皮膚のない深紅しんくの獣、その胸元。研ぎ澄まされていく意識の中で、高鳴る心臓の鼓動を聞く。

頭を下にすることで感じる空気の抵抗も、友達から教わった方法で限りなく0にする。

鍵剣の切っ先が獣へと吸い込まれるように加速する。そして、その時は来た。

ネットの網目から見える獣の胸元に、その刃は触れる。落下の勢いを乗せたその一撃はいとも容易くその赤い筋肉を断ち、貫いた。

——かに思われた。

「…………え」

しかし、耀に突きつけられた結果は余りにも信じられないものだった。

何故なら、その刃は獣の筋肉を1ミリも割くことが出来なかったから。



偽物の鍵のギフトで傷一つ付かない獣こそが、扉自身。一番の障害と目標を一緒にすることでゲームの難易度を格段に引き上げている。

「お前は……」

なんて、哀れ——

その言葉を発するより先に、苛ついたような獣が腕を振るつた。土煙と木々を巻き上げ、自ら視界を塞いでしまう。十六夜はこれを好機と見て、全力で逃走を開始する。

——あの獣は、救われる道など残されていないのか。

逃走途中にそんなことを考える。十六夜が気づいたこと。それは、<sup>ガルド</sup>獣に待つ絶対的な死の運命。

扉を開くというクリア条件。そして開かれる扉はガルド自身。

神に弄ばれるだけ弄ばれ、最後は人間に殺される、まさに悲劇の悪役。

これを哀れと呼ばずしてなんと呼ぶ。

——まさか、こんな日が来るなんて。

敵への憎悪より先に敵への憐憫が浮かぶとは、つくづく箱庭には驚かされる。

しかし、これではつきりしたことが一つ。

——無理だな。俺には、あいつは殺せない。

哀れみの刃でどうして敵を殺せるだろうか。憐れみの刃がどうして敵に届くだろうか。

その感情を自覚してしまつたらもうあの獣に十六夜は手を出せない。

何故なら彼には、その感情を塗り潰すほどの決意なんて、まだ無いのだから。



「なにかしらね、これ？」

飛鳥は広場の中心にある平石の前にいた。その平面に描かれた模様を見て頭を唸らせている。

「ジン君わかる？」

「いえ……」

「そう……」

うーむと二人して腕組みをする。しかし、考えれど考えれど何も浮かんでこない。当然だ。そもそもそんなこと、二人とも知らないのだから。

飛鳥はせめて何か見つからないかと平石をじっと見つめる。描かれているのは巨獣を人間が剣のようなもので貫いている絵なのだが、飛鳥は剣なんて持っていないし、そんな物はこれまで見たこともない。ますますわからなくなつたとばかりに唸つていれば、彼女はあることに気づく。

埃だ。

平石の表面に薄く積もっている埃が、不自然なところで途切れている。まるでパズルのピースをバラバラに組み直したみたいに。

ツウ……と白魚のような指が埃の筋をなぞる。すると、そこを起点に蒼白い光が平石に細く道を辿るかのように広がり、平石自体が複雑に分解される。飛鳥には理解できない動きが展開され、あわあわと慌てる飛鳥をよそにそれは再び組み直される。

「え、ええと……」

「飛鳥さん、それは……」

「わからないわよ……」

そこにはまた新たな絵が描かれていた。大本は先ほどと変わらず巨獣を貫いている絵なのだが、明らかに違うのが一つだけある。

増えている。

登場人物が一人増えている。

剣を持つ人間の横に、もう一つの影。胸に大穴を開けて倒れ伏す、少女の姿。そこから伸びる、石に描かれたとは思えないほど赤黒い線が手に持つ剣へと繋がっている。

そしてその少女は、どことなくケイを彷彿とさせる形をしていて――

「ああ、気付いてしまったんですね」

後ろからの声。少女のように高い声なのに、全てを悟ったかのように穏やかな声。その源は、飛鳥よりも頭一つ以上小さいケイだった。

「ケイ…貴女……！」

ふらふらと飛鳥は手を伸ばす。その手は空を彷徨い、少しずつ少女へ近づいていく。そして、その首を掴んだ。

「え……？」

勝手に動く腕。まるで自分のじゃないみたいなのにそれは力を強めていく。

コントロールが利かない。飛鳥は今すぐこの手を放してケイに謝ってあげたいのに、自分ではピクリとも動かさなくて、焦る。

恐怖に染まる顔。それは飛鳥自身であり、決してケイの顔に浮かんだ物ではない。むしろ幼い少女は優しく微笑んで、これから起こる全てを受け入れるかのようにしていた。

「そんなに怯えないでください、飛鳥様。これは全部運命なのですから」

首を絞めている飛鳥の手に自分の手を添え、ケイはそつと語る。

「さつき飛鳥様が言った通り、私はゲームの付属品です。案内人の役割を与えられ、自我を持っただけのただの人形なのです」

自虐とも取れる言葉を口にして、少女は目を伏せる。

「でも、だからこそ飛鳥様が私を助けようとしてくれたとき、私はとても嬉しかったですよ」

その声に、涙が混じる。それと同時に手に込められる力は一層強くなり、首の肌食い込み始める。

「飛鳥様……」

飛鳥の頬に雫が垂れる。歯を食い縛り、嗚咽を堪えようとするもそれは叶わない。

救うと決めたのに。

これが、運命だということか。

そして、ケイは涙を溜めた目で悲しい笑みを作る。

「ありがとうございます……ごさいました」

パキリ……

小枝を折るよりも容易く。余りにも軽く。少女の首は力を無くした。

飛鳥の手から正体不明の力が抜ける。涙がとめどなく溢れ、視界が歪んだ。

——が、悪夢はここで終わらない。

再び手は伸びる。仰向けに倒れるケイの胸元に触れ、その服を千切る。

「いやだ……やめて……やめて……」

飛鳥の懇願は届かず、虚しく空に消える。露になった胸の肌色に爪を立て、瑞々しい肌から血が噴き出した。

肉を裂く。筋を切る。たどり着いた先は胸の最奥——心臓。

操られたマリオネットの如く、飛鳥の手はそれを掴み引きずり出す。それは生暖かく、湿っていた。

力がこもっていく。嫌なのに。こんなこと、やりたくないのに。体が言うことを聞いてくれない。

「やめっ……やめてええええええええええ!!」

握り潰された心臓は、飛鳥の赤をより紅く染めた。

ようやく、飛鳥の腕は糸が切れたようにダラリと下がる。その手には、潰された心臓の残骸の代わりに血に塗れた白銀の十字剣が握られていた。

「無垢なる心の鍵を用いて、装飾を剥がれた扉を開け」

ようやく、その意味がわかった。無垢なる心の鍵とはケイという幼い少女の心臓だったのだ。

無垢。俗世に染まっていない幼い少女という点では、まさにケイはその言葉通りだったのだ。そして、心とは心臓。つまりこのゲームは、協力者を殺すことで道が開ける残酷極まりない心の強さが問われるゲーム。

そして、そんな現実には耐えられるだけの強靭さを、飛鳥は持ち合わせていなかった。

「あ……あああああああああああああああ!!!」

赤い少女は慟哭をあげ、更なる悲劇は動き出した。

## 第十九話 「殺せ」

箱庭に来て、飛鳥は世界の色彩に圧倒された。

生まれ持った力のせいで、全てが思い通りになる外の世界とは違う。全てが鈍色の世界ではなく、色づいた世界。自分の知らないことがある、自分の思い通りにならないことがあるなんて、こんな素敵なことがあるのかと歓喜した。

空は青い。

木々は緑。

人は生きてる色をしている。

なんて、素晴らしい。

生まれて初めて自分が生きていると実感できた。

でも、足りないものが一つあった。

十六夜は未知と快樂を求めて箱庭に来た。

耀は友達を求めて箱庭に来た。

では私は？

私は何を求めてここに来た？

.....

考えるまでもないことなのだろう。

生·き·甲·斐·だ。

私·は·生·き·甲·斐·を·求·め·て·こ·こ·に·来·た·。

未知、快樂、友達。それもいいだろう。でも、それだけじゃない。私

は、自分が生きてる意味を見つけたかった。

だから手紙を開いた。全てを捨てて、捨てた物以上を物を探した

かったのだ。

でも、そんな望みはあっさりと打ち砕かれた。

ようやく手に入れた、手に入れかけた絆を自分の手で殺してしまっ

た。

それはきつと仕組まれたものだったのだろう。残酷な神の残酷な

悪戯。でも、それは私の心を折るには十分すぎた。

この傷は、きつと一生消えない。

私は、一人の命を終わらせたのだ。  
小さな小さな、触れれば折れてしまいそうな少女を、文字通りこの手で折った。

これは罪にはならない。ゲームをクリアする上で絶対に避けては通れぬ道なのだから、仕方のないことだったのだ。

だったら、私が今すべきことはなんだ？

決まっている。

私は、私のしたことに責任を取る。

それが、私なりの罪の償い方だ。

ならば立て。

心が折れても、志だけは折るな。

あの少女の笑顔が無駄にするな。

久遠飛鳥。

お前は、お前の為すべきことを為せ。



どれだけ泣いただろう。涙が涸れるという言葉が嘘だったと気づけるくらいには泣いただろうか。

渴いた息と揺れる瞳に血の色を混ぜ込んで、力なく手に持った十字剣を握る。それは金属と言うにはあまりにも熱くて、まるで人の体温のような心地が伝わってきた。

「……ねえケイ。私は、……」

言葉が続かない。弔いも、謝罪も、何も出てこない。いつもは軽々と動くこの口が、今は万力に閉ざされたように動かない。

わかっている。こんなことは無駄だったこと。終わったことを悔やんでも、何も生まれえない。久遠飛鳥の言葉には、運命を巻き戻すだけの力は宿っていないのだから。

向き合わなくてはならないのに。たとえ自分の意思じゃなくても、殺したのは私の手に代わりないのに。

逃げたいと、目を背けたいと、理性が叫んでいる。お前は悪くない



のだから、悪いのはニヤルラトホテプなんだから、だから、と。

そんなことは知っている。すべてはゲームのギミックのせいなのだ。すべては邪神の悪意のせいなのだ。それに全部押し付けて、逃げ出すことは可能だろう。でも――

「……そうね。そうよね」

ようやく口が開いたと思ったら、出てきたのは誰も答える者のいない同意の声。

――ああ、そうだ。

確かに、久遠飛鳥の心は折れている。手に入れたものを自らの手で殺すことで磨耗しきった心は、いとも容易く破壊された。

心が折れた？でも、その志はまだ折れていない。決意を固めるだけの時間は既に終えている。

立ち直ろうなんて思わない。だったら立ち直らなくてもいい。地を這いずってでも、その責を果たすのだ。

それが、それこそが――

「ありがとうございます」

あの少女に報いる、ただ一つの方法なのだ！

この剣は私を戒める十字架だ。この熱さは私を灼く罰だ。

この剣は彼女のいた証明だ。この熱さは彼女の命の名残だ。

だったら、迷うことなど何もない。

「……立て」

放たれた言葉。たった二文字の短いそれは体に無理矢理力を込めて立ち上がらせる。

これが、威光の支配以外の使い道。自分の体を本当の意味で意のままに操る人には過ぎた力。

服の端々から血が滴る。それは地面に着くと同時に血の海に波紋を生み出す。

「立って、歩け」

パシヤパシヤと血溜まりの水が跳ね、ゆつくりと動き出す飛鳥の足を濡らす。その足は、胸に穴を開けて倒れ伏す少女とは逆方向へ向か

う。

「歩け、歩け、歩け」

真つ赤な足跡を残しながら、一歩ずつ進む。その途中平石の横を通るが、飛鳥は溜まった感情をぶつけるかのように剣を一閃、平石を粉々に破壊した。

「歩け、歩け、歩け——」

目指すは扉。ユラリと剣を垂らし歩む飛鳥の姿は、それはさながら屍のようにも見えたかもしれない。いつもは外聞に気を使う淑女然とした彼女がこんな状態になるほど、彼女は追い詰められているのだ。

「歩け、歩け、歩け——殺せ」

それは、それこそ普段の彼女からは絶対に発せられない言葉だった。

「殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ、殺せ」

まるで壊れた音の出る人形のように、その言葉を繰り返す。単調に、それでいて激情が、発せられる音の響きから垣間見えた。

「殺さなくちゃ……いけないの」

踏み出す足は震えているが、畏れは無い。

木の下に入った。落ち葉を踏んだ。靴についていた血が、踏み碎かれた葉の残骸を濡らす。鬼化したそれらは与えられた少量の潤いに歓喜するかのように脈打ち、垂れ下がっているせいで地面を追従しているように見える剣がその脈動を断った。

息は荒く、心臓は早鐘を打ったと思しき鳴動で全身に血液を送る。歩いているだけで倒れてしまいそうな程に心身共に疲れているが、それがどうした。

ここで倒れれば誰かが助けしてくれるわけじゃない。だから進むのだ。

ここで泣き言を言ったら誰かが慰めてくれるわけじゃない。だから進むのだ。

贖罪を求め。

それはいつそ、狂氣的とも言えるくらいに。



獣の嗅覚は鋭い。人ではとても感じられないような臭いでも、それを感じ識別することができる。だからこそ、尋常とはかけ離れたこの獣がそれを嗅ぎ付けたのはある意味必然だったのだろう。

獣が鼻を向けた先から漂うのは、濃密な血の匂い。甘美で淫靡な誘惑を放つ、鉄の香り。それはゆっくりと移動している。ゆっくり、ゆっくり、獣の方へ。姿は見えなくとも、それだけはわかる。

いつもならそれだけで獣は歓喜しただろう。飢え渴いた欲望を満たすには、ただ殺して喰らえば済むものだから。でも今回は違った。

腹は減る。でも、喰おうとは思えない。

本能が警鐘を鳴らしているのだ。来る其は、自らに害を為すに値するものだ。

目を剥き、牙を剥く。精一杯威嚇するように喉を鳴らす。ただ、それだけの抵抗。契約によってある条件を満たさない限り傷つくことのないはずの獣は、その条件を満たしたモノを恐れていた。

木々の奥から人影が現れる。血のように紅いドレスを血に濡らし、対称的な白く輝く剣の先端を土に汚している。

『GURRRRRR……』

唸るその声に人影——飛鳥は顔をあげた。

「……貴方ね」

その目は虚ろだった。濁っていた。悲観と悲哀が混ざった歪な色をしていた。

ユラリと力なく体を揺らす飛鳥に言い知れぬ不安を感じ、獣は一步後ずさる。その距離を詰めるように、飛鳥が一步踏み出した。

「貴方を殺せば、終わるのね」

剣の切っ先が持ち上げられ、獣に向けられる。曇り空の暗い光を白銀が反射し鋭く輝く。その刀身は飛鳥を映し、血に濡れた熱を彼女に伝えた。

その瞬間、飛鳥は地を蹴り獣に向かって剣を突き出した。



なのに、この武器が獣相手に折られてはゲームのクリアなど到底不可能になってしまう。

そして結果はこの通り、というわけだ。

「……そう。斬れるのね」

その眩きに呼応するかのようになり、また獣は飛び出す。右前足はほぼ使い物にならないので、今度は左前足で飛びかかる。

「土よ」

しかし獣の爪は飛鳥に届くことはない。飛鳥の一声がスイッチとなり、土——具体的に言えば、土の中の微生物全てが一体となり彼女と獣の間に巨大な壁を作り出す。獣はそれに鼻の先からぶつかり、後ろへ崩れ落ちる。同時に壁もまた崩壊した。

だが獣も諦めない。素早く立ち上がり——右前足の負傷のせいで若干ふらついてはいるが——再びの疾走を始める。今度はその牙を剥き出しにして、少女を噛み千切ろうとした。

「木々よ」

次の命令は付近の木々に与えられた。まるで命を持つゴーレムのように全ての木が枝を伸ばし、幹をくねらせ獣の全身に纏わりついた。体の余すところなく圧迫され、木の表皮のざらつきによって齎される痛みは皮膚なき獣は絶叫する。そして狂氣的に暴れ、体から枝と幹を剥いでいく。いくつもの木々が空に舞い、曇り空を茶色く染める。

二度の攻撃が阻止された獣はといえば、やはり警戒しているのか少し遠くで飛鳥の様子を伺っている。ふふ、と嘲笑うようにして口を歪めた飛鳥はそんな獣に対して剣を振り上げた。狙いは——右前足。

既に大きく形を変えてしまったそこへ降り下ろされる刃を、獣は左に跳躍して避けた。と、そこへ、

「木々よ、棘となれ」

多数の木々はその姿を鋭い棘へと変え、獣を迎えた。跳躍の勢いそのまま突っ込んだ獣は左半身にとってもない苦痛を感じるが、間もなくまるで自分を囲むように幹を伸ばすその棘の群れを見て、さらな

る苦痛の到来を予感した。その予感は、当たっていた。

『GEEEEEEYAAAAA  
AAA!!』

毬栗を逆にした形、といえはいだろうか。数えるのも嫌になるほどの棘は獣の全身を取り囲み、傷にはならない傷を与える。そう、傷にならない。決して貫かず、決して血を流させることのない、故に決して絶えることのない痛みを、全方向から与える。それがどれほどの激痛を生むか、語るべくもないだろう。

棘の隙間から少女の姿が見える。赤く、赤く、命の輝きをその全身に浴びたように赤い少女は、濁った瞳を揺らすこともなくこちらを見ている。しかしその表情は、哀れむように笑っていた。

そしてどういうわけか、棘の拘束が解けた。急に自由になった体をふらつかせて生まれたての小鹿のように立てば、痛みで白い光がちらつく眼が少女を捉える。

『GEE……AAA…』

もはや雄叫びをあげることすらも許されない、ボロボロの体。それを何とか奮い立たせ、萎れた闘争本能に火を着ける。

「……そう。貴方は最後まで、闘い続けるのね」

抑揚の無い声だった。獣をただの獣畜生としてしか見てないような、そんな声だ。まるで自分の感情全てを押さえ込んでいるかのよう  
な、そんな――。

『GEEEEEEYAAAAA  
AAA!!』

獣が吠える。きつとこの獣自身、この次に訪れる結末はわかっているのだ。だから、全力を。ただ、全力を。黒く塗り潰されても。赤く染められてもいい。まだ獣がガルドであったときの、ニヤルラトホテ  
プに無理矢理残させられた理性を持って、吠えた。

獣は駆ける。斬られた右前足を地に着けて。痛む体に鞭打って。それだけしか、出来ることはないのだから。

「――森よ」

飛鳥がゆつくりと言う。それと共に、彼女らを囲む森一帯に起きる

変化。

木々がざわめく。土が踊る。風が荒ぶる。

木々は骨に。土は肉に。風は血流に。

そうして出来上がったのは、不格好で無骨な、飛鳥や獣を大きく凌ぐ巨人。

飛鳥は剣を放り投げる。獣はそれを見て軋む体に力を込めて、大地を蹴った。

巨人が飛んできた剣を取った。偽物の腕を振り上げ、偽物の命を燃やす。

そして――

「叩き斬れ」

その一言と共に、獣の体を半分に分った。

風圧が飛鳥のドレスを揺らす。噴き上げた血が付近を濡らした。

同時に、役目を終えて巨人が崩れ、剣が落ちて地面に刺さる。飛鳥はそれを抜いて獣の元――分かれた上半身の元へと向かう。

「……………」

動けなくなつた獣の体を見回すと、改めて醜いということがよくわかった。皮膚が全て剥がれ、赤く筋肉が剥き出されている。『装飾を剥がれた扉』というのもよくわかった。

よくよく見れば、胸の辺りだけ少し筋肉の配置がおかしかった。普通なら向いていない方向に筋が通っていて、そこだけが他と断絶されているように感じる。飛鳥はその中心に、薄く細長い穴が空いているのに気づいた。

「いっね」

剣を逆手に構える。獣はまだ息があるようで、まさに虫の息と称するに相応しいほど弱々しく呼吸を繰り返していた。

「やようなら」

冷酷に、冷酷に。

飛鳥の腕は振るわれた。

一切の抵抗を見せず、寸分違わず穴に入っていく剣。カチリ、と何かがハマる音が聞こえた。

獣の体が膨らむ。きつと、破裂するのだろう。でも飛鳥は既に一回、命が絶たれる瞬間というものを見ている。今更化物が死んだところで動じるものか。

が、そんな飛鳥を驚かせたのは、獣に変化が起きてすぐのことだった。

水を入れすぎた風船のように膨らむ獣を見ている中、ゆっくりとその光景が目に入ってきた。それはみるみるうちに膨張して、先程までの面影を失わせていく。そのとき、獣が口を開いた。その瞬間、まるでここだけスローモーションが流れているかのような感覚が飛鳥を襲った。

そして、それが極限まで達したとき、獣は――

「ア……RI………GA………ト………」

「――↓――」

次に目に入ってきたのは、赤い袋が弾けた姿だった。

赤い雨が降る。熱く、熱く、熱く。飛鳥の顔とは対称的に、地面を赤く染めていく。

――なんで――

蘇るのは獣の死に際。あるとき、確かに獣は喋った。苦痛の中で、絶望の中で、自分を殺そうとした相手に向かってありがとうと言った

――

――なんでよ――

「私は……私は……」

心のどこかでわかってた。きつとあの獣は理性があつて、自分と同じように感情があるということ。だから飛鳥は冷酷なふりをして、ガルドをただの獣として見ようとしていた。でも、無駄だった。

結局、飛鳥はどこまでも冷たくなることはできなかった。心が折れても決意があればどうにかなるとか、そんな甘い話はなかった。

――どうして――

どこで間違えた。どこで踏み外した。鈍色の空は更に暗くなっていて、ポツリと血ではない液体が赤い水溜まりに波紋を刻んだ。雨、というやつだった。



—— ああ、私は ——

「二人も人を……殺したんだ」  
不思議と、涙は出なかった。

## 第二十話 「だが後悔はするな」

雨が降っていた。空は暗い色で覆い尽くされ、そこから無数の水滴が降り注ぐ。その冷たさは、命の熱に浸された飛鳥の体をそつと冷やしていった。

「……私は……」

白銀の十字剣を強く——たいして力も入っていないが——握る。その柄は、この雨の中でも一際熱く熱を放ち、冷える飛鳥の体で唯一、右手に温もりを伝えていた。

雨に紛れて、飛鳥の体から赤が削げ落ちていく。

「……ええ、そうね、そうするのね」

カチャリ、と金属が揺れた。

「こうすれば、いいのね」

剣の切っ先が持ち上げられ、震える。飛鳥は剣を両手で持って、構えた。その刃の向く先は、細い彼女の首筋。

「……さよなら」

そして飛鳥は、己の首へと凶刃を突き立て——

「……ここまでだ、お嬢様」

——ようとするのは叶わなかった。細身の白い刀身を掴む、飛鳥のそれより大きい手。ゆっくりと虚ろな瞳で振り向けば、そこにいたのは十六夜だった。

「……十六夜君」

「お嬢様、それはダメだ。どれだけ思い詰めたとしても、それだけはやっちゃダメだ」

十六夜が少し腕を持ち上げれば、まるで子供から玩具を取り上げるような仕草で飛鳥の手から剣の柄が抜ける。飛鳥はその様子を何をするでもなく見つめ、視線を再び地面に落とす。

「いいかお嬢様。たとえどんなことがあっても、一人で抱え込むモンじゃな——」

「私ね、二人殺したのよ」

「……」

十六夜の言葉を遮るようにして、飛鳥が口を開く。その放たれた言葉に、十六夜は沈黙するしかなかった。

「何故かはわからないけれど、あの広場で私はケイを殺したわ。勝手に腕が動いて、勝手に彼女の首を絞めて、勝手に彼女を殺していたの」吐き出すように、懺悔のように、飛鳥は小さく口を動かす。

「そしたらね、あの子なんて言ったと思う？ありがとうございます、つて言ったの。変よね。殺したのは私なのに」

十六夜は何も言わない。

「人形みたいに倒れたケイをね、私の腕は引き裂いたのよ。そうしたら心臓を掴んでね、いやだいやだって泣きながら、私はそれを握り潰したわ」

飛鳥の手の甲に、雨とは違う雫が落ちる。頭の中でそのときの映像が鮮明に蘇ってきて、思考を真っ赤に染めた。

「それでね、私はケイを殺して手に入れたその剣を使ってガルドを殺したの。自分でもびっくりよ。私って、あんなにひどいことが出来たのね」

声に嗚咽が混ざり始める。発音が曖昧になってきて、鼻をすする音が雨音に消えた。

「私はこのギフトが嫌いなのに、何度も何度も使ったわ。ガルドを斬ったり、刺したり、たくさん苦しめた」

握り締めた掌が、赤いドレスにシワをつける。

「それで、最後にガルドの胸に剣を突き刺したの。これで終わりだつて、そう思ったから。そしたらね、彼も言ったのよ。ありがとうございます」

嗚咽は更に激しくなり、溢れる涙は雨にも負けない勢いになる。

「……私は“人”を、二人も殺したのよ」

「……お嬢様。言っておくが、あの獣は人じゃない。あれはただの化物だ。ただの怪物だ」

「いいえ、人よ。だって、ちゃんと理性を持って生きていたじゃない」

——なんてことだ。

十六夜は嘆息した。これでは飛鳥が傷つくのも当然と言えよう。

耀は、悲劇に囚われた獣としての獣ガルドを見ていた。

十六夜は、ニヤルラトホテプの被害者としての獣ガルドを見ていた。  
故に二人は獣ガルドをきちんと直視出来ていたのであつたし、敵として認識できていたのだ。

だが、飛鳥は違った。

飛鳥は、ガルドを人として見ていた。

だからこそ、飛鳥は誰よりも傷ついていたのだ。

これでは意見が食い違うのも当然だろう。だって、そもそも十六夜と飛鳥では今まで生きてきた価値観が違いすぎる。

「これは私の責任なの。私が背負うべき罪なの」

「お嬢様……」

「それとも何かしら？ 貴方が私を慰めてくれるというの？」

挑発的にも取れる発言を自覚したのか、自嘲気味に息を吐く飛鳥。

十六夜はそんな彼女の小さな背中を見つめ、ゆっくりと言う。

「いや、俺はお前を慰めたりしないし、別に責任を負うなどとも言わない」

突き放すように、いつそ冷酷にも思えるように放たれたその言葉に飛鳥は「なら」と言い返そうとするも、すぐに十六夜が続きの言葉を紡ぐ。

「だが後悔はするな。後ろを振り返って、叶わない願いをずっと抱え続けるな。悔やめば、それは過去への冒涇だ」

十六夜の脳裏に浮かぶのは、命の冒涇を嘲笑と共に行う神の姿。その悪意に晒された飛鳥だからこそ、今何よりもニヤルラトホテプに近づく可能性がある。それだけは何としても防がなくてはならない。飛鳥のためにも、ノーネームのためにも。

飛鳥は何も言わない。自分に向けられた言葉を噛み砕くように何回か目を伏せ、なおも無情に雫を吐き出し続ける空を虚ろな瞳で仰いだ。

「なら、私はどうすればいいの？」

「受け入れろ。開き直って、殺した命の重さを背負い続けろ」

「――」  
十六夜自身、酷いことを言っているのはわかっている。ひどく無責

任で、ひどく無情で、飛鳥のことなんて鑑みていないと自覚している。でも、下手に寄り添うよりもこうしたほうがいいのだ。中途半端に狂気をわかったふりをするよりも、ただの人間として接する方がいい。それは、一度狂いかけた十六夜だからこそわかったことだ。

「……………そう」

飛鳥は短く返す。別に助けを期待していたわけではない。だが、こうまではっきりと言われると何かしら感じるどころがないわけではない。——だからこそ、清々しいとも思えるのだろう。逆廻十六夜という人物は、狂気に吞まれた飛鳥を現実に引き戻すには、ちょうどいいファクターであった。

「ねえ、十六夜君」

「何だ？」

「ありがとう」

「……………どういたしまして」

罪を背負って、罪を受け入れて。

そうして飛鳥は、今行くぞ再び立ち上がった。

——その近くの、木々の間。

金属質な植物が、その様子をじっと見ていた。

◆◆

さて、舞台は整った。

役者は揃った。

なあペルセウス。

精々上手く、踊ってくれよ。

◆◆

——ノーネーム本拠。

空気が啼く。あまりにも強い槍の暴圧は、それよりも強い人の拳に跳ね返された。

時は夜。ノーネームの無駄に広い敷地の中、その一角で行われた元・魔王と人の勝負は、至極あっさりとは決着を迎えようとしていた。空に佇む幼い容姿の吸血鬼は、人——逆廻十六夜の巻き起こした鋼の暴風に巻き込まれる直前に、黒ウサギの跳躍によって救われていた。

「何をやる黒ウサギ！放せ！」

「なんですかこれは！」

「ッ——」

黒ウサギが驚愕の叫びをあげる。手に持たれていたのは、金と紅と黒のコントラストが鮮やかなギフトカード。そこに書かれていた内容に、彼女は驚いたのだ。

「純潔の吸血鬼姫……ギフトネームが変わっています。それに、神格が残っていません」

「そ、それはっ……………」

吸血鬼は黒ウサギに抱えられた状態のままギフトカードを奪い返そうともがく。——その力は、元・魔王というにはあまりにも弱かった。

その様子に気づいたのか、黒ウサギは吸血鬼を地面に下ろし、

「…………レティシア様。これはどういうことですか？」

気まずそうな顔で俯く吸血鬼。その表情からは沈鬱という言葉がありありと見えるほどの暗さを垣間見ることが出来る。これではまるで尋問だ、と考えた十六夜が屋敷の中へ行くように急かすと、二人はハツとしたように顔を上げると、屋敷の方向へ歩き出した。

そこへ、褐色の光が到来した。

「いけない——！」

吸血鬼は黒ウサギを押し退け、その体を庇うように光の前へ躍り出した。その光に当てられたところが灰色に変わっていき、やがて全身が覆われる。黒ウサギがそれを石だと察するのに一秒もいらなかった。

「レティシア様！」

光が止むと、そこにいたのは生の輝きを感じられないただの石像と、空から黒ウサギ達を見下ろす此度の下手人——ペルセウスの

面々だった。

そこからは早かった。彼らはまるで決められた業務をこなすときと同じように石像を回収し、立ち去ろうとする。そのあまりの無礼さと非道さに黒ウサギは激昂し、インドラの槍を投げつけようとするも十六夜によって制止され、その間にペルセウスに逃げられてしまった。

「十六夜さん！」

「落ち着け黒ウサギ。今ここで揉め事を起こしたら厄介事になりかねない」

猛る頭をクールダウンして、黒ウサギは今一度考える。コミュニケーション「ペルセウス」は「サウザンドアイズ」の傘下のコミュニケーションだ。今ここで彼らといざこざを起せば、下手したらサウザンドアイズを敵に回すことになる。その場合に箱庭というものがどちらの味方をするか、考えるべくもない。

「で、ではどうすれば」

「白夜叉のところに行く。あいつなら何か知ってるだろ」

身内鼻頂で有名な彼女のことだ。此度の吸血鬼の脱走だって、きっと彼女が絡んでいる。そう考えた十六夜は、負傷した耀と心労のたまった飛鳥を置いてサウザンドアイズの支店へと足を向けようとした、その時だった。

「その必要は無いぞ」

屋敷の影、ちやうど庭からの死角になっているそこから声が聞こえた。しかし、ありえない。ありえるはずがない。だって、その声はたった今連れ去られた吸血鬼の声と同じなのだから。

「……なんで、貴女が……」

黒ウサギは目を見開いてそう漏らした。無理もない。何故なら、

「……久し振りだな。黒ウサギ」

レティシアードラクレア本人が、そこにいたのだから。



「アツハハハハハ！いやあ簡単だったなあ！脱走なんてするからこうなるんだよ！自業自得だ吸血鬼！」

場所は移りペルセウスの本拠。その一室、石化した吸血鬼の像を部屋の端に置いて、書類の山が出来ている机の前で、一人の男が品の無い哄笑をあげていた。

ペルセウス現ライダー、ルイオス・ペルセウス。この男こそが此度の事件の元凶であり、レティシアの石化を部下に命じた張本人だった。

「しかしなんだよ『箱庭の貴族』だって？あんな弱小コミュニティにそんなのがいるなんてな！しかも美人だって話じゃねえか！唆るなあオイ！」

誰が聞いてるでもなく、ただ頭に浮かんだ言葉を下劣に並び立て、再び下品な哄笑で部屋を満たすルイオス。彼が昂って机に足をぶつけるたびに、積み上がった書類の山が宙を舞う。その中の一枚が彼の顔に被さり、彼はそれを払って手にハルパーを呼び出し、叩き切った。「じゃあひよつとしたら吸血鬼と引き換えにソイツがウチに来たり？そうだそれがいい！箱庭の貴族は献身が売りだもんなあ！これはい、実に楽しみだ！アツハハハハハ！！」

「そうか、それはよかったな」  
突如、一人きりの部屋に響く誰かの声。ルイオスはぎよつとして顔を強張らせ、辺りを見回す。右、左、誰もいない。しかし、気のせいではない。確実に誰かいるのだ。誰か――

(……あれ)  
そして気づいた。ない。吸血鬼の石像が消えている。  
「あいつは……うわあああああ！！」

いた。目の前、机の上、書類の山の上にしゃがみこみ、此方を覗いている真っ黒な男が。

ルイオスは驚愕が度を超したのか、椅子から転げ落ち見下ろされる形になる。

「だっ、だだだ誰だお前え！」

「ん？誰って、お前が連れてきた石像だけど？」



は？とルイオスは素っ頓狂な声をあげる。そんな彼を尻目に、真っ黒な男は服の内側からギフトカードを取り出し、顔と同じ高さまで掲げる。

「うーん、しかし綺麗な見た目してんな。まさか黒ウサギにギフトカード見られるとは思わなかったし、騙しといて正解だった」

ジジジ……と、ギフトカードの表面にノイズが走る。金と紅と黒の鮮やかなコントラストは濁り、混ざり、やがて白と黒がない交ぜになった混沌色へと変化する。

「やつぱりこつちのが俺に似合っている、か」

「な、なななな……」

「あん？」

「何だお前！何なんだよ！なんで石になってねえんだよお！」

恐怖と困惑で顔を染めているルイオスの表情は、一言で言えば小物そのものだっただろう。真っ黒な男はその様子に嘲笑を浮かべ、クツクツと笑った。

「何、同類ウチにも誰かを石にするってやつがいてね。あれは確か蛸の息子だったかな。ま、そいつに比べりやお前らの石化なんて温ぬるいもんだぜ？なんせあつちは意識だけは残るからな。俺はいつかちよつかいかけるときのために対策をしておいたんだが、まさかこんなところで役に立つとは思わなかったよ」

ケラケラと愉しそうに顔を歪める男に、ルイオスは更に困惑する。蛸？息子？なんのことだ、と。

そんな彼の心境を知ってか知らずか、男は書類の山の上に器用に立ち上がり、ギフトカードから二つの球体を取り出した。

「さて、ここからが本題だ」

「へ……？」

間拔けな声を漏らし、無様に顔をクシヤクシヤにする小物ルイオスを黒い顔で見据え、男は告げる。

「ペルセウス、お前らにギフトゲームを申し込む」

それは、紛れもない宣戦布告であった。

これには流石にルイオスも恐怖より驚きが勝ったのか、

「ハア!?何言ってるんだお前!？」

と、声を大にして叫ぶ。

ペルセウスというコミュニティは、自らの力の誇示という意味合いを込めて常にギフトゲームの挑戦の門を開けている。しかしその条件というのは厳しく、クラークンとグライアイというペルセウスの伝承に沿った二通りの怪物を倒さなければならない。そして、今男が持っている二つの球体こそが、その挑戦の条件であった。

そしてこれこそ、男がレテイシアに伝えた“仕込み”の真相であった。ペルセウスのゲームの挑戦権を獲得し、自らをレテイシアと偽って本拠に乗り込みコミュニティのリーダーにゲームを挑む。コミュニティのルールであるため相手はこのゲームを断ることは出来ないのだ。

二体の怪物をたった数時間の間にどちらも打倒したということから、この男の実力は窺い知れるだろう。

「お、あつたあつた」

男は書類の山から軽く飛び降り、ルイオスの横に落ちている二つに断ち切られた紙を拾い上げてルイオスの前に突き付ける。そこには、クラークンとグライアイが打倒されたことへの報告が書かれていた。

男は、まるで罪状を告げる裁判官のように穏やかに言った。

「開催は一週間後。ゲームの形式はペルセウスのゲームそのものでいい。参加者は俺一人。万全の準備をしてからゲームに臨め」

ゴトン、と二つの球体がルイオスの眼前に落下し、埃を巻き上げる。

「さあ、恐怖しろペルセウス。このニヤルラトホテプが、真の外道を見せてやる——!」

告げられたのは、死刑宣告であった。

## 第二十一話 「久し振りだな」

——一週間後。

「さて、準備はいいかなペルセウス英雄」

ニャルラトホテプは白亜の宮殿の前にいた。眼前には身長の三倍はあるであろう門が聳え、そこに契約書類が貼られている。

ニャルラトホテプがそれを手に取り、読み進める。

『ギフトゲーム名 “FAIRYTAIL in PERSEUS”  
プレイヤー一覧 ニャルラトホテプ

・ “——” ゲームマスター ニャルラトホテプ

・ “ペルセウス” ゲームマスター ルイオスⅡペルセウス

・ クリア条件 ホスト側のゲームマスターを打倒。

・ 敗北条件 プレイヤー側のゲームマスターによる降伏。

プレイヤー側のゲームマスターの失格。

プレイヤー側が上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

・ 舞台詳細・ルール

\* ホスト側のゲームマスターは本拠・白亜の宮殿の最奥から出てはならない。

\* ホスト側の参加者は最奥に入ってはならない。

\* プレイヤー側はホスト側の（ゲームマスターを除く）人間に姿を見られてはならない。

\* 姿を見られたプレイヤーは失格となり、ゲームマスターへの挑戦権を失う。

\* 失格となったプレイヤーは挑戦資格を失うだけでゲームを続行することはできる。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、 “——” はギフトゲームに参加します。

“ペルセウス” 印』

「ふむ……」

一通り目を通し、ニャルラトホテプは一つ息を吐く。そして次の瞬

間、

「プツ、ハハハハハハハハ！」

噴き出すようにして笑い出した。何故？と問われればこう答えるしかない。このゲームがあまりにも簡単だったから、と。

「なあるほど。どうやら、このゲームを作ったやつはよっぽどの無知蒙昧だったらしいな。よりによつて姿を見られてはならないと来たか。これは予想以上に楽そうだな」

そう言つて、ニヤルラトホテプは契約書類を握り潰す。ルールを把握した以上、これはもう必要ない。

さて、とニヤルラトホテプは門に向き直り、一步踏み出す。

——始めるでしょうか。

そうしてニヤルラトホテプは右腕を赤黒い巨大な肉塊へと変化させる。出来るだけ大きな音が出るように門を破壊した。



——一週間前、ノーネーム本拠。

屋敷の一室、来客用のテーブルセットが置かれたその空間に、レティシアと十六夜は向かい合うようにして座っていた。そこへ黒ウサギがティーカップを持ってやってくる。

「それで？事の次第を話してもらおうじゃねえか」

十六夜が目を伏せ気味にして問う。レティシアは唇を一度紅茶で濡らすと、よく通る幼いが凜とした声で返した。

「と言つても、私が知っていることなど少ない。せいぜい話せたとしても一つや二つしかないさ」

「なら聞かせてもらうぜ。ガルドをああしたのは誰だ？」

「……ニヤルラトホテプだ」

「やつぱりな」

十六夜は苦い顔をして一つ舌打ちをすると、レティシアにその詳細を求めた。同じくレティシアもあまり愉快ではなさそうに、

「私もニヤルラトホテプから聞いたことではないがな。元々ガルド

を獣にしたのは私だ。あれから人を奪い、そこに空いた空白を鬼種に置き換えたんだ。全ては新生ノーネームの戦力把握の為、だったのだから。せめて理性ある獣を殺すのは彼女らにとっても辛いだろうから、ガルドから理性だけは奪ってやろうと思ったのだが……」

もう一度、カップに唇をつける。

「ニャルラトホテプは獣に理性を戻したんだ。それも獣の中にニャルラトホテプを混ぜ込むという最悪の形でな」

「……どういふことだ」

「ニャルラトホテプ曰く、獣の中に体液を直接流し込んだらしい。それによって飛びかけていた理性は無理矢理押し留められ、代わりに狂気に染まった、と」

それを聞き、十六夜は顎に手を当てて思考する。ふと、思い当たった部分があるのか納得がいったという顔で天井を見上げた。

「なるほどな。お嬢様の話じゃ、春日部が突然頭を押さえたとか言っていたが……それが原因か」

「春日部耀といつたか。確か彼女は動物の言葉を解すことができるのだったな。きつと、ガルドの裡に潜む狂気を見てしまったのだろう。彼女には可哀想なことをしたな」

申し訳なきさそうに視線を紅茶に映る自分に向けるレティシア。そのしよんぼりとした態度に責める気すら失せたのか、十六夜はハアとため息を吐いた。

「まあいい。それよりもようやくわかったよ。なんでガルドがあんな姿をしていたのか、全部な」

十六夜の頭にある知識の中から、該当するものを選んでいく。最終的に行き着いた結論は、レティシアの弁通りニャルラトホテプに関することだった。

「*Skinless One* 皮膚なき者……ニャルラトホテプの化身の一つだ。第三の目に、剥き出しの筋肉。何もかもが一致してる。……悪趣味なことだな」

「それには同意するよ。私はアレほど、他者を害することに喜びを見出だしてるやつを他に知らない。————ついさつき白夜叉に頼んで調べてもらったのだがな、東の森、かつて森の守護者だった頃のガ

ルドがいた森の中に魔法陣が見つかった。その周りには血が撒き散らされていたとき」

十六夜は顔をしかめる。皮膚なき者といえは生け贄が有名な話だろう。生け贄を捧げる者には多大なる恩恵を、しかし途中で捧げるのをやめてしまった瞬間に災厄が降りかかるといふモノである。ガルドは拐ってきた女子供の中で食いきれなかった者を生け贄として捧げ、その代わりにコミュニティを繁栄させるだけの恩恵を受けてきた。しかしノーネームでは人が拐えなかったため、ニヤルラトホテプと同化するという最悪の結末を迎えることになってしまったのだ。

考えるだけで胸糞の悪くなる話である。

十六夜は一度気分を変えるために紅茶に口をつける。

「それじゃ、次の質問だ。さっきのアイツは誰だ？レティシア、って言ったか。何でお前は二人いる？」

「それは聞かずとも、君自身がわかつているのではないか？」

「……………」

沈黙。確かに、十六夜には先程の吸血鬼の正体はわかっている。先程十六夜と槍の投げ合いをしたのはニヤルラトホテプだ。ニヤルラトホテプがレティシアに化けて、ペルセウスに誘拐されたのだ。

「やはり、思い当たる節があるようだな」

「ああ。でもそれでもわからないことがある。なんでニヤルラトホテプは自らペルセウスに連れ去られるみたいな真似をしたんだ？アイツは誰かを助けるなんてそんなことは——」

レティシアは十六夜の言葉を受けて目を逸らす。まさか、と十六夜は絶対に選んではいけない選択肢をレティシアが選んだ可能性に行き着いた。

「お前まさか——ニヤルラトホテプと取引を!？」

「ツ……そうだ」

出てきた言葉は肯定だった。

「——ああクソツッ！なんてことだよ最悪だ！おい黒ウサギ！今すぐ白夜叉に連絡を取れ！すぐにゲームをやめさせ——」

「あー、それされると困るんだよね」

「ッ！」

窓から聞こえる声。耳障りで、それでいてどんな声より温かい歪な声。それを発していたのは、異形の双頭の蝙蝠だった。

「ニヤルラトホテプッ……」

レイシアが喉奥から絞り出すように言葉を放つ。双頭の蝙蝠は部屋に入り込むとその姿を人へと変え、クツクツと笑った。

「よくもぬけぬけと——！」

「まあまあ落ち着けよ、俺は別にお前らを傷つけようってわけじゃない」

そんな風に軽く諭すように言ったと共に、ニヤルラトホテプが取り出したのは褐色の光を放つ物体だった。

「お前らに動かれると困るからさ、ちよつと一週間くらい固まっててくれない？」

「なっ……！」

突然の事態に、十六夜たちは反応できない。服の端、指の先から光に吞まれ、やがて全身を石に変える。温かい紅茶も華やかに光る照明さえも全てを鈍色に覆い、時の躍動を止める。

ニヤルラトホテプは十六夜の石像の前に立つ。驚愕と怒りに歪んだ顔を優しく撫で、ゆっくりと嘲笑った後に、ニヤルラトホテプはノーネーム全てを石に変えようと廊下へ出るのだった。

「二週間後、楽しみにしてろよ。クフツ、クヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ——」

嘲笑が、ノーネーム本拠に木霊した。



ニヤルラトホテプが門を破壊した後、兵士の行動は迅速だった。死角が無いように宮殿内部に最低限の見張りを残し、多数の兵を入り口に向かわせる。宮殿内部の構造としては、この門は正面から見える唯一の入り口であり、また一本道である。道幅は広いがその分見通しがよく、二人も人がいれば隅々まで見渡せるようになっていた。そこに

大量の兵士が殺到すれば、まず侵入者など見つかること請け合いなのだ。

が、兵士たちは入り口までたどり着いたとき皆一様に顔を見合わせ、同じ疑問を口にした。

「何故、侵入者がいない？」

入り口には誰もいなかった。コミュニケーション現リーダーであるルイオスの言葉によれば、「あれは普通じゃない。気を付けろ」ということらしいが、これでは普通も何も確認のしようがない。しかし、門は完膚なきまでに壊されているのだ。誰かが入り込んだことは間違えようのない事実だろう。

ガヤガヤと騒ぐ兵士たちの、その横。そこには見映えのためにいくつか観葉植物が置かれているのだが、彼等はその気に留めようとせず入り口の方を見ていた。その中の二つが、妖しく動いた。

まるで黒い色水のように影に同化し、二つの影は兵士たちの一番後ろで交わり一つになる。その影はさらに形を変え、それは段々人に似てきた。それが最終的に作り出した形は、平凡な兵士そのものだった。

やがて兵士たちは自分の持ち場に戻ろうと踵を返す。影によって生まれた兵士もそれに紛れ宮殿内部を進んだ。

——その顔に、一つ異質な嘲笑を浮かべて。



石畳の上を歩く。鎧が金属質な音を響かせ、夜の月に照らされる宮殿の中を反響する。

多数の兵士が辺りを見張る中を、悠々とニヤラトホテプは歩いていた。その体を兵士に擬態させることで、完全に「ペルセウス」の一員として紛れ込んでいた。

ハデスの兜を被った兵士が守護する中庭を通り抜けた。

最奥に続く一本道に置かれた兵士の前を通りすぎた。

本来は数十人規模で攻略されるはずのこのゲームを、ニヤラトホ





## 第二十二話 「それでこそお前だよ」

褐色の光が白亜の宮殿を包む。美しい白を湛えていた壁も床も全ては鈍色へと変わり、その中で侵入者を見逃さまいと目を凝らしていた兵士たちも皆ピタリと固まり命の脈動を止めた。

——白亜の宮殿、最奥。

多数の星が頭上を彩る夜空が、褐色の光に照らされる。たちまち鈍色の物体が重力に従い落下してきて、それは一つ一つが不揃いな子供の粘土細工のようだった。

「どうだ！石化が通じなくてもこれなら痛いだろ！」

落ちてきているそれは雲だった。水蒸気と氷の粒の塊でしかないそれらはアルゴールの放つ威光に当てられ、質量を持つ鈍器としてニヤルラトホテプを襲ったのだ。

ルイオスは勝利を確信したように目を光らせる。いくら相手が自らの切り札であるアルゴールの石化を無効にできるといつても、それによって副次的に発生した物質までは無効にできない。石化そのものは通じなくとも、石化によって生じた石をぶつけければダメージは通ると踏んだのだ。

だから、一種絨毯爆撃にも似た「雲の落石」を起こしたのだ。元々形のない雲であっても、その性質を石にしてしまえば殺傷力は計り知れない。地上から見ればそれほど大きくは見えないものでも、それは遠近感がもたらす錯覚であって実際の大きさはとてつもない。ルイオスは空を飛んでいるので落ちてくる雲自体を避けることは簡単だったが、ニヤルラトホテプはそうもいかないだろう。舞台は最奥と言われるだけあってそんなに広々としていないわけではない。精々が直径数十メートル程度で、落ちてくる雲の群れはそれら全てを覆い尽くすには十分すぎる大きさであった。

砂煙がルイオスの眼下のステージに広がる。人の身では及びもつかない大質量の一撃を食らわせたのだ。とても無傷では済まないであろう。そう思っていた。思いたかった。

しかし、その望みは届くことはなかった。



パキ……

その黒い液体が、ルイオスの右腕を握り潰した。

「アア……アアアアアアアア!!」

絶叫が木霊する。ハルパーはニヤルラトホテプへ突き刺さったままルイオスが手放したため手元から失われた。醜く形を変えた己の右腕を押さえて蹲るルイオスだったが、ニヤルラトホテプはそれを見下ろして自分の右腕を巨大な肉塊へと変え、ルイオスの体を掴む。それはまるで、巨人に捕らわれた人間が、食われるのを待っているようだった。

「やめっ……やめてくれ……やめて……ください……」

プライドと欲望が皮を被ったようなルイオスの口から出てきたのは、まあなんと小物らしい命乞いだった。

「ぼ、僕が悪かった……アンタの欲しいもんは全部やるから……、殺さないで……」

「……………」

ニヤルラトホテプは何も言わず、ただ悍ましく赤と黒の脈動を繰り返す右腕の肉塊に力を込めた。

ベキリ

「アギアアアアアア!!」

ルイオスが人とは思えない絶叫をあげた。ニヤルラトホテプの腕に掴まれた全身の骨が砕かれ、凡そ人生では経験できないような痛みを彼に齎したのだ。

「安心しろ。内臓は無事だ」

ルイオスが肉塊から解放される。彼の体の事など何も気にしていないとばかりに乱雑に落とされた衝撃で、既に折れている四肢がさらにあり得ない方向に曲がった。それは強い痛みを重ね、ルイオスをこれ以上なく苦しめる。

「さて、と……」

ニヤルラトホテプは踵を返し、ルイオスに背を向け歩き出す。目指すのは、壁に半分めり込んだ状態で唸るアルゴールの元。

わざとらしく足音をたててニヤルラトホテプはアルゴールの前に



「……そうだ」

ニヤルラトホテプは口を三日月のように歪め、喜悦に顔を染めた。「それでこそお前だよ、アルゴール——！」

光が収まったとき、そこにいたのは一人の美女だった。

灰色でありながらも艶のある髪に、一点の曇りもない肌。

服はなく、ただ丈の短い布切れを身に纏うだけではあつたが、その美しさが損なわれることはない。

「——アルちゃん、完全復活！」

そして、この余りにも場違いなソプラノボイスを意気揚々と放つその気概。

それこそが、《メデューサ》《原初の悪魔》と呼ばれる箱庭三大問題児の一角にして、かつて箱庭を駆けた魔王の一人。

魔王、アルゴール。その存在に他ならなかった。



アルゴールは喜んだ。かつて自らの犯した失態でつけられた拘束具。長年自分をずっと戒めてきたそれからようやく自由になったのだ。心は踊り、血肉が騒ぐ。

そして、それを行った者へ目を向ける。

「感謝するよニヤルラトホテプ。おかげでアルちゃんは待ち望んだ自由を手に入れたよ！」

小さく、それでいて陶器のように美しい掌を試すように開閉させて、アルゴールは礼を述べる。が、ニヤルラトホテプは様子を変えずにケラケラ笑っているだけだ。しかし彼女自身解き放たれたことに感謝こそしているが、ニヤルラトホテプ自身に感謝するつもりなど毛頭ない。むしろこのくらいの反応の方が変に気負わなくて楽でよかった。

「でもお前も変なことするね。わざわざアルちゃんの拘束解くなんてさ。何？マゾ？」

ふざけたようにそう言って、そんなわけないかー、と可愛らしく笑

うアルゴール。その度に布切れが風に煽られてはだけそうになるも、今ここにそんなことを気にする者はいない。

まるで昔馴染みと遊ぶように、アルゴールとニヤルラトホテプは会話を交わす。それは一種異様で、微笑ましくもあり、悍ましくもあった。

自らの美しさに傲り、怪物へとその身を変えたアルゴール。

自らの欲に忠実で、人と怪物の狭間を漂うニヤルラトホテプ。

なるほど、人に害を為す者同士、何か通じるものがあつたのかもしれない。が、それは通じることはあつても決して相容れることはないのだ。

「まあ世間話はこれくらいでいいよね？アルちゃんも早く外に出たいしぎ。——とりあえず死ね」

「ああそうだな。俺も昔のお前がまだ生きてたことに『感激』したから——とりあえず死ね」

解放への欲求と、嘘で塗り固められた虚言。

決して相容れることのない二人は、お互いの愉悦を求めて相対した。



——同時刻、ノーネーム本拠。

鈍色の石像が無数に点在するその異様な空間で、動くものが一つあつた。

植物だ。

表面が金属のように光り、枝に当たる部分をうねうねと躍動させる植物が、ノーネーム本拠の廊下を進んでいた。それは首とも幹ともつかない異形の体を曲げて、何かを探るかのように付近を見回す。少しずつ、少しずつ、先へと動くその異形は、一つの扉の前でその動きをとめた。

枝を伸ばし、扉を押し開ける。そこにあつたのは三つの石像で、一つは目付きの悪い男、一つは兎の耳が頭についている女、一つは幼い

少女のものだった。

植物はそれら全てを一度に視界に収めることができる窓際付近に移動し、体の中から褐色の光を放つ物体を取り出して石像に向けた。その光に当てられた箇所から石像に色が戻り、やがて三つの石像は三人の人となった。

「……これは」

男が己の掌や体を触って眩く。何か確認し終えたのか、窓際に立っている金属質な植物に目を向けた。

「……」

植物は何も言わない。ただのそのそと不器用に枝を動かし、歩みを進めていく。男がそれを遮るように前に立てば、植物はぎこちなく体を動かし男を見上げた。

「なあニヤルラトホテプ、お前は……」

男はそれ以上言葉が続かなかった。自分を見上げる植物に空いた虚無のような空洞を見て、それ以上言葉を紡ぐのをやめたのだ。

「……いいよ。行け。どうせお前じやなきや石化は解けない」

その言葉を理解したのだろうか。植物は男の横を通り抜け、扉を潜る。周りの部屋から声が聞こえるということは、あの植物は他のノーネームメンバーの石化を解除して回っているのだろう。

男はソファに投げ出すように腰を下ろし、天井についた照明を見て目を細める。

思い出すのは、先程飲み込んだ言葉だ。

——なあニヤルラトホテプ、お前は……

——一体、何をしたいんだ……？



## 第二十三話 「ちよつとだけム力ついたかな」

石が弾けた。

石が砕けた。

石が破れた。

白亜の宮殿、最奥。そこで繰り広げられていたのは、まさしく魔王の闘いと評するに相応しいものだった。

アルゴールとニヤルラトホテプ、その二柱の魔王が拳を合わせる度に空気が揺れ、衝撃が周囲を襲う。この状況下で石化したルイオスやペルセウスの兵士の石像に傷一つつかないのは、最早何かの陰謀ではないかと思われるほどだ。

「アツハハハハハハハ！すごい、すごいよニヤルラトホテプ！」

哄笑をあげ、アルゴールは愉しそうに目を光らせる。それと同時に右足を振り上げ、ニヤルラトホテプの脳天へと叩き落とした。が、それを難なく受け止めたニヤルラトホテプは逆に足首を掴み力任せに地面へと叩きつけた。そこを中心として小規模のクレーターが出来上がる。

「せえいー」

しかしアルゴールも唯ではやられない。クレーターに指をかけ、ブレイクダンスを踊るように足を振り回す。人と近い姿をしているように、その実態は神話に語られる怪物である。圧倒的な暴力に晒されたニヤルラトホテプは重力に逆らい上へと打ち上げられ、地面を遥か下へと望んだ。

アルゴールはすぐさま立ち上がり、小さなクレーターをさらに大きなクレーターで上書きしながら跳躍した。

拳を引き絞り、ニヤルラトホテプの腹めがけて突き出す。それは寸分変わらず吸い込まれるように命中し、ニヤルラトホテプに大きな風穴を空けた。黒い体液が飛び散り、アルゴールの白い肌を穢す。しかしすぐにニヤルラトホテプが体液を操りアルゴールを刺そうとしたので、それだけは避けようと彼女は身を翻し、逆にニヤルラトホテプの背中に強烈な殴打を叩き込んだ。

その速度は亜音速を超え、撃ち落とされたニヤルラトホテプの体は白亜の宮殿の床に突き刺さった。ビキビキと、衝撃波と共に床に無数の輝が走る。しかし、ニヤルラトホテプは苦悶の声の一つすらも発さずに体を起こそうとした。

そんなことはアルゴールが許さなかった。ただ撃ち落とす、それだけでは終わらない。

「ラアアアアアアアア!!!」

アルゴールが謳うように叫んだ。途端に宮殿の白かった壁は、床は、柱は、その全てを黒々とした闇色に染め、無数の蛇を産み出した。それらがのたうち、波打ち、脈打ち、暴れ狂う。「悪魔化」と呼ばれるアルゴールの星霊としての与える側のギフトは、たちまちニヤルラトホテプを蛇の魔宮の内へと誘い殺し尽くそうと獐猛な牙を剥く。

が、たかが蛇に呑まれた程度で邪神が死ぬはなかつた。

嫌悪感を刺激するように這いずる蛇が、下から現れた何かに締め上げられた。赤黒く脈動するそれは、蛇の尻尾から頭までに渡って巻き付き、最終的に蛇の全身を砕いて縊り殺す。それは一匹だけに留まらず、ニヤルラトホテプの上を覆う蛇の全てに巻き付いていき、破碎の不協和音を作り出す。

「ああ、脆い脆い。これならまだイグの方が強かったな」

薄くなつた蛇の覆いの中から、この地獄にはあまりにも不釣り合いな声が出た。湿った舌なめずりが、蛇の体を噛み砕く。

グチャリ、グチャリ、噛み砕く。味わうように、舐めるように、辱しめるように、貶めるように。

「不味い。蛇の血なんて飲むモンじゃないな。やっぱり飲むなら若い女の血がいい」

ユラリ、と。蛇の死骸を散らしてニヤルラトホテプは起き上がる。それを起点にしたかのように、黒く悪魔化を遂げた宮殿は蛇から白い元の姿へと戻り、月明かりを反射してニヤルラトホテプを照らす。

「なあアルゴール、お前の血を飲ませてくれよ。それだけが、今は楽しみでしようがない」

クツクツと、込み上げる笑いを堪えられないように――ニヤル

ラトホテプは嘲笑った。

「血を飲む？何なのお前、吸血鬼にでもなったつもり？」

アルゴールは得体の知れない気持ち悪い物を見るかのように言う。まあ元々ニヤルラトホテプは得体の知れない物ではあるのだが、今の発言はアルゴールには本当に理解できなかつた。

ニヤルラトホテプはそれを聞いてまた嘲笑う。

「そうだな、一週間前まで吸血鬼の真似事をしていたから、そのせいかもしれない」

「吸血鬼の真似事？……ああ、同族殺しの魔王か」

「その通り。ペルセウスペルセウスに囚われてたんで、古巣へ帰してやったのさ」

「囚われのお姫様を助けたヒーローにでもなったつもり？」

「まさか」

ケラケラと、アルゴールの発言を一笑に伏す。

——だつてさ。

ニヤルラトホテプの口が、音も立てずに三日月に曲がる。真つ赤な深紅が、その面妖な貌を二つに割くように広がった。

「ただ、ノーネームとレティシアレティシアドドラクレアに絆つてもものを作つておこうと思つてね」

「絆？お前つて、誰かと誰かの橋渡しをするような性格だつたっけ？」

「違う違う。そういうことじゃない」

グニヤリと、ニヤルラトホテプの貌に浮かぶ三日月は歪に嘲笑う。

これから起きる運命にほくそ笑むように、穏やかに、残酷に。

「その方が、壊したときに面白いだろう？」

「——」

アルゴールは言葉を失う。この邪神は今、何と言つた？

壊す。自らが育てたノーネームとレティシアの絆を、壊す。一体何のために。それでは本末転倒——。いや、そうではない。むしろ逆だ。ニヤルラトホテプは、壊す為に絆を育ませようとしている。

「……下種だね」

「今更」

呵々大笑。華やかに、艶やかに、朗らかに、明らかに。世界への皮

肉を込めて、ニヤルラトホテプの声はアルゴールの鼓膜を叩く。

アルゴールだって、誰かのことを下種だと揶揄できるほど出来た者だと自分を評価してはいない。彼女は自らを美しいと言って憚らないが、自分が魔王と呼ばれるだけのことをしてきたという自覚はある。誉められるようなことはしてないし、いつ滅ぼされてもおかしくない。だとしても、ニヤルラトホテプの思想に迎合できるとはとても思えない。

壊す為に、育てる。崩す為に、作る。ひどく歪で、ひどく矛盾しているその行動原理は、しかしひどくニヤルラトホテプに似合っている。それは確かに目の前に在るのに、まるで別世界の存在のように世界そのものに馴染んでいない。

「ニヤルラトホテプ、一つ質問があるんだけど」

「何かな?」

「お前はさ、何を望むの?」

至高にして底辺。災厄にして凡愚。多面性という言葉をこれまでかというほどに詰め込んだニヤルラトホテプに、アルゴールは問う。その答えは、ただ一つ。

「——混沌を」



其はさぞ楽しそうな笑みだっただろう。アルゴールはニヤルラトホテプの望みを聞いて、ただ獰猛に笑っていた。嘲笑うのではなく、ただ無垢な少女のように。

其はさぞ愉しそうな笑みだっただろう。ニヤルラトホテプはアルゴールの笑みを見て、ただ冒瀆するように笑っていた。無垢な少女のようではなく、ただ嘲笑うように。

対極。双極。二柱の神話の怪物はただひたすらに異なっていて、故に似通っている。少なくとも、害あるものとしてこの二柱は限りなく近い。

規律をぶち壊し、倫理を嘲笑う。世界の敵としての在り方は、まるで

お手本の如くそつくりだった。

同族意識。あるいは、同族嫌悪。

アルゴールはニヤルラトホテプに近いが故にニヤルラトホテプが大嫌いだった。では、ニヤルラトホテプは？アルゴールという同族のことをどう思っている？

簡単だ。何とも思っていない。何とも思っていないからこそ、さながら人に接するかの如く殺そうと出来るのだ。

拳も、剣も、銃も、無法という法が支配するこの空間においては合法でしかない。だから、ニヤルラトホテプが人を殺すようにその兵器を取り出したのはある意味必然とも言えただろう。

人類史において最悪の兵器。歴史上たった二度しか使われず、その畏怖を以てして戦争の抑止力として使われてきたそれを、——人は原子爆弾と呼んだ。



白亜の宮殿の上空に異様な物質が出現した。金属質の黒い光沢を湛え、月光を反射して鈍く輝く様はまさに鉄塊と表現して差し支えないだろう。その大きさはアルゴールを遥かに超えて、その質量を以て重力に従い落下する。

アルゴールはそれを見て、理解した。

——アレは、まずい！

次の瞬間、それは空中で爆ぜた。比喻でも何でもなく、光と熱を撒き散らすようにして円形の衝撃を生み出した。空気を揺らし、破壊そのものともいえる熱波が、放射能がアルゴールに迫る。彼女の視界が白く染まる。しかし、

「——ラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

アルゴールの小さな口から放たれる、耳を塞ぎたくなるほどの咆哮。それに呼応するかのようにして、白い光を塗り替えるように褐色の光が広がる。

爆ぜた熱も。爆ぜた破片も。爆ぜた放射能も。全てが全て石化す。

る。赤と白の破壊の渦は、その全てを灰色に変えて静止した。後に残ったのは、白亜の宮殿上空に浮かぶ巨大な球体。アルゴールが即座に石化したためそのような形で固定されたが、もしそのまま勢いのままに破壊が広がっていたら―――、想像には難くない。少なくとも、白亜の宮殿を含むここら一帯は焼け爛れた更地と化していたことだろう。

無論その程度ではアルゴールは殺せないだろうが、この宮殿は跡形も無くなる。隷属させられ自由を望んだ身と言えど、長年過ごした場所が消えるのは気分の良いモノだった。感情的に行動しやすいところは、実に神話の怪物らしく神らしいと言える。

とはいえ、もし感情的ではなく合理的に話をするとすれば、例えば「爆発したら最奥が崩れてルールに抵触する」だとか「石化したルイオスが跡形もなく消え去る」などがあるが、今ここでそれは然程重要でもない。

アルゴールは巨大な石の球となった原子爆弾に拳を向け、振り抜く。それだけでそれは粉々になり、塵となって白亜の宮殿に降り注いだ。パチパチと、拍手と共に愉しそうなニヤルラトホテプの顔が見える。

「ハハハ……これはすごいなアルゴール！まさか爆発したそれさえも石に出来るなんてな！」

誉められても、全く嬉しくない。基本的にお調子者のアルゴールであるが、調子に乗る気も失せてしまう。そんな灰色の虚栄が、ニヤルラトホテプの言葉には含まれていた。

視界を埋める灰色の塵の向こう、ニヤルラトホテプを見据えて、アルゴールは懐疑の視線を送る。

「……お前、頭おかしいの？あんなのここで出したら、それこそお前だつて」

「妙なことを言うなアルゴール。蛇が自分の毒で死ぬか？俺が造ったもので俺が死ぬものかよ」

「あれを造った？それにしてもは妙に……」

「嗚呼、人間的な兵器だろう？つつても、厳密に言えば俺は技術提供し

ただけだ。戦争中の科学者共が、どうすれば手っ取り早く敵を殺せるか話してたもんでな。ちよつと作り方を教えたら、まあ馬鹿みたいに人が死んだよ」

きつとこの会話を聞けば飛鳥は卒倒するだろう。鈍色の世界に飽いた彼女に愛国心なんてものがあるかは不明だが、飛鳥のギフトを使つて協力させられた財閥解体は元を正せば敗戦によつて起きたといつても過言ではないため、完全に無関係とも言えない。

ニヤルラトホテプの口調は軽い。枯れ葉を散らす子供のようには、焼けて焦げて死んでいく人の様を回想し、すぐに興味を無くして頭から消す。

「……馬鹿みたいに、ねえ」

アルゴールはニヤルラトホテプの言葉を反芻した。命の軽視、なんて高尚なことを言うつもりは毛頭無いが、しかしその物言いは気分の良いものではない。

アルゴールは怪物ではあるが下種ではない。むしろ簡単に命を停止出来るギフトがあるからこそ、彼女はどれほど命が儂く脆いかわ知っている。故に、その重みを知っている。

アルゴールは高尚な説教を垂れるような聖人ではないし、崇高な理念を掲げる君子でもない。だが、低俗な欲望に身を任せる狂人では断じてない。

だからこそ、

「ニヤルラトホテプ」

「なんだ、アルゴ——」

瞬間、ニヤルラトホテプの体が後ろへ弾き飛ばされた。白亜の壁に蜘蛛の巣状の亀裂を生み、砂煙を巻き上げる。それをやったのは、当然アルゴールだ。彼女が振り抜いた拳がニヤルラトホテプを打ち、その体を埋没させた。

「アルちゃんはね、別にお前の言うことに文句は無いよ」

前髪を鬱陶しそうに振り、瓦礫の中で蠢くニヤルラトホテプに近づくとその首を掴んで力一杯押さえつける。腐った肉を潰したような感覚が掌に広がり、ひどく粘つく液体がニヤルラトホテプの首から染

み出て、アルゴールの白魚のような指の間から滴った。白と黒が、悍ましいほどに鮮やかな対比を作り出す。

「でもね——」

絞められる指がニヤルラトホテプの首に食い込み、その形を歪めてへし折る。ニヤルラトホテプの首が有り得ない方向に曲がった。

次の瞬間、細い首は真つ黒な液体をバラ撒きながら握り潰された。嘲笑う顔を貼り付けたニヤルラトホテプの頭は己の胴体に別れを告げ、遙か下まで落下し石化したルイオスの近くまで転がる。

首の断面から噴き出すモノが黒い雨として降り注ぐ。全てを汚し、穢し、流す雨が。

アルゴールはその身を黒の中に浸しながらも、毅然に、堂々として叫んだ。

「ちよつとだけムカついたかな——!!!」

眼光が、首の無くなったニヤルラトホテプを貫く。その下で、アルゴールの怒りすらバカらしいと言うように、堕ちたニヤルラトホテプの貌は嘲笑を浮かべた。



## 第二十四話 「どんな気分？」

美しいと、人は私を呼んだ。

傲慢と、神は私を蔑んだ。

醜いと、人は私を疎んだ。

なんたる屈辱、なんたる雪辱か。

美しさを誇ることに何が悪い。美しさを比べることに何が悪い。

神は私を許さなかった。神は私を妬んでしまった。

私は醜く変えられた。私は怪しく変えられた。

美しかった髪は毒牙を剥き出す蛇へ。美しかった瞳は見るものを

終わらせる魔眼へ。

なんだ、これは。誰だ、これは。

これは私か。これは人か。

これは私か。これは神か。

違う。どれでもない。

私は化け物だ。

ただ災厄を振り撒く、自分勝手な化け物だ。

人に嫌われ、人に殺されるべき怪物だ。

なら、その務めを果たそうじゃないか。

なら、その宿命を歩もうじゃないか。

たとえ、その果てにあるのが、晒し首の末路だとしても。



黒い雨の中を蛇が走る。その体を粘性の液体に浸して、抜け出すように体をくねらせる。

白亜の宮殿の悪魔化が進行する。砕けた瓦礫は蠍の軍勢、弾けた柱は無数の蛇へ。

数多の怪物が白亜を異形の群で染める。埋め尽くされたその果ては見えず、ただ蠢く醜悪な者共の楽園と化していた。

アルゴールはニヤルラトホテプのへし折れた頸椎をつかみ、背面へ

振り返り様に放り投げる。空中に投げ出されたその首なしの体は黒い液体を噴出しながら回り、重力に従い落下を始める。しかし、その下降を無数の怪物は許してくれなかった。

壁から、床から、あらゆる地点に犇めくそれらが一斉にニヤルラトホテプに向かって跳躍する。蛇がニヤルラトホテプの体を貫き、巻き付き、締め上げる。蠍が穴を穿ち、抉り、内側へと入り込む。

人ならばまず耐えられないであろう残酷な暴力が、白亜の宮殿の上空で行われる。集まりすぎたそれらは球体のように黒い塊を形成し、入れ替わり立ち替わりニヤルラトホテプの体を蹂躪する。

アルゴールは精一杯息を吸い、命を停止させる光を放つ。引き金は、天上の神まで届くであろう魔の咆哮。

「リアアアアアアアアアアアア—— ツツ!!」

黒い怪物の集合した肉塊が灰色に変わっていく。硬く、固く、堅く、命なき石へとその存在を変貌させていく。

無慈悲に、無造作に、無作為に。

己が魔性で産み出した怪物を、己が魔性の光で殺<sup>止めて</sup>していく。生産と殺害のサイクルを自らのみで終わらせることの、なんと無意味なことか。

アルゴールは元は無数の蛇蠍であった、ニヤルラトホテプを封じている灰色の球を掴む。そして力を込め、有らん限りの殺意と共に地面に叩き落とした。弾け飛ぶ石の球に混じって、黒い液体と不気味な肉が飛び散った。

即死だ。どう見ても、そこに命などあり得ない。たとえ万能の神が相手だとしても、これほど完膚なきまでに碎かれては致命傷は免れない。

アルゴールは息を吐き、自らの起こした破壊の中心を眺める。

「……死んだ、かな」

そう吐き捨て、視線を動かし永らく隷属させられてきたレイオスに目を向ける。遠くにあるとは言え、この状況でその石像が無傷なのはどういうことだろう。

黒い雨の中で、その全身を観察してみた。足にはヘルメスから賜つ



そう声を発したのは足下に転がる首。人型はそれを両手で抱え込むように掴むと、千切れた首との断面に押し付ける。湿った音がして、その接合面に走る線が消えていく。

そこにいたのは、最初と何も変わらない完全体のニヤルラトホテプだった。

「まあ余興にはなったか。感謝するぞアルゴール。おかげで楽しめた」

喉に手を当てて声の確認をするような仕草をして、ニヤルラトホテプはケラケラと嘲笑う。アルゴールを見下し、その下に転がる赤く汚れたハルパーを拾った。

その刃に指を当て、ゆっくりと這わせる。その触れた先から刃が錆びて、鋭利な輝きを失っていく。ニヤルラトホテプの指が端まで到達したとき、最早ハルパーはかつての切れ味など残っていない、ただのなまくらと化した。

その刃を、ニヤルラトホテプはアルゴールの首筋に当てた。

「なあ、教えてくれよアルゴール。同じやり方で二回死ぬのって、どんな気分？」

「おな……じ……？」

言葉の断片を復唱する。首に当てられた刃、動けない体、突き付けられた死の言葉を鑑みて、辿り着いた答えはたった一つだった。

アルゴールの顔が蒼白に歪む。

「お前……まさか……ッー」

「それっ」

語尾に音符でも付きそうなほど軽い声で降り下ろされた刃は、的確に、それでいて正確にアルゴールの首筋を穿った。しかし、錆びた刃はけして深傷を負わせることはない。ただ、死なない程度の痛みを与えるだけだ。

アルゴールの悲鳴が、白亜の宮殿を揺らした。

「アアアアアアアアアアアアアアアア———!!!」

苦痛も、悲痛も、かつての生で味わった。体を斬られる痛みは知っているつもりだった。暴力に曝される苦しみは知っているつもり

だった。でも、甘かった。

今アルゴールを襲うのは痛みだけではない。悪意だ。何よりも強い、悪意そのものだ。刃はそれを伝えるツールに過ぎない。

錆びた刃が再び降り下ろされる。それもまたアルゴールの首を断つことはなく、頸椎を浅く削るだけに留まった。

降り下ろす。降り下ろす。降り下ろす。

肉が抉れた。骨が抉れた。神経が抉れた。

繰り返される拷問にも等しい行為に、しかしアルゴールの首はまだ落ちない。神話の怪物故の頑強さが、彼女に必要な以上の苦痛を強いているのだ。

ここで死ねれば、なんて甘いことをアルゴールは望まなかった。ペルセウスに敗北した過去があろうとも、永らく自由を奪われていようとも、誇りまでは失っていない。自由で身勝手に傲慢で、驕りの果てにあったものが惨めな晒し首だったとしても、それを恥じてしまえばそれは過去への冒瀆だ。そんなこと、あってはならない。

だから、今ここでも恐れをなすなど有り得ない。魔王であれ。怪物であれ。そう自分に言い聞かせる。

屈してたまるか。今アルゴールを立たせているのは、他でもないそんな意地だけだった。

アルゴールの心は、まだ折れない。



英雄は、何かを殺して英雄となる。

怪物は、何かを殺して怪物となる。

余りにも似通った性質、余りにも偏った人でなしの在り方。

その点では、ギリシヤのペルセウスは英雄であろうと怪物と何も変わらないし、メデューサは怪物であろうと英雄と何も変わらない。

違うのはただ、人に受け入れられるかだけ。

そしてそれらは等しく、最期は残酷なものなのだ。たとえば、異世界に呼ばれた後だろうとも。



鈍い音が木霊する。幾度となくアルゴールを襲う痛みと悪意が、その音に実体を持たせたように思えた。

アルゴールは耐える。反撃の機を伺い、ニヤルラトホテプの貌に少しでも傷をつけ、結果死ぬとしても——ただほんの少しでも、報いればいい。

黒い拘束は解けない。でも、抜ける糸口は見つかっていた。

解けないのなら、千切れればいい。千切れないなら、この身が傷つくことを恐れなければいい。たとえ己の体がどれほど血に塗れようと、常世にある最大の痛みは既に味わった。なら、何もこの進撃を阻むものはない。

己が体を引き千切る。それが、アルゴールの辿り着いた答えだ。自分より強い拘束なら、自分が犠牲を覚悟すればいい。

進む。力の限り、前へ。

肉が裂けた。血が飛び散った。黒い槍は紅く濡れ、地面に朱を滴らせる。

これから先、何も出来なくなつていい。ただこの瞬間にニヤルラトホテプに拳が届けば、それでいい。

全身全霊、死力を込めて。アルゴールは限界に迫った体を無理矢理ニヤルラトホテプの方に向けて、血まみれの拳を咆哮とともに突き出した。

空気が鳴る。大気が啼く。神に等しいその力を、たった一撃の為だけに振り絞る。

箱庭最強種の一角、星霊を謳うアルゴールの全力は、果たしてニヤルラトホテプの貌に突き刺さった。

吹き飛ぶ頭部と飛び散る黒。先程までであった首から上の形は跡形も無く消え去り、アルゴールの巻き起こした暴風と衝撃に溶けたように思えた。

余りにも呆気ないその結果にアルゴールは少しばかり呆けてしま

う。しかし肌を伝う血の温もりが、彼女の意識を現実を引き戻す。

勝った、とは思えない。ニヤルラトホテプは生きている。何故なら、頭の無い体はまだ倒れないのだから。

首の断面から黒い触手が伸びる。それは伸びきったアルゴールの腕を絡めとり、伝って胴体へ。

アルゴールに施されたのは、力を入れれば解けるような甘い拘束。体を軽く縛るだけの、舐めているとしか思えない鎖。

しかし余力を使いきった彼女には、もうそれを振り切るだけの気力も残されていなかった。

伸びた触手が錆びたハルパーを取る。首もとに当てられたそれを見て、彼女はこれから再開される拷問に思いを馳せた。

## 第二十五話 「これでいいのか」

それはきつと、運命と呼ばれる結末だった。女神をも凌ぐ美貌を持つ三姉妹。その末妹。名をメデューサと呼ぶ。

不死である姉二人と違い、彼女は不死ではなかった。だが、姉二人に劣らぬ美しさを持つていた。

故に、彼女が傲つてしまうのはある意味当然だったのだ。謙遜という言葉からは程遠い神の時代、その申し子たる彼女は特に。

男は誰もが彼女を褒めそやした。女は誰もがその美しさに羨望を覚えた。彼女は、それを是とした。



そしてこれを非とする。この、理不尽なニヤルラトホテプ神の裁きを。だから抗った。だから逆らった。それでも、届かない。

刃は絶え間なく首へと降り下ろされる。不気味な嘲笑が耳を叩く。かつての生を思い出す。醜い自分を討ち、その首を高らかに掲げた英雄を思い出す。ならば、ニヤルラトホテプがこの首を掲げたとして、それは果たして英雄か。

その様を思い浮かべて、アルゴールは失笑した。

「英雄も化け物も、所詮は同じか」

動かない体と痛みの中で、その眩きを放つ。ニヤルラトホテプは一瞬刃を止め、感慨深そうに貌を歪めた。実に、愉しそうに。

「よくわかってるじゃないか、アルゴール。死に際に悟ったことがそれとは、お前も面白い趣味してる」

鈍い音を立ててアルゴールの首を穿った刃が頸椎に到達した。メキリと、今までとは違った音をアルゴールの体が奏でる。

ニヤルラトホテプは刃を鋸のように引いた。錆が荒く頸椎を削る。アルゴールが僅かな苦悶を漏らした。

「なら、その気付きを抱いて死ぬがいい。安心しろ、お前のいた証明



は、多分俺が覚えてるさ」

最後まで厭らしくニヤルラトホテプは笑い、剥き出しの首元へ致死の一撃を見舞う。頸椎がへし折れ、美しいパーツを揃えた顔が地に落ちる。綺麗な、とても綺麗な鮮血が真つ赤な円を描き上げ、ニヤルラトホテプの足を侵す。

アルゴールの首は落ちると同時に小さなチョーカーの飾りに変化し、ささやかな金属音を響かせた。そこを起点にするかのように、灰色と化した宮殿は元の白亜を取り戻し、止まっていた無数の命の鼓動が動き出す。

それは、アルゴールの持つ石化の威光が、彼女の敗北によって消失したことを意味していた。

ニヤルラトホテプは足下のアルゴールの首だった物を拾い、踵を返した。向かうのは、既に意識を取り戻したルイオスの眼前。

「……んで……なん……んで」

ポツリポツリとルイオスの口から弱々しい言葉が漏れる。

「なんで僕だけこんな目に……、なんで……なんで……」

その声に涙が混じる。それこそが彼の本音。未だ未熟な彼が、怪物と出会いその心を侵された——それに対する恨み言だった。

「僕は何も悪くないじゃないか……。コミュニティとして取引をして、その落とし前としてサウザンドアイズ傘下から抜けて……。通すべき道理は通したはずなのに……。なんで……!」

その通り。彼は間違っていない。たとえサウザンドアイズ傘下のコミュニティとして正しくない振舞いをして、その後彼はそれを“脱退”という形で償った。彼の言う通り、通すべき道理は通したのだ。

彼はただ不幸だったただだけだ。その一番の不幸は、彼の言う“道理”から外れた邪神に遊ぶ価値があると思われたこと。

ニヤルラトホテプはルイオスの目の前に錆び付いたハルパーとアルゴールの首だったものを落とした。ルイオスは懸命に折れた腕と砕けた身体をくねらせ、さながら芋虫の如くそれらに這いよると、失くした宝物を見つけた小さな子供のように抱え込んだ。

これは未だ彼がペルセウスの末裔であると証明してくれる数少ない物だ。どれだけ心を踏み躪られても、どれだけ泥に塗れようとも、これさえあれば誇りだけは失わずにいられる。

だからニヤルラトホテプはそれをあえて壊さなかった。その誇りが、復讐心の燃料となるように。

ルイオスに耳の近くに屈み、数多のものを失ったことで空いた「心の隙間」に、ニヤルラトホテプはそつと混沌を差し込んでいく。

「なあペルセウス、これでいいのか？」

甘く、蕩けるような声。どんなオーケストラも、どんな歌姫もこの声には勝てない。それはまさしく、人の心を揺さぶる声なのだから。「悔しいだろう、憎いだろう。お前をここまで貶めた奴が。お前をこ

こまで陥れた奴が」

侵されていく。ルイオスの誇りを、ニヤルラトホテプが復讐心に塗り替えていく。

ルイオスはただ、その甘言を身動きもせず聞いているだけ。

「教えてやろうか。お前に理不尽を叩き付け、俺を差し向けた黒幕つてやつを」

勿論、嘘だ。そんな黒幕などいない。しかし、このニヤルラトホテプという神性は、嘘を本当のことのように言うことこそが真骨頂なのだ。

そして、さも揺らぎもしない事実のように、虚構を真実の如く吐き出した。

「——白夜叉だよ」

ハッとルイオスが顔を上げた。ニヤルラトホテプはそれを見て満足そうに顔を歪め、続ける。

「ああそうだ、心当たりがあるだろう。あの身内鬣、名無し鬣の白夜叉が、お前をここまで追い詰めた。吸血鬼を逃がし、手を汚さずにお前を潰す為に、ここへと俺を差し向けた」

嘘だ。レティシアを逃がすのに白夜叉は加担したが、ニヤルラトホテプの引き起こしたこの一件ペルセウス潰しに白夜叉は一切関わっていない。しかし、たとえ嘘でも十分なのだ。

何故なら、ルイオスの心は、既にニヤルラトホテプの掌中にある。

「これでいいわけではないよなあ？なあペルセウス。お前には権利があるはずだ。英雄の末裔として、策謀に嵌められた者として、あの卑怯な元・魔王を討つ権利が！」

その言葉が決め手だった。ルイオスの瞳は怒りに曇り、目の前の邪神ではなく、ここにいない白夜又へと憎しみを向ける。

満身創痍だ。それでも、復讐心闘志だけは灼熱に燃えている。それが、ニヤルラトホテプに植え付けられたものだとも知らずに。

——なあ、見てみるよアルゴール。

——お前を下した英雄の末裔は、こんな簡単に堕ちてしまった。

「そうだ、怒りに燃えろペルセウス。そのため復讐の戦力は、お前の配下は幸い無傷で残ってる」

そう、白亜の宮殿の攻略中、ニヤルラトホテプが誰も手にかげなかったのはこのためだ。蹂躪することも心を折ることもできたはずなのにそれをしなかったのは、全てこのとき——ルイオスに、“部下の負傷”を復讐しない言い訳にさせないため。

その効果は如実に現れた。

「オオ……オオ……オオオオオオオオ……!!!」

苦痛、苦悶、苦汁に満ちた唸り声。さながら獣のような声をあげるルイオスは、最早英雄の末裔などと輝かしいものではない。

それは、とある邪神によって運命を狂わされた、哀れな一人の被害者だ。



後日、サウザンドアイズ支店を“ペルセウス”が襲撃する事件が起きた。

幸いにして死者は出ず、その主犯であるルイオスもすぐに捕らえられることになる。が、そのルイオスの証言があまりにも意味不明で、

正気を失っているとして厳罰に処されることはなかった。それは、被害を受けた白夜叉からの要請だったという。

ルイオスの証言は以下の通りだ。

「お前らには見えないのか……？あれが、あの無数の蛇が」

「ああ、こつちを見た！よせ、来るな！」

「ああ、這いよってくる！僕の体を這いずっている！」

「やめろ、やめろ！見るんじゃない！」

「あの障子の向こうにも、あの窓の向こうにもいる！」

「僕は悪くない！僕は嵌められただけだ！あの狂気の魔王に嵌められただけだ！」

「だから、だから、もう許してくれよ！」

その意味を理解できた者はほとんどいなかった。唯一、白夜叉を除いて。

故に、白夜叉はルイオスに情けを与えたのだ。彼も、ニヤルラトホテプに弄ばれた、ただ不幸なだけの人間なのだから。



「ペルセウス」の解体と同時刻。名実共に解放されたレティシアは、ノーネーム本拠にて十六夜達と共に歓迎会に列席していた。

夜空がきらびやかな星に彩られる中、レティシアは人目につかないように十六夜に呼び出し、一枚の紙片を渡す。そこに書かれていたのは一つの数式だった。

「これは？」

「詳しくはわからない。ただ、これを渡せと言われた」

レティシアが頭を振る。それを確認して、十六夜は单身部屋に戻った。

備え付けられた机に紙片を置き、それを解き進める。そして最後の一文字を書き終えたとき、十六夜の背後に何かが現れた。

十六夜はそれを知っている。知らないわけがない。わざとらしく音を立ててベッドに座り込むその人影は、間違いなくニヤルラトホテ

プそのものだった。

「……やっぱりクルーシユチャ方程式か。悪趣味なことだ」

「クルーシユチャ方程式」

それはニヤルラトホテプの化身の一つだ。人でもなければ化物でもない、「数式」としての化身。

この数式に過去様々な数学者が挑み、敗れてきた。その中でただ一人解読に成功した者がいる。そして、その末路は——

「解けばニヤルラトホテプになる。今回俺をそうしなかったのは、また何かの気紛れか」

「よくわかってるじゃないか、十六夜。それを知りつつ解くお前も相応な狂人だよ」

そう言つてニヤルラトホテプは嘲笑う。気持ちの悪い声が部屋に木霊した。

「……それで」

十六夜は空気を変えるべく話題の転換を図つた。

「お前は何でここに来た」

「三つ、知らせがあるから」

ニヤルラトホテプは指を三本立てる。その内、一本ずつ折つていき、

「二つ目。ペルセウスが崩壊した」

一つ目から盛大な爆弾を落とした。しかし、もうこの程度では十六夜は動じない。どうせニヤルラトホテプに目を付けられた時点でこうなることはわかっていたのだ。

「二つ目。ペルセウスの崩壊ついでに白夜叉の支店を襲わせた」

「何やってんだテメエ」

「まあ聞け。この二つは前座だ」

そしてニヤルラトホテプは最後の指を折り曲げる。

「三つ目。レテイシアにとある呪いをかけた」

その瞬間、空気が凍った。十六夜は完全に動きを止め、ニヤルラトホテプを見詰める。

「……呪い、だと」

「ああそうだと。お前はわかっていたはずだろう。邪神と取引した者がどうなるのか」

ニヤルラトホテプの言葉は言い知れぬ重みを持っていた。数多の作品で語られた末路。そして、つい最近ガルドに襲いかかったその末路。その結末は、等しく並大抵の悲劇では語り尽くせないほどの「悲劇」。

「発動するのはいつになるだろうな。まあ、精々吸血鬼らしい姿を見せてくれることに期待しよう」

再び嘲笑う。その笑い声は、実に愉しそうだった。

居心地の悪い空気だけを残して、ニヤルラトホテプは影へと消える。まるでそこには元々何もなかったかのように痕跡は消え去り、その部屋は十六夜だけになった。

十六夜は窓から「ノーネーム」の庭を覗き、その中で楽しそうに喋るレテイシアを見た。しかし、彼にはどうしても、その後ろに死神の影が纏わりつくように見えて仕方がなかった。

「……お前は、どこまで」

脳裏にニヤルラトホテプの姿が過る。思わず壁を拳で打ち据え、衝撃で輝が丸く広がった。

「俺たちをバカにすれば気が済むんだ……!!!」

その問いは、虚しく響いて虚空に消えた。

あら、魔王襲来のお知らせ？

## 第二十六話 「鼠はもう」

暗黒というにはあまりにも明るく、光明というにはあまりにも汚れていた。

そこはどこか。鼠が蔓延り、淡い灯りが僅かに揺れる魔王の居城。赤、青、黄色、様々な色が万華鏡のように散りばめられては消えていく、日輪を拒絶した日陰者の住処。

「まさか本当に条件を飲むだなんて夢にも思っていなかったわ。いつたいどういうつもりなのかしら？」

鈴を転がしたような可憐な声。白黒のまだら模様があしらわれたゴシックロリータ調の服に身を包んだ少女が問う。その視線の先にあるのは、闇の中でたうつ黒い鬼のような生命体だった。

ザラザラとした<sup>なます</sup>鯨のような肌と、小さな翼のようにも見える<sup>ひれ</sup>鰭。口元と思しき部位から伸びる吻<sup>くちばし</sup>が上下に揺れ、水かきの張られた手足がペタペタと地を叩く。常人なら見るだけで吐き気を催すだろうと確信できる外見のそれは、一言で表すならば、まさに「邪悪」であった。「そう勘繰らなくていいだろう。どういうつもりか、と問われたなら、こう答えるしかない。これは俺の趣味だよ」

嘲笑うかのように、その邪悪は吻を振って答える。闇の中で不気味に響く悪辣な声音に、少女は嫌悪を抱かずにはいらなかった。

「あなたが協力してくれるのなら、きつと私たちの計画も上手くいく。何せ、あの悪名高い「千の貌を持つ魔王」だもの。それだけは信じてあげるわ」

「信じるなどと、この男にそんなこと言っているんですか？」

その嫌悪を隠すように、少女は不敵に笑みを浮かべた。それを悟られてしまえば、きつとその嫌悪感すら玩具にされる。そのようなことになるのはわかっていた故だ。

それに追従するように言うのは、豊満な肢体を少ない布で隠し、身体のひとつを惜しげもなく晒す美女。そして口は開かないが、同調

するように頷く軍服の男だった。

「余計なことを言うね、ネズミ取り。いいぞ、どんどん言ってみてやれ。それでオマエたちの可愛いご主人さまの心を変えられるなら、それはそれでまた一興。その綾模様を見るのも面白そうだ」

嫌悪を隠す、その思惑を知ってか知らずか。黒の邪悪は少女とその後ろに付き従う二人の従者に目を向け、歪んだ喜悦を瞳の奥に滲ませる。

この邪悪な化け物がここに来た理由を、少女たちは正しく凶れずにいた。そもそもこの魔王の心中を推し量ろうとする、そんな行為が間違いだとはハナからわかっている。それでも、新興の魔王一派として成立したばかりの彼女たちにとって、便利に扱える手駒を増やすことは急務にして第一優先事項。故に、なんとかしてこの化け物の手綱を握る機会を得ておきたかった。

少女は今にも噛みつきそうな雰囲気醸す二人の従者を手で制し、余裕の表情を浮かべて問う。

「残念ながら、私の心は変わらないし、変わらせない。そつちから声をかけてきて、そして今ここにいる以上、ある程度は私たちに益があるように動いてもらおうよ」

「そうかい。ま、そうしてくれた方が俺としても都合がいい。精々上手く使うといいさ」  
「えっ？」

あつさり。拍子抜けするほどに簡単に渡された手綱。少女の予想では、この魔王のことだから盛大な舌戦を繰り広げてのらりくらりと主導権を握らせないように立ち回ると思っていた。

少女が一瞬見せた呆けた顔。邪悪な化け物は、嘲笑うように吻を揺らす。

「安心するといい。お前たちに手を貸すというその言葉に限り、俺は嘘をつかないと誓おう。なんなら、今ここでその証明をしてもいいぞ」

——— 手練手管を回すのは得意だな。

その言葉に間違いはないと示すように、邪悪な化け物の背後から、



一人の竜人が姿を現す。

「お前たち、計画は考えてあつても、相手方にどうアプローチするのかは考えていなかったんじゃないか？ 新しい北の階層支配者誕生にかこつけて白夜叉に復讐する——御大層な目的を掲げていても、それには裏から手引する内通者が必須」

「……だから、彼を呼んだの？」

「ああ、その通り。魔王と名乗るなら覚えておくといいぞ、黒死斑の魔王。勝敗というのは物語のようなもの。より多く伏線を張った方が勝つんだよ。相手を一方的に自分の土俵に引きずり込めれば更に良い」

化け物は踊るように謳う。その後ろで強面の竜人が顔を不愉快そうに顔を顰めているが、化け物にそれを気にするような様子はない。「さて、これで俺の言葉に嘘はないと信じてもらえただろうか？」

「本当に、あなたは私たちに手を貸すというのね」

正直な話、少女は未だこの化け物を信じ切れずにいた。

悪名高い魔王、ニヤルラトホテプ。箱庭で暮らす者なら一度は耳にしたことがあるであろう災厄の名前。

来る火龍誕生祭、そのスポンサーとして白夜叉が参加するという報告を受けた少女、黒死斑の魔王——ペスト——は、己の大願を果たすために準備を進めてきた。

一朝一夕の計画ではない。この計画の主目的の一つであり、同時に最も厄介な障害である白夜叉を封じるために、態々太陰暦まで引つ張り出して封印の術を組んだほどだ。対太陽主権という一点に於いて、ペスト率いるハーメルンの笛吹きを名乗る一派はこれ以上ないほど完璧な布陣を敷いていた。

そんな中、今より遡ること数日前、この魔王が声をかけてきたのである。

——「どうかな、後輩諸君。俺の話の一つ聞いてはくれないかね？」

「千の貌を持つ魔王」。凶悪であり、邪悪であり、最悪。凡そ自分たちのような新興魔王など及びもしないことはわかりきっている相

手。それが、どういうわけか、その新興魔王風情に協力を申し出たのである。

今のペストたちにとっての最重要事項は手駒の確保だ。ペスト、ヴェーザー、ラツテン、シュトルム。大量の死者と伝承に裏打ちされた神魔霊混合の集団であろうとも、これから箱庭で魔王を名乗るには些か以上に力不足なのは目に見えていた。正直な話をすれば、勝ちを確信していた此度の「火龍誕生祭」襲撃も、ほんの少しのイレギュラーが入れば容易く瓦解するだろうということも承知している。

ニヤルラトホテプの進言は、彼女らにとつて寧ろこちらから頼み込みたいほどに甘い誘いだった。この魔王を味方につけたのなら、まず間違いなく計画は成功する。そのヴィジョンは簡単に浮かんだ。

しかし、その真意を読むことはできなかった。何故奴は私たちに味方する？

ニヤルラトホテプといえば真っ先に浮かぶ風評はその悪辣さだろう。かつて白夜叉をも手玉に取ったと言われる手腕と底の見えない混沌がニヤルラトホテプの真骨頂であることを鑑みて、ペストはその誘いに二つ返事で了承することを拒んだ。もし何も考えずにニヤルラトホテプの差し出した手を握ってしまったら、次に気がついたときに何が起きているかわからない。そう判断してのことだった。

故に、ペストは一つの条件を提示した。次にペストたちの下を訪れるときには、「火龍誕生祭」への侵入方法を手土産に持ってこい、と。彼女らの計画に足りなかった最後のピース。それこそがまさにこれであった。

北に存在する階層支配者は四人。内三人が、若くして次期「火龍」の座に就こうとしているサンドラードルトレイクのことをよく思っていないという噂は彼女たちも耳にしていた。

階層支配者とは秩序の象徴。下層のコミュニティの盾であり、魔王が現れた際には真っ先に対応すべき実力者たちの地位だ。そこに僅か齢十一の少女が就任しようとしているのだから、当然他の者からすれば面白くない事案なのであろう。故にスポンサーとして東側の階層支配者である白夜叉が列席しているのだ。

初め、ペストはそれら他の階層支配者に協力を仰ごうとしていた。『あの娘を潰してやるから私たちに協力しろ』。大方このようなことでも言えば簡単に釣れると思っていたのだが、しかしやはりそこは階層支配者、自ら秩序を乱すようなことは受け入れないだろうとのヴェーザーとラツテンからの指摘により、その案は却下された。

ならばどうするか。頭をひねっていたところに丁度現れたのがニャルラトホテプだった。

『お前の真意を図りたいから手段を用意しろ』。ペストの思惑を一言で纏めるならばこうなる。危険な綱渡りのような賭けではあったが、結果として、ニャルラトホテプは本当に自分たちに協力するつもりなのだとわかったし、侵入手段も用意できた。

「……まさか、当のサラマンドラの幹部を連れてくるなんて夢にも思わなかったけれど」

「だが、一番楽な方法ではあるだろうか？ 何せ身内も身内、己の兄の裏切りだ。流石の次期階層支配者といえども、こればかりは予測できない」

そうだろうか？ と、ケラケラ嗤いながら邪悪な化け物は竜人をペストの前へと差し出した。

威圧感のある佇まいの男だ。吊り上がった目尻と横一文字に引き結ばれた口は威厳を感じさせ、その長身を以てペストを見下ろしている。直ぐ様ペストの後ろから同じく威圧するような視線——ヴェーザーのものだ——が投げられ、二人の男が一触即発の空気に陥る。

次の瞬間には臨戦態勢に移ってもおかしくない空気ではあったが、お互いにここでの仲違いは無意味だと理解しているのだろう。すぐお互いの威圧を収めた。

「マンドラードルトレイク。此度、貴様ら——もといハーメルンの笛吹きのステンドグラスの搬入に許可を下ろした者だ。魔王を我ら「サラマンドラ」の庇護下の街に招き入れるのは危険ではあるが、こちらにも事情がある。せめて失敗はしないように願うぞ」

「そう。人に頼み事をするような態度とは到底思えないわね、竜人さん？ それで、事情って何かしら。それを聞かせてくださる？」

挑発。その言葉一つで、ペストはマンドラの眉が密かに動いたのを見た。続けて煽り文句を畳み掛けてやろうかと思いい口を開くも、それを制止したのは、ケタケタと嗤う化け物だった。

「まあまあそう言ってやるなよ黒死斑ブラック・パーチャの魔王。このお堅そうな竜人サマはな、焦ってるんだよ。百も下の妹にコミュニテイの頂点の座を奪われて、そいつが剩あまつぎえ階層支配者にまで昇り詰めようとしているってことにさ。そうになったら兄の威厳は？ 妹と比べられてしまう？

ああ、なんて可哀想なボク！ ほら、想像できるだろう？ だからそういうことは思ったとしても言っちゃダメなんだ。魔王サマと約束しようね」

お前の方が余程なこと言ってるけどなクソ外道ニヤルラトホテプ。その場にいる邪悪な化け物を除いた全員が同時にそう思った。

しかしその物言いから、ペストは何故マンドラがこの提案に乗ったのかを大凡察おおよそすることができた。

先のニヤルラトホテプの発言をそのまま受け取るとするなら、マンドラという男は大した小物だ。

妹に抜かされたから魔王に泣きついた。乱暴な言い方をしてしまえばそうなる。今こうして強面でペストを見下ろしているのも、その小心の裏返しだと思えば可愛いものだろう。

堪え切れずクツクツと口許を押さえて笑いをこぼすペストを見て、化け物は嬉しそうに吻を揺らした。

—— ああ、容易い。

—— 実に容易い。

—— こいつら、随分と簡単に口車に乗ってくれるな。

「ま、そういうわけだよお二人さん。これからは“火龍誕生祭”の失敗の成功を願う同士だ。仲良く仲良く、傷でも舐め合いながらやっつていこうぜ」

邪悪な化け物が闇に沈む。淡い混沌の中で影が蠢く。やがてそこから立ち上がったものは、真つ黒な長身瘦躯の不可解な男。

貌は無い。それでも、その口はきつと三日月を描いて嘲笑っているのだろうということはよくわかった。

次の瞬間、どこからか鼠が大量に湧き出した。ペストの足の隙間を、ヴェーザーの靴の側を、ラッテンの笛の下を、マンドラの横の壁を伝って、続々とニヤルラトホテプの下へと鼠が集結していく。

その鼠の顔を見て、そこにいた全員が等しく驚愕の表情を浮かべた。

げらげら げらげら

げらげら

げらげら

げらげら

げらげら

げらげら げらげら

げらげら

げらげら

男が。女が。老人が。赤子が。

学者が。医者が。学生が。病人が。

罪人が。市民が。商人が。農民が。

笑っている。嗤っている。嘲笑っている。

鼠に顔を貼り付けて。鼠の顔を人の形に歪ませて。

全ての鼠が、人の顔で嘲笑している。

「それじゃ、用意はいいな、共犯者たち」

その中心で、ニヤルラトホテプは声高らかに叫ぶ。楽しそうに。愉しそうに。世界の全てを嘲笑うかのよう。

「“火龍”の誕生を祝福し、貶そう。

“階層支配者”の誕生を祝福し、貶めよう。

煌びやかな祭典を、死と恐怖で埋め尽くそう」

さあ——鼠はもう忍び込んでいるぞ？

「——太陽<sup>火龍殺し</sup>墮としを始めよう」

## 第二十七話 「お祭り、楽しむといい」

「ノーネーム」の本拠には巨大な地下階層が存在する。

今となつては見る影もないが、かつては栄華を誇った一大コミュニティの跡地。子供が数十を超えて百人単位で収まる広大な屋敷と、その人数を以つてして尚なほ耕しきれないほどの面積を有する荒れ果てた土地は、今も変わらず残っている。

そして当然、残されたそのスペースは横に限らず縦にも広がっている。

本拠地下三階。そこは莫大な量の書物が収められた書庫だ。見渡す限りの本棚と、床から天井を繋ぐほどの高さを持つそれにびっしりと隙間なく詰められた本の数々。その数は、初めてここを訪れた時に問題児筆頭逆廻十六夜が十万を超えた辺りから数えるのを諦めたほどである。

目算で見積もつてもその十倍以上は軽々と超えるであろう宝の山の中心で、今、十六夜は目を覚ました。

「……ん……御チビ、起きてるか？」

「……くー……」

水没して壊れたヘッドホンの重みを確かめながら、彼は傍らで分厚い本に頭をもたれて眠っているジン・ラッセルに問いかけた。

返ってきた返事は幸せそうな寝息。そりゃそうか、と十六夜は当然のものを見たと言いたげに、閑散とした書庫に欠伸を響かせた。

ここ最近の十六夜にとつては見慣れた光景である。朝早くに本拠に用意された部屋を出て、書庫に向かい、月が高くなるまで本を読み漁る。もしくは、朝早くから街へ赴いて、開催されているギフトゲームで賞品を軒並み搔つ攫つてきてから本を読み漁る。それが、ペルセウスとの一件が片付いた後の一ヶ月間の十六夜の生活サイクルだった。

知識はいくらあつても足りない。以前の世界では、世界に神秘などないことに半ば絶望にも似た悲嘆を抱いていた彼だったが、箱庭に来てからはそうではない。

空が青い。天幕に覆われた見渡す限りの未知の群れが、波濤となつて新たな来訪者逆廻十六夜の到来を歓迎している。なら、それに報いるのも挑戦者の役目だと、彼は日夜本の中で未知との格闘を続けている。

元より勉強家の気があつた十六夜には、そのサイクルを繰り返しても飽きるなんて無縁の言葉だつた。超人並みの体力と集中力の成せる技だ。それに付き合っているジンの忍耐と向上精神は褒められて然るべきだろう。

しかしそれでも、彼とて一応人間の範疇に入っている生物だ。こんなことを一ヶ月も続ければ体力の限界も訪れるというもので、昨夜はついうっかり眠りこけてしまった。『ノーネーム』の子供達には難しい書物ばかりが揃っているので、早起き自慢の幼子ですらここに来ることはない。結果、すっかり彼ら二人は夢の中に誘いざなわれてしまったのだ。

——昨日はどこまで読んだっけなあ。

寝てる間に取り落としてしまったのであろう、足下に転がる一冊の本を取り上げて、十六夜はページを右から左へ流していく。

紙が捲れる小さな音が、何も聞こえないヘッドホン越しに十六夜の脳を叩く。それに呼び起こされるように、思い出したのは一ヶ月前——

レテイシアが帰還した日のことだつた。

クルーシユチャ方程式から飛び出した黒い男。忌々しい邪神。その嘲りは、今でも耳に焼き付いている。

十六夜が日夜この書庫に入り浸っている理由は他にもある。未知を求めて。それは当然として、もう一つ——ニャルラトホテプについてを知るためだ。

クトウルフ神話に語られる神性。変幻自在のトリックスター。ラヴクラフトの夢から生まれた災厄。そんなことは知っている。十六夜が求めたのはそれ以上のこと、即ち表の世界には伝わっていない箱庭での記録である。

数千年前、白夜叉を陥れた全容は、他ならぬ白夜叉本人から聞いた。わずかな期間で二つの街を壊滅に追いやり、天軍の長たる帝釈天をも表舞台に引きずり出した挙句、最終的に白夜叉が仏門に下り弱体化す





「なら、それを全部でできるようにしよう」

結果、ニヤルラトホテプは「無貌」になった。この邪神に、忌々しい生物ども以外からの信仰があるとすれば、それは作家からのものに他ならない。展開に詰まった。設定に無理がある。関係性が矛盾している。そんな時、合法的に使えぬ都合主義はないものか。出しても批判が少なく、「ああ、こういう物語だったのか」で片付くデウス・エクス・マキナ機械仕掛けの神はいないものだろうか。

物語を綴る者たちが、誰もが一度は願うこと。テーブルの上を走るインクを、ペンの先から滲み出す物語を、これからも続いていくのであろう人形たちの人生を、未完の結末を———どうかこのまま放り出してしまいたい。

そんな願いの果てに生み出されたものがニヤルラトホテプなのである。箱庭にも本があるのだから、それを書いた作者がいる。なら、どこかにいないだろうか、ニヤルラトホテプについて書かれた本が。

自堕落な作家たちの願いの受け皿を、十六夜は探していた。

箱庭に存在する修羅神仏たちは、基本的にはその逸話や史実を辿ることで打倒することが可能だ。それは彼らがギフトゲームを自らに因んだものにする以上、それが明確な弱点として存在するからである。

ギリシヤのアクレウスなら踵が不死性の抜け穴であるように。北欧のオーデインがフェンリルに飲み込まれたように。そういった、過去の資料に基づく弱点が、箱庭では顕著に現れる。

故に、十六夜はニヤルラトホテプに関しての文献を探していたのだ。もしかしたら、表の世界に伝わっていないだけで、奴には何か付け入る隙があるのかもしれないと、そう考えて。

———これは読み終わっていたか。

拾った本は既に昨夜の段階で後書きまで到達していた。最後の一行を読み終えて、手にした葉を机に置く。

書庫に静寂が戻る。薄暗い天井を仰いで、薄く目を閉じる。

一度は去った眠気が再度十六夜を襲う。うつらうつらと夢と現実の境が曖昧になろうとしていた、その時。

「十六夜君！ 何処にいるの!？」

同じコミュニケーションの仲間、兼問題児組の同胞である久遠飛鳥が、散乱した本を踏み台に十六夜へとシャイニンググライダーで強襲した。

あまりにも鮮やかな姿勢と鋭い衝撃。食らえば常人ならひとたまりもないことは確定的に明らかかな一撃。その戦意にあてられ一瞬で目を覚ました十六夜が防御に持ち出したのは、隣で涎を垂らして眠りこけるジン＝ラッセルその人だった。

響く鈍い打撃音。次いで、美しい三回転半の螺旋軌道を描いて吹き飛んでいく深緑の少年。本棚に激突し、無数の本の山に埋もれた。後から書庫の扉を通り抜けた、飛鳥を追ってきたのだらう狐耳の少女。リリが驚愕の悲鳴をあげる。

埃が舞う中、目を回しながら本の中から頭をさすってジンが起き上がった。否が応でも眠気は醒めて、気絶一步手前の意識を揺れる頭で認識する。

——その時。

バサリ、と。他より遅れて、本棚の上から一冊の本がジンの上に落ちてきた。それは他の書物と同様辞書さながらの分厚さを持ちながら、しかし他とは違う異質感を放っていた。

「……なんだろう、これ」

視界の端で「サウザンド・アイズ」の蠟封がされた招待状を掲げる飛鳥も、面白そうだと笑う十六夜も目につかないほどに、ジンはその本から目が離せなくなっていた。何故かはわからない。しかし、彼はその重さや装丁の質感、そして何より瞳の描かれた五芒星にこの世ならざる妙な魔力を感じていたのだ。

そつと手を伸ばし、表紙に指をかけ、いざその中身を読み進めようと本の世界へ自らを潜り込ませようとした——刹那、「それ」はいた。

「あー、面倒なんだよね、それ」

ジンの追突した本棚の正面、その上方。天井近くの本の上から、この世全てを見下すような声音が木霊する。

その声にいち早く反応したのは十六夜だった。声の主も視認しな

いまま、手近にあつた椅子を掴み第三宇宙速度で投擲する。結果生まれる風圧と衝撃波が辺りに広がり、飛鳥たちは防御を余儀なくされた。

その中で、下手人たる十六夜だけはじつとその一点を見つめて警戒態勢を解かなかつた。というのも、彼には一つ不可解なことがあつたからだ。

椅子を投げつけた先ではもうもうと埃が舞っている。ある程度の質量を持った物質を超速度で投げつけられた故にそれは当然の結果であるが——しかし、それならば何故椅子の破片は一個たりとも飛び散っていない？

煙が晴れる。答え合わせだと言わんばかりにゆっくりと明瞭になつていく視界の中で、十六夜たちはそれを見た。

彼らの瞳の向けられた先、ニヤルラトホテプは嗤っていた。投げつけられたはずの椅子を手に持ち、余裕にも見えるような三日月を口に湛えて。

そこまではまだいい。十六夜とてこれで奴に傷をつけられるとは一切思っていないかつた。問題はその後で、その行動こそ十六夜が真に驚愕したものだつた。

ニヤルラトホテプが腕を引きしぼり、後ろ手に構える。その腕が異形の肉塊へと変質し、木製の椅子を轢き潰していく。十六夜はニヤルラトホテプの意図を察し、自らの後ろにいる飛鳥たちに向かつて叫んだ。

「全員伏せる——っ！」

そして放たれる木片の凶弾。十六夜は仲間を守るため、一人それに立ち向かう。

十六夜が驚いたのは、反撃されたことそのものだ。彼がニヤルラトホテプと遭遇してからの一ヶ月間、敵対的な立場となつたことは確定しつつもニヤルラトホテプから物理的な反撃を受けたことは一度もない。

五体を駆使して飛来する礫を叩き落とす。顔目掛けて飛んでくるものを右手で握り潰し、胴体目掛けて飛んでくるものを左足で踏み潰

し、飛鳥と耀を狙ったものは先ほど潰した木片で撃墜した。

凡そ一秒にも満たない攻防。その最中<sup>さなか</sup>で、十六夜はニヤルラトホテプがこのような行動に至った意味を探っていた。

ニヤルラトホテプは、どういうわけか“ブローネーム”の面々に対して直接的な危害を加えようとしな<sup>い</sup>。そんな奴からの突然の攻撃――何か裏があると、十六夜は考えた。

実際、その思考は当たっていた。全ての凶弾を撃墜し終えた十六夜がニヤルラトホテプの方に目を向ければ、そこにいるべきはずの影はなかった。

――どこだ。どこへ行った。

全感覚を研ぎ澄まし、居場所を探る。無論、十六夜とてこの程度であの邪神が見つかるとは思っていない。気配を感じ視認する程度で見つかるのなら、ニヤルラトホテプは変幻自在のトリックスターなどと呼ばれたりしない。

上を見る。いない。横を見る。いない。下を見る。いない。当然、飛鳥や耀の様子も探る。彼女らは驚愕に顔を染めてこちらを見ているのみ。二人目が出現していたりしない辺り、ニヤルラトホテプが変身している可能性はないだろう。

ジンは何が起きたのか理解できていないのだろう。本に埋もれたまま、困惑しがちに十六夜を眺めるばかりだ。正真正銘、ニヤルラトホテプは彼の視界から消え去っている。

「アイツ、どこへ……」

「どこだよ」

瞬間、一つの本棚が崩壊した。

降り注ぐ書物の雨。その一つ一つが意思を持っているかのように十六夜を狙う。ここだよ、という言葉の意味。それがただの本の群れなら、たとえ万の数<sup>かず</sup>が殺到しよう<sup>と</sup>十六夜が意に介<sup>か</sup>することはない。そうではないからこそ、ニヤルラトホテプは彼の上<sup>うへ</sup>を行く。

落ちてきた本に変化があった。ページの一枚一枚が嘲<sup>あざわら</sup>むようにパラパラとめくれ、十六夜の身体をその間に挟んでいく。本に噛<sup>か</sup>まれる、とでも言え<sup>い</sup>ばいいのだろう。本来なら使わ<sup>つか</sup>ないであろう表現で形

容してしまえるほど、それは奇妙な光景だった。

十六夜は理解した。先程のニヤルラトホテプによる攻撃、その意味を。

即ち、アレは単なる目眩めくらまし。一瞬でも十六夜の注意をニヤルラトホテプから外させることが狙いだったのだろう。その隙に、あの邪神は本棚の内に潜んだ。そこからは単純な話で、全ての本とニヤルラトホテプ自身が入れ替わってしまえばそれで終わりだ。

要するに、この本の雨の全てはニヤルラトホテプの肉片なのだ。意思を持つているようだ、など当然のことであった。その通り、これは悪意意思を持つ凶器に他ならないのだから。

振り払おうと身体を捻るも解けない。その間にも次々と本は十六夜を囲み、その重圧を彼に押し付けていく。

白夜叉に貰った「ギフトカード」によつてさえも正体不明UnknOWNと判別された異能ギフトを以つてしてなお、その拘束は弛むことはない。むしろ数が増えるほど重みは増し、さしもの十六夜もこれには耐えきれなかったのか、膝をついた。

「しばらく座つてなよ。なに、大丈夫だ、変なことはいないさ」

本の幾つかが集まり、不気味な肉となつて結合する。そこから現れたのは、影を塗り固めたかのような姿の邪神。

「お前たちも大人しくしてるといい」

ゆらりと影が振れるように飛鳥と耀の方を向いた。そこにいた彼女らは、片や剣を構え、片や身体に頑強な獣の力を宿した状態だった。今にもニヤルラトホテプに襲い掛かりそうな体勢で邪神の視線に縫い止められた少女たちは、向けられた混沌の瞳から抜け出し奴に一泡吹かせる方法を知らず、ただ中途半端に立ち尽くすしかできなかった。

「——いい子だ」

問題児三人を抑え、ニヤルラトホテプはジンへと向き直った。滑るように、或いは這うように、本に埋もれる彼の前へと立つ。

「まさか、そんなものが「ノーネーム」にあるとはな。……あの白女辺りが過去に力でも貸したか？ それとも銀腕のヒゲか？

まあいい。どちらにせよ、それは渡してもらおう」  
影が蠢く。まるで産まれたばかりの幼子の頸に剃刀かみそりを当てるかの  
ように緩慢な動きで、ニヤルラトホテプはジンの持つ謎の本へと手を  
伸ばす。

ジンはただそれを見ているだけだった。抵抗も逃走もしない。で  
きない。ただ、目の前の邪悪に吞まれている。まだ十一しか歳を重ね  
ていない少年に、果たしてその時何ができたというのか。あらゆる意  
味で桁違いの相手による魔手を払いのけられる力は、今の彼には無  
かった。

そして、その手が本に触れようとした——次の瞬間。

「っ——」

閃光が走る。ニヤルラトホテプの手が弾かれたように吹き飛び、遠  
く離れた本棚にぶつかりトカゲの尻尾のように脈打つ。

人間で言えば、例えるなら冬場に金属に触れた時に静電気が走った  
ようなもの。しかし、その威力は片腕を消し去るのに十分なものだ  
た。

消えた腕をしばらく見つめ、やがて視線を本へと移す。それを抱え  
るジン自身事態をよく理解していないようで、これまでの中で一番と  
もいえる困惑を露わにしていた。

「えっ……なに、が……」

「驚いた。ああ、純粹に驚いた。そいつにそこまでの力は本来存在し  
ないんだが……いや、普通に考えればわかることか。そういえば、こ  
こは箱庭だった。旧神の印に旧支配者を退けるだけの力を宿せる神  
仏がいてもおかしくはないのだろう」

ぽつりぽつりと言葉の雨を溢す。全員が突然の出来事に啞然とす  
る中、十六夜だけがニヤルラトホテプの言葉を正確に理解していた。

ジンの持つ本に描かれているのは「旧神の印」と呼ばれる魔術的  
印章である。ニヤルラトホテプが「白女」と呼んだ旧Elder神God、ヌトス  
IIカアンブルによって考案され、その保持者を旧Great支配Old者Onesの手先  
から守護すると言われるものだ。

ニヤルラトホテプは後世の創作により「外なる神」に分類された

とはいえ、本来その呼称はヨグソトース単体を表す名称であり、アザトースやニャルラトホテプを含む一派が旧支配者として数えられること自体は珍しくない。故に、旧神の印がニャルラトホテプの手に反応したことは不思議なことではないのだ。

問題は、先の発言の通り旧神の印には邪神クラスの存在を退けるだけの力はないということ。本来であるならば、ニャルラトホテプの手は旧神の印による妨害を容易く食い破り、ジンから本を奪い去っていただろう。

それができなかつた。意味するところは即ち、ニャルラトホテプへの明確な対抗手段が一つ存在することが明らかになったということ。

「旧神さまさままだな。流石、オーガストが善と呼んただけはある」

パチン。ニャルラトホテプが残った片腕の指を鳴らす。それだけで十六夜を縛っていた本は全て消失し、彼は自由な身となった。

「どういうつもりだ」

「どうも何も、もう必要ないからだよ。片腕吹き飛ばされてムキになるほど、こつちも切羽詰まってるわけじゃないんでね」

影が落ちる。ニャルラトホテプの身体は黒い液体の如き漆黒に溶けていく。待て、と十六夜が叫ぼうとした次の瞬間には、そこにもうニャルラトホテプの姿はなかつた。

「では、また。最後にレティシアに挨拶でもしようと思っただけど、それは今度にしよう。」

じゃあね。お祭り、楽しむといい」

その言葉だけを残して。

破壊の跡と残骸を積み上げて、ニャルラトホテプは暁に消えた。



そして、舞台は北へ。

新たな龍の誕生を祝おう、狂信者諸君。

疾風怒濤の誕生祭を、思う存分楽しもうか。